

沖縄県立博物館

紀要

第29号 (2003)

〈民 俗〉

- 桃原茂夫：大宜味村謝名城の住居習俗……………1

〈自然史〉

- 宮城勉：名護市産の新生界化石について……………11
 田中聰・嵩原建二：先島諸島における野生化したインドクジャクの分布と現状について……………19
 姉崎悟・嵩原建二・松井晋・高木昌興：大東諸島産鳥類目録……………25

〈歴 史〉

- 園原謙：大正時代における沖縄県の文化財指定関連の行政文書について……………55

沖縄県立博物館紀要

第29号(2003)

沖縄県立博物館

目 次

CONTENTS

〈民俗〉 FOLKLORE

桃原茂夫：大宜味村謝名城の住居習俗 1
Shigeo TOBARU: Folkways of Dwellings in Janagusuku, Ogimi Village, Okinawa

〈自然史〉 NATURAL HISTORY

宮城勉：名護市産の新生界化石について 11
Tsutomu MIYAGI: Cenozoic Fossils from Nago City, Okinawa Island, Japan

田中聰・嵩原建二：先島諸島における野生化したインドクジャクの分布と現状について 19
Satoshi TANAKA and Kenji TAKEHARA: Distribution and Present Status of Feral Common Peafowls *Pavo cristatus* in the Sakishima Islands, the Ryukyu Islands

姉崎悟・嵩原建二・松井晋・高木昌興：大東諸島産鳥類目録 25
Satoru ANEZAKI, Kenji TAKEHARA, Shin MATSUI and Masaoki TAKAGI: A Checklist of the Birds in the Daito Islands

〈歴史〉 HISTORY

園原謙：大正時代における沖縄県の文化財指定関連の行政文書について 55
Ken SONOHARA: A Note on the Okinawa's Administrative Documents Regarding the Designation of Cultural Properties in Taisho Era

大宜味村謝名城の住居習俗

桃原茂夫*

Folkways of Dwellings in Janagusuku, Ogimi Village, Okinawa

Shigeo TOBARU*

1 謝名城の位置と歴史



図1 謝名城の位置と地図

大宜味村字謝名城は、那覇から約93キロメートル北にある山原の村である。東シナ海側を北上し、喜如嘉部落から東に約10分、喜如嘉小学校を越えたところにある。集落は、根謝銘グスク（標高115m）の南西から根謝銘川沿いに展開し、木材や竹類の山林資源には恵まれているが、水田は少なく、畑も段々畑である。そのため、戦前から大宜味ゼークとよばれるほど出稼ぎが多かった。人口は、1968年12月現在、446人（男191、女255）、世帯数106であるが、本籍人口が958人であるから過疎化に変わりはない。

謝名城は、もともとインジャミ（根謝銘）、テンナス（一名代）、グスク（城）と三つの別々の村であった。明治36年に合併し、各字は小字になり、小字名から一文字ずつとって謝・名・城と名付けた。小字根謝銘は、ガナ

ンハナ山の麓、根謝銘川にそって、共同店や公民館等もあり、謝名城の中核をなす。小字一名代のナスは、苗代を意味し、低い平地の水田地帯を前にしている。根謝銘川の下流域には広い水田地帯（喜如嘉ターブックワ）が開けている。小字城（グスク）の集落は、共同店の右手から、旧道の急な細道を登っていく。隣字の田嘉里に通じるネザメクビーという切り通しを左に見ながら、右手に登ると古木や岩石の多い小字城に着く。途中、西下をふり返ると小字根謝銘、小字一名代のたたずまいと、遙か喜如嘉の先に海が広がる。

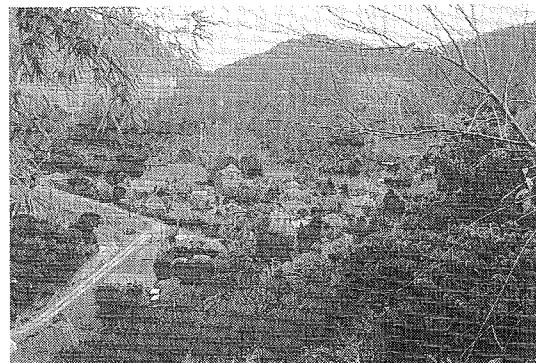


写真1 根謝銘のたたずまい

小字城から東に山道を登り詰めると上グスク（根謝銘城）に至る。ウンガミには、大グスクと中グスクという2つの御嶽や、神アサギ、祠、拝井泉等があり、旧暦7月にウンガミ祭祀が行われる。

* 〒903-0823 那覇市首里大中町1-1 沖縄県立博物館

Okinawa Prefectural Museum, 1-1, Onaka-cho, Shuri, Naha, Okinawa 903-0823, Japan

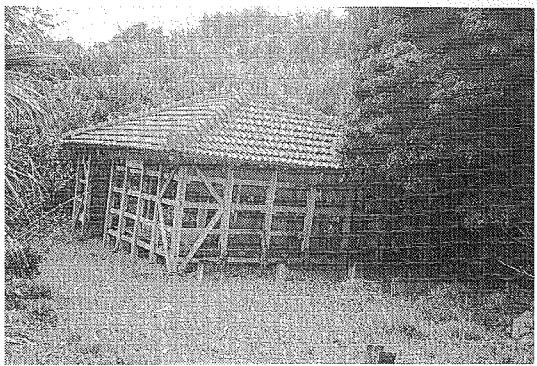


写真2 神アサギ

2 屋敷囲

屋敷囲はカクイといい、生垣が主で、石垣はほとんどみられない。グスクやテンナス後方の斜面にある屋敷では、自然の地形を削って、土壠を築いてあるのが見られる。最近になって、ブロックを積むようになった。屋敷囲いの樹木としては福木、ユシギ、ギンギチ等が多い。屋敷木は、カジゲーシ（風返し：風除け）が目的で植えてあるのだから、特に植えるのを忌む木はないという。福木が防風林として最適であり、最も多く植えられている。ギンギチ（月桂樹）は、枝葉を水田に緑肥としても利用できるという。

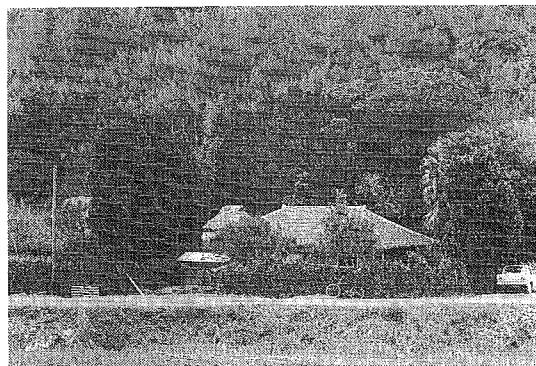


写真3 屋敷囲い

屋敷木で特に古くなった木には拵みをする。屋敷内の木であってもむやみに伐ると、キリキザワイといって、病気や、怪我等のもとになる。キリキザワイで死ぬこともある。屋敷の木は、屋敷の神が大切に守り育てたものであるから伐ると祟りがある。テンナスの屋号タヒニーの金城ハルさん（73歳）の場合は、屋敷木を伐る時や、キリキザワイの時には次

のように拵む。

(1) 屋敷木を伐る時の唱えごと

<唱え言葉>	<対訳>
ウカミヌ	御神が
アタラハヒミソーチ	大切になさって
フルイーラチエーヌ	育てあげられた
ヒーヤイビーシガ	木でございますが
〇〇ガ	〇〇（家主名）が
イリユーサービーンチ	入用したいと
キーヤトウイビートゥ	木を探りますので
イリュー シミティ	入用させて
クイミソーチ	下さって
イチガデーン	何世代も
ユーマチデーニ	世の末代までも
キリキザワイヌ	伐り木障りが
アインディイチエー	あるということも
アラシミソーラングトゥ	あらせられずに
タシキティクイミソーリ	助けて下さい

(2) キリキザワイの時の唱えごと

<唱え言葉>	<対訳>
ウカミヌ	御神が
アタラハ セーミセーヌ	大切にされている
ヒー	木
ユリーン サングトゥ	許しも受けずに
キッチ	伐って
ブリイ ナイビティ	無礼なりまして
ウヌフトヌ ワカラ	そのことを判らず
キッチ	伐って
ウリガ サワイヌ	その障りが
アティスットウ	あっているので
チューガヒー	今日の日
ユカルヒニ	佳かる日に
クリガブリーヌクトゥ	それの無礼のこと
ウサギヤビークトゥ	祈願をしますので
イチ マチレー	何時 末代
ユー マチレー	世 末代にも
クヌフスクヌクトゥヤ	この不足のことは
アラチ クイミセーナ	あらせて下さるな

3 門

門は、ジョウといい、リージン（靈前）の

向いている方向に開けるのがよいとされる。たいてい、仮壇の正面に開ける。

門に入ったところにはヒンブンがあり、外から歩く人の視線を遮っており、屋内のチラガタハ（顔隠）の役割をしている。

門の寸法は大工がとる。屋敷の角から門をとるのは悪い。

旧盆は、七月十日から御迎えと言ってウザキ（酒）、ウンパナ（花米）を供え、トウブサ（松明）をともし、門からグソー（祖先）に合図する。正月元旦は、門に松竹をたてる。屋敷を借りて住宅とする時は、門から屋敷の内に向かって、「誰それの屋敷を借りて住まいますのでよろしく」と祈願する。

家を建築して、ヤーウチー（引越）の日には、《ジョーイリファジミ》（門入始）の祈願儀式を行う。ジョーイリファジミ（門入始）は、カリーチュ（嘉例人）を頼む。カリーチュは、家庭が繁栄し、当家の主人とフシ（干支）のあう人の夫婦とその長男で、酒（今は金銭）を持って門から入ってくる。当家人々は、家の中で待ちかまえていて、「嘉例人メンソーリヨ（いらっしゃい）」と招き入れ、嘉例人の持つて来た酒で、嘉例人とサカンケ（酒盛り）をして、ご馳走でもてなす。ジョーイリファジミの日は、嘉例人が来る前に家の拝むべき所は拝んでおく。その唱え方は次の通りである。

＜ジョー入りファジミの唱え言葉＞

フガニジョー・ナンジャジョー・チュクティ、キューヌヒーヤ、カリーナチュガ、ジョウエイリハジミサビートウ、ジョーバラヌ、ウカミシ、タシキティ、キミソーチ、ヌースフスクン、ネーニグウトウ、クアーンマガ、リッシンサカイ、シミティキミソーリ

（黄金門・銀門・作テイ、今日ヌ日ヤ、嘉例ナ人ガ、門入始ミ、サビートウ、門バラヌ御神シ、助キミソーチ、何又不足ン、無ングトウ、子孫、立身榮イシミティ、呉イミソーリー）

＜大意＞

黄金のような門、白銀のような素晴らしい

門を作った今日、嘉例人が門入始めをしますので、門の神様でお助け下さり、何不足なく、子孫を立身、栄えさせてください。

もし、ヤーウチーの日にジョーイリファジミの祈願が出来なかつた場合は、別の日に、屋敷又御願をする（屋敷神の項参照）。

4 家屋配置と間取

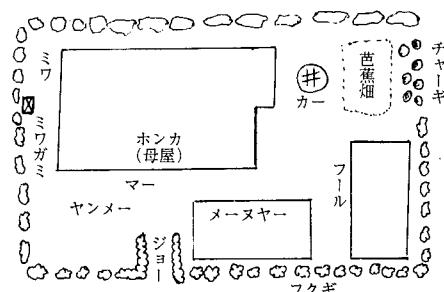


図2 屋号 イーグチの配置図

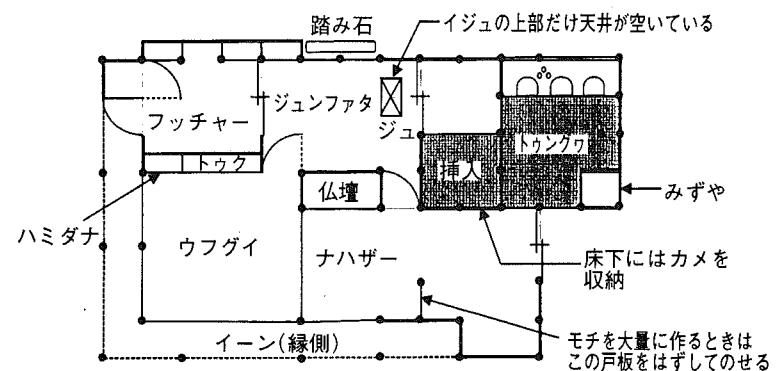


図3 間取図

屋敷内の上手（多くは、母屋の東側）をミワと称し、屋敷の神がいるといって、ジョーヒ（上日：正月等）に拝んでいる。家のタムキ（配置）は、外に向かって座った時、左にミワがあるのがピジャイムケー（左向き）で、右にあるのは、ニギムケー（右向き）という。一名代はほとんどピジャイムケーである。

上座はウフケイ（大庫裏）、中座はナハジャーと称す。

ナハジャーには、仮壇（靈前ともいう）がある。仮壇は、小さい家では三尺、大きい家だと一間の幅でとる。ウフケイには、床の間と神棚がある。床の間は、小さい家でも一間とる。その上手に神棚を作る。神棚は仮壇よ

りも高く作る。

座敷のゆかにはトウマという藁製の敷物を敷いた。また、出入口のゆかには、カマンタとか、シキンタという藁をグルグル巻いた敷物をおいていて、外から入るときの足拭きにした。シキンタは、年寄が座る敷物としても利用した。

縁側は、イン（縁）と称され、特定の富豪の家にだけ見られた。今では、一般の家にも見られる。

昔は、トングア（台所）は別棟であった。トングアの出入り口には、草を敷いておき、出入りのたびに踏みつけてから、畑にすき込み肥料にした。台所は、ジブク（土間）であった。土間は煮炊き用の燃料の屑芥にまみれているので、フクチチ（埃）ともよばれた。

トングアには、たいてい大中小三組のトルハ（竈）があった。

囲炉裏ばたはジュンファタという。今では石油ストーブを使用する家が多く、ジュ（地炉）は老人のいる一部の家以外では、使用されなくなってきた。ジュは火を温めたり、茶を沸かしたり、夕飯をとるところである。ジュのある座をウチと称し、家族のくつろぐ座である。接客は前座です。以前は、ジュンファタ（地炉端）で昔の話を聞いたり、謎々をしたりした。また、産婦がお産をする部屋としても使われた。年寄りの寝室でもあった。以前は、その床は一部分が竹敷となっていた、夜間に、屋内で床下に小便ができるようになっていた。

就寝にはフッチャヤー（裏座）があてられた。男の子は、家の前方、女の子は家後方に寝かせる。新婚夫婦の寝室は家によってちがう。

メースヤーという接客用や、年寄の寝室用の別棟は、クラントー、ハタムンダーという富農家にあった。メースヤーとフンケ（本棟）とは廊下でつながっていた。

物置は、タムンヤー（薪屋）とかムヌウキと称す。豚小屋をフールと称す。昔は、風呂場はなく外で湯をわかして使用したが、夏は川で水浴びをした。

屋敷内にはたいてい、アッタイという野菜畠がある。

クラ（高倉）が数軒、残っているが、クラには往時のように米は入れていない。農具類を収めている倉庫となっている。クラの下は薪置きとしていた。クラの特徴は、釘が一本も使用されてないことや、高床で壁が斜めになっていて、ネズミが侵入できないようになっていること等であるという。キザイ（はしご段）は必ず奇数にする。現存しているクラはユチマタ（四股、四本柱）だが、昔は、より規模の大きいムチマタ（六股、六本柱）や、ヤチマタ（八股、八本柱）のクラもあったという。



写真4 クラ

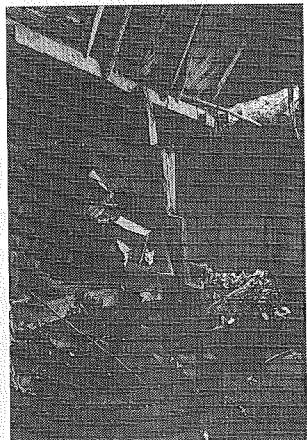


写真5 クラのキザイ(はしご)

5 建築用材

山原は、山林があるので、木材には不自由しなかった。山から木を伐る時は、ウース（斧）で倒し、現場で角材に仕立ててから運び出した。大工は、それをティーン（手斧）で削って仕上げて使用した。シージャー（椎）は水に強く、大木を伐り、タイビキ（二人挽）鋸で、山で切断してきた。茅は、竹茅で部落の山野から刈ってくる。

6 家屋の構造

昔の家は、柱を土に埋めた粗末な構造のアナヤーが多かった。アナヤーのフビ（壁）とロウソク（天井張）には、竹を叩いて割って、それを編んだチヌブを用いた。ムヤヤーという構造の家は、マールーヤーとは違って、体裁もよく、長持ちする。謝名城は、材木が豊富なので、ムヤヤーが多い。

マールーヤーは、ホンカ（本棟）と台所を別棟で造り、軒と軒をシージャー（椎の木）製の樋でつなないだ。マールーヤーの場合、ゆかは板敷だが、アナヤーでは竹敷きである。

7 屋根

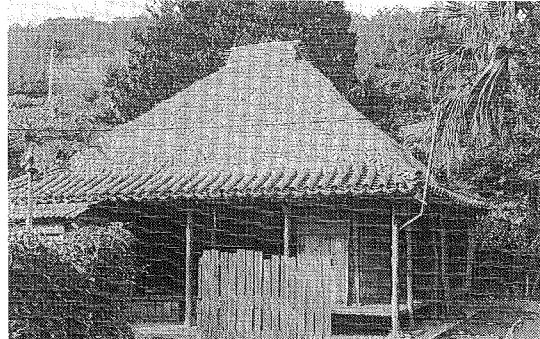


写真6 茅葺き屋根と軒瓦



写真7 茅葺き屋根と物置きのセメン瓦屋根

屋根は、竹茅葺きの寄棟が主である。軒瓦はアマダイガーラ（雨垂瓦）といわれ、50年ほど前に富豪の家から作り始めた。当時は、それをやるのは、クラヤー（綺麗な家）だった。アマダイを拡張した棟をハギヤーという。カヤヤー（茅家）で雨漏りする箇所は茅を挿して修繕する。茅葺き屋根の勾配は、ヒラ三尺に縦三尺のカニクーベ（金勾配）。瓦屋根の勾配は、ヒラ一尺に縦五寸五分。イキムシヤー（生虫屋：畜舎）は、たいていナガヤー（長屋：破風葺、切妻屋根）である。

8 茅替

家屋の普請や茅の葺替は、イーセー（助け合い、結い）で行われた。標準的な建坪は、普通十二、三坪から二十坪の広さであった。屋根に使用される茅は、一坪あたりトウカタミ（十担ぎ）分を要した。二尺周りを一束とし、六束でチュカタミ（一担ぎ）となり、一人前の男子の仕事量である。

9 大工

家普請は、部落の六十歳以下の男たちが行った。当部落は、昔から腕のいい大工職人が多かった。しかし、近頃では、茅葺き屋根を作らなくなつたために、軒の茅を綺麗に刈り上げる専門技術も見られなくなつた。その道具である、ヤバサミを、上手に使える人も、ほとんどいなくなつた。また、チヌブを編むのも専門技術が要るが、編める人は少なくなつた。

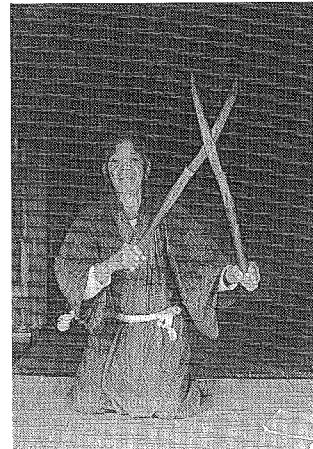


写真8 茅刈り鋏を持つ野里吉吾郎さん

10 建築儀礼

(1) チチビキ

家を建てる前にまず屋敷でヤシキビキ、チチビキ（土挽き：地鎮祭）を行う。敷地の中央で、花米一合、酒一合、線香十二本（二平）、盃を準備して、東に向かって次のように唱えて拝む。

「某々ヌ、ヤータティーンディイチ、土ビキサビークトウ、屋敷ヌウカミシ、タシキミソーチ、ヌーグウトウンネーラングトウ、タシキミソーチ、ヌーグトウンネーラングトウ、タシキミソーリ」（大意：某々が家造りをするため、地鎮祭をしますので、屋敷の神で、加護してください）

そして、フミ（干支をあてて、フミに当たる）の人が東に向かって、鍬で三回土を掘る。

(2) ヤマヌウグワン（山の御願）

建築用材を山野から採りに行く前に、仕事中の安全健康を願う。山御願をしないで、山から材木を採ったので、実際にハブに咬まれた人がいる。

根神（現在はトートゥサーが代理）と家の婦人がニガミヤーのフィヌカン（火の神）等を拝む。

<唱え言葉>

ウヌカイミソーリ、ヌーヌチュヌ、ヤーチュクインディイチ、ヤードーグトウインディイチ、山ドウマイシ、ヒートウインディチヤイビートウ、ウニゲーサビラ。

ヤマヌ、クバンクブヌウカミ、ファイジョウ、フェーヌヤマヌ、ウカミシ、タシキティ、キミソーリ。

ヌーヌ、サワイン、ネーニングトウ、ティビサチューク、ウタシキミソーチ、ウトゥルサウイミサン、ウシヌキミソーチ、ウースン、ノホギン、ハッタナン、ムッチージ、ヒートウインディイチ、ヤイビートウ、ウニゲーサビラ。ヤマヌ、フバンクブヌ、ウカミシ、ターマチヂ、マタ、シジシジクブクブヌウカミ、ファイジョウ、フェーヌヤマヌ、ウカミシ、タシキティ、キミソーリ。

ヌーヌサワイン、ネーニングトウ、ティビサ

チューク、ウタシキミソーチ、ウトゥルサ、ウイミサン、ウシヌキミソーチ、ウース、ノホギン、ハッタナン、ムッチージ、ヒートウイイヤビート、ヌーヌサワリンネーニングトウ、ウタシキミソーリ

<訳>

お聞き取り下さい。何（干支）の人が、家造ろうとして、家道具採ろうとして、山泊まりして、木を採ろうとしておりますので、お願ひいたします。

山の、フバンクブの御神、ファイジョウ、南の山の神で、助けてください。

何の障りもないように、手足強く、お助け下さり、恐れおののくことも、押しのけて下さり、斧も、鋸も、刀も、持つていって、木採ろうしておりますので、お願ひします。

山のフバンクブの御神で、ターマチヂ、また、シジシジ、クブクブの御神で、助けて下さい。何の障りもないように、手足強く、お助け下さり、恐れおののくことも押しのけて、斧、鋸、刀も持つていって、木を伐りますので、お助け下さい。

(3) ティンダティ

工事始めの儀式。大工が、建築敷地の真ん中で、木材をおいて、手斧で三回切りつける。

(4) インニアギ

棟上げ。工事をする家の繁盛を願って、大工が棟木に塩と、米を吊るす。大工の儀式であり、昔は、何ら馳走等もつくらずに、簡素に行なった。

(5) ウシヌトゥキウガン

丑の刻御願。屋根葺きの前夜、午後11時頃からその家で、女性だけで行われる拝み。部落の根神が二番座のパシグチから外に向かって座し、香炉を縁側に置いて、香をたくさん焚いて祈願する。祈願する内容は、おおむね次のようである。

<唱え言葉>「（諸々の神名を述べて）、木ヌ精、茅ヌ精ヌ御神ン、集マテイ、ファン（判）チチキミソーチ、ヤー建ティラチ、キミソーリ」

諸々の神の名を呼び、村々、マクマクの神

の他すべての神名を述べて、家を建てる前の認めの判を押して下さり、家建てさせて下さい。

線香が燃え尽きたら、供物をサンデー（お下がりをいただく）する。そして、当家の婦人が、根神に祈願してくれた札をいう。供物はファチ五皿（三つでもよい、昔は七つ）、盃七つ、酒一升、花米九合である。この祈願は女だけでやり、その家の戸主であっても男性は屋敷内に入ってはいけない。

(6) フキウガン

葺き御願。インニアギの翌日は、屋根に茅をのせ始める。大工たちが、屋根葺きにとりかかると、葺き終わらないうちに、拝みをするトートゥサー（根神）とその家の親戚の女たちが、お重のお供え物をもって、ヌルヤーに行って、マクマクのユリー（許可）をとる。ヌルヤー火ヌ神、ワハヌル火ヌ神、グスクのフガニマクの神、グスクのニーズの神、根謝銘のニーズウ神、根謝銘のユナハヌマクウ神、ハニバザーヌウ神などを拝む。

(7) イカユーエー

屋根を葺き終わり、イカ（屋根の頂）まで、葺きスピ（首尾：終了）したことを祝う。大工たちが屋根に登って、ファチ、塩、米三合を供えて拝んだのち、祝いをする。

(8) ハヤバナヌウンヌキ

ハヤバナヌキともいう。完成した日に完成祝をしないうちに、工事が無事完了したことを神々に報告し、お礼の祈願をする。この祈願は、できあがった屋内から上座（たいていは東）方向に向かって、根神等が拝む。山の神とリュウグにも祈願する。海と山は夫婦であり、木材を採った山だけでなく、海から砂も採ってきたから、リュウグウにもグフー（感謝）の祈願をする。供物の品物は、丑ヌトゥキ御願と同様である。この供物に盛った九合ウンファナ（花米）は、拝んでくれた根神に持たせることになっている。

(9) ミッカヌユーエー

家を葺いて三日の祝い。ファチ、酒、花米を供えて、ファサグチ（戸口）で拝む。ハヤ

バナウンヌキは、この日にやってもよい。今では、この祝いはやらなくなっている。

(10) ヤーウチー

家移り、引っ越し。家が完成したら、大安吉日を選んで引っ越し。チチニー（つちの日）とピニー（ひの日）はよくないので避ける。満潮時に向かって、塩と味噌をまず始めに入れ、次に火の神を入れる。分家者で、この機会に新たに火の神を仕立てる時は、事前に吉日を選んで火の神石を拾っておく。次に、仮壇、家具の順に運ぶ。ジョーイリファジミもその日に行う。（門の項参照）

11 炉と竈

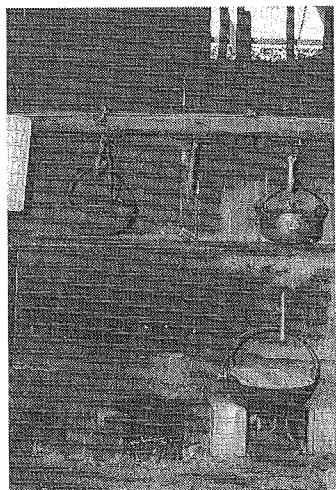


写真9 竈 ヒヌカンは中央 竈にのせてある

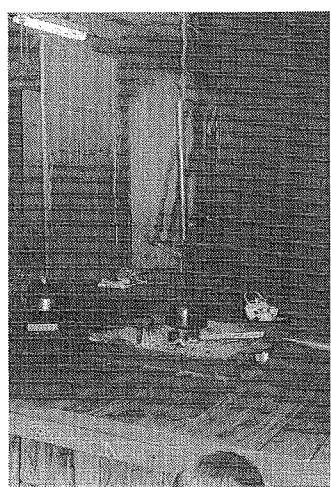


写真10 ジュ

昔の竈は、トゥヌハ（トゥルハ）という土の固まりを鼎型に並べたものであった。粘り気のある土を六、七寸位の高さに練り固めて、それを三個並べて、鍋が安定してのせられるように設置した。炉は、裏座にある。炉端はジュンファタ（地炉の端）と称し、食事をしたり、居間になっている。たいていは、老人の部屋として使用している。ジュはフッチャのほぼ中央に、三尺四方の大きさでとられ、四方を囲んで座れるようになっている。座順は、特に定まっていない。ジュの真中にはガフ（自在鉤）が吊り下がっている。その真上には、マシキという煤除け、薪置きの竹製の棚が吊られている。ジュの上の天井は取り外せるようになっていて、夏は、ガフやマシキを天井裏に収めることができる。また、ジュの上にも板を覆って、普通のゆかのようにできる。近頃は、衣服が豊かになったことや、石油ストーブなども普及したため、昔ながらのジュも蓋を覆ったまま使用していない家が多い。

12 照明

大正の頃までは、ユナビ（夜なべ）シージョーマ（するところ）は、ムチマタグラ（六股倉）の下であった。そのころは、カクドゥル（角灯籠）のもとで、夜なべをした。それ以前の、明治十二年生まれの人たちの頃までは、ウフミチマー（根謝銘ウフ道ともいい、七月ディーを踊る場所）という四辻に集まって、トゥブシ（松明）の灯りで芭蕉芋を績んだ。1964年部落経営で発電が行われて以来、電気が引かれ、集落内に街灯も点いている。

13 飲料水

謝名城は、飲料水には恵まれている。小字城の人々は、ウルンガー、ウルンガヌサー・ヌカーから、小字根謝銘はイズミガ、ハタムンダガーから汲んだが、タグ（桶）で担いで運んだ。つるべは、木やクバの葉で作ったものを使用していた。トゥングアの片隅のファンドゥーヤー（半廻屋）という小屋に瓶を3

個ほど置いて水を溜めた。1966年に簡易水道が施設された。

14 仏壇

仏壇や床は、特に腕の良い大工が造る。次図は、その一例である。

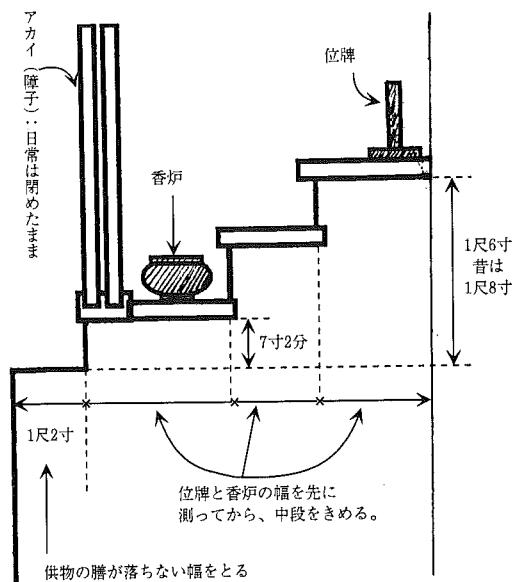


図4 仏壇の断面図

15 屋内に祀られる神

屋内には、ヒヌカン（キネヌヒヌカン：家の火の神）、中柱のある出入り口のハシグチ（走り口）、ウイートウクヌメ（上床の前）、トートーメ（仏壇、靈前）などが祀られている。毎月朔日には、火ヌ神に塩また、家によっては、シンティクアンヌル（千手観音）を祀っている。屋号をあげてみると、小字根謝銘の、アガリ、フシ、マンカー、ウルグチ、ミーゾー、小字城の、ミーヤー、ウイジョー、サーティなどである。

16 屋敷神

屋敷内に、屋敷神という名称の祠はない。しかし、祈願する場所としては、ミワ（屋敷内上手の庭）にあるミワ神や、マーヌ神（母屋の出入り口中柱前の外、東方に向いて拝む）、屋敷の四隅等がある。家で最も重要なものは中柱であるという。中柱前のマーは、子ども

が生まれた時のイジャシファジミ（出し初め・初歩き・プシアジキ）の祈願がなされる場所である。それで、生まれ年の度に、マーにて、マーヌ神ウガミが行われるのだという。マーヌ神拝みは、一月と九月に行い、マーニゲー（願い）ともよばれる。酒、花米三合、盃三つを用意して、線香を使わないで祈る。

また、屋敷拝みが行われるのは毎年十二月のシワーシウガン（師走御願）や、家普請をした時に屋敷荒れとして四十九日後や、ユタから屋敷荒れと判断されたとき等である。

17 魔除けや俗信

- (1) 旧暦8月9, 10, 11日の期間は、ヨーカビーといつて、屋敷内からブナガヤ（妖怪）ホーイン（駆逐する）といつて門のあたりで、ホウチャク（爆竹）を鳴らす。
- (2) 死者の出た家では、四十九日後に、ヒンパンの近くでヤクバレー（厄祓い）の祈願をする。
- (3) ウヌムッチー（鬼餅）の日（旧暦12月8日）には、門に鬼を払うためのメ縄を張る。門の両側に、トビラ木の枝を立てる。そして、左縄に、ムーチーを十字架に括ってつり下げるものを門に張り渡す。なぜトビラ木の枝かというと、トビラ葉はとても臭いからである。冗談で「トビラ葉ヌカバサ、アングアホヌ臭サ」と喻えられるくらいである。
- (4) 謝名城の民家の屋根には、魔除けの屋根獅子はほとんど見あたらない。
- (5) 一年以内に使者の出た家では、ウマチーの前後に、家族全員が一斉に屋外に出て、浜下りをして厄払いをする。

また、野鳥が屋内に入ったときも、厄が入ったとして、厄払いをする。特に、チクク（フクロウ）が屋内に入った場合には、ヤナグリといつて、ヤナムンを流す意味で家族が浜に泊まる。門には、竹竿をX状に交叉させて閉じて、立ち入り禁止とする。浜から戻って屋敷に入るとき、浜の砂を門に撒いて、砂を踏んで入る。また、浜からもってきた石を家に投げつける。

(6) ビジュル



写真11 ビジュル ウイグスクに登る道端

ビジュルとかビジュルンマーと呼ばれる石の神が、村落周辺や何カ所かの屋敷周辺にある。ビジュルは村（字）境界の神であるという。ビジュルは村や親族集団の共同体の御嶽などの拝所とは違い、個人が信仰する神である。ウイグスクに登っていく山道にもある。険しい石段や城への山道を登り詰めて、あと80歩程歩くと神アサギというあたりの道の右端にある。高さ26センチ、幅21.5センチ、厚さ7センチの鳥の頭のような菱形の石である。背後に黒ツグの葉を挿してあるのですぐにそれとわかる。

ビジュルは、しゃがんでいて両手で頭の近くまで何度も上げ下げすることの出来る程度の重さである。家庭や個人の悩み事や心配事があるときに、ビジュル石の前で祈願して占う。そのためか、ビジュル石を屋敷内に設置している例がある。ビジュルの拝み方は、願い事を念じて、ビジュル石を持ってみて、重く感じたら、凶、軽く感じたら吉と判断するのだという。屋号ウルグチのウルグチガー（泉井）の傍らにも、屋号ヒサンマーにもある。以前は、屋号ゴローヤーにもあったという。ゴローヤーのものは、ある時、子どもが山から拾ってきて屋敷内においていたものだが、拝めそうだといって、いつのまにか、近隣の人も拝むようになったという。

(7) ネーユイ（地震）が来たら、「チカチカ」とか、「トーチカ、トーチカ」と唱える。

(8) 雷が鳴ると「クワーギヌサードー、ダラギヌサードー」（桑木の下だぞー、ダラ木の

下だぞー）と唱えて、桑の下にかくれて難を逃れた。桑の繊維は強く、ダラ木は、山に生えているトゲのある木であるところから、雷も避けるのだろうという。

主な伝承者

（敬称略、年齢は1970年当時）

ユシジョーの平良シゲ（74歳）

城 マッサグラーの平良保進（明治33年）

城 マッサグラーの平良カナ（明治12年）

一名代 クランニーの野里吉吾郎（85歳）

一名代 タヒニーの金城ハル（73歳）



写真12

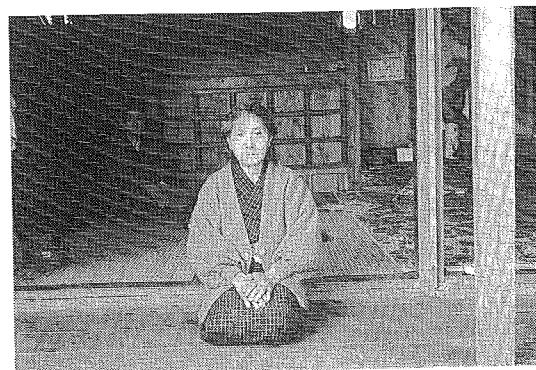


写真14

追記

本稿は、琉球大学民俗研究クラブ員として1970年1月4日から12日まで実施した調査の報告である。原稿は、1973年に部内誌の「ひんぶん7号」に収録されたが、ガリ版刷りで、少部数しか刊行されなかった。

力量不足から調査は不充分であったが、伝承内容は貴重な資料であることに変わりはない。

当時の調査にご協力いただいた謝名城の伝承者の方々には大変お世話になった。御恩返しの意味でも、活字化したいと思っていた。この機会に、調査ノートをもとに、最小限度の訂正をして、当時の写真も新たに追加してまとめなおした。



写真13

名護市産の新生界化石について

宮城 勉*

Cenozoic Fossils from Nago City, Okinawa Island, Japan

Tsutomu MIYAGI*

はじめに

近年開発が進み、切り通しは増えているが、地層や岩肌を直接みることが少なくなった。地層が姿をみせても、地滑防止等のため早期にコンクリート等で吹付けられるためである。また地形の平坦化が進み、地層が削除されることも少なくない。そのような中、岩石や化石など貴重な研究材料の採集できる場所が、減少してきていることは残念である。

平成14年9月から11月までの間、名護市動植物調査の一環として地質調査を行った際、仲尾次砂層を中心とした新生界地層より多くの化石を確認、採集することができた。そこで、教材及び野外観察のための資料とするため、採集されたこれら貴重な化石を紹介し、保存への足がかりとしたい。

調査地の地質概要

名護市は沖縄本島北部に位置し、本島北部の要所をなしている。西に本部半島の山地、東に本島の脊梁山地を有し、その間に広がる平地など、地形的、地質的に沖縄本島の縮図を見ることができる。(図1、2)

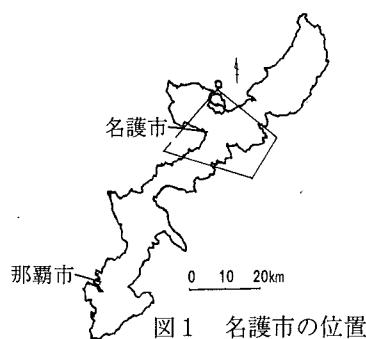


図1 名護市の位置

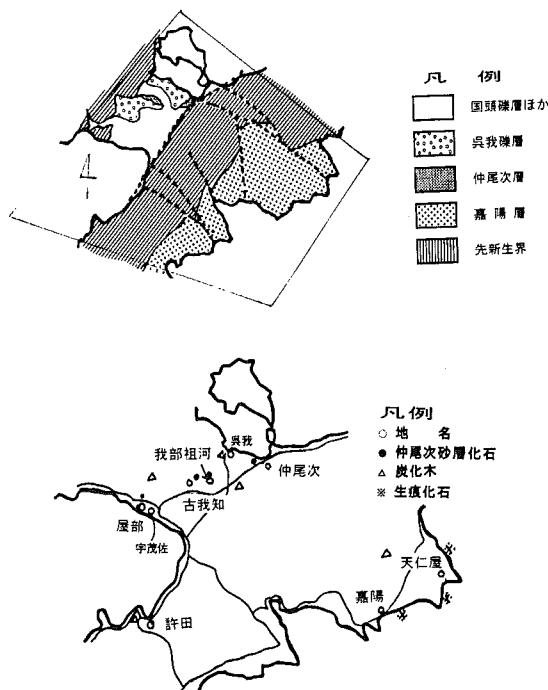


図2 名護市の地質概略図及び観察ポイント

名護市において基盤をなすのは、本部半島部では本部層群の本部層及び与那嶺層、脊梁部では国頭層群の名護層、嘉陽層である。それぞれ古生界の石灰岩、中生界の千枚岩、新生界の頁岩・砂岩を主体とする。それらの隙間をうめるように新生界の羽地層群、琉球層群が分布する。それらのうち、化石を産する新生界の地層は、国頭層群嘉陽層、羽地層群吳我砾層および仲尾次砂層、琉球層群那覇石灰岩および国頭砾層である。

* 〒903-0823 那覇市首里大中町1-1 沖縄県立博物館

Okinawa Prefectural Museum, 1-1, Onaka-cho, Shuri, Naha, Okinawa 903-0823, Japan

国頭層群

国頭層群 (Flint et al., 1959) は、名護層と嘉陽層で構成され、整合関係にあり、市の東側に広く分布する。名護層は変成を受け、千枚岩、緑色岩類を主体とし、化石は未発見で時代未詳であるが、嘉陽層との相互関係から、中生代末堆積物とされる。

嘉陽層は、西日本の四万十帯に比較され、褶曲が著しく、地層の逆転現象、衝上断層がみられる深海底堆積物である。タービタイトにより形成された地層で、砂岩と頁岩の互層を主体とし、有津海岸からのヌンムリテスの発見 (小西, 1965) により、始新統とされる。

羽地層群

羽地層群 (野田, 1971) は、未固結礫層を主体とする呉我礫層 (Guga gravel, MacNeil, 1960) と、未固結砂層を主体とする仲尾次砂層 (Nakoshi sand, MacNeil, 1960) で構成される。これらは沖縄本島北部、本部半島の付け根に局所的に分布し、整合一連の地層である。

呉我礫層は名護市呉我を模式地とし、中生界の湧川層千枚岩と、呉我集落西側において不整合で接する。最下部に角礫層、炭化木を含む泥層、最大径15mm程度の火山豆石を含む凝灰層がみられ、それらの上に中礫層と茶褐色泥層の互層が続き、上部では大礫層と灰色泥層がレンズ状に挟まれる。礫は概して円磨度が高く丸みを帶び、同一層準内においては淘汰も良い。大礫層中の大礫のほとんどは脊梁山地で見られる石英斑岩であり、中礫では緑色岩類、チャート、砂岩が多い。

名護市役所羽地支所裏の露頭においては、呉我礫層の中礫層の上に、緑色岩類の大礫層が確認される。この礫層では有孔虫オパキユリナ化石が密集し、それより上位では海洋性の貝化石が豊富に含まれており、下位の呉我礫層と区別され、仲尾次砂層と呼ばれる。仲尾次砂層は支所前方に流れる羽地大川河岸を模式地とし、更新世前期の地層である。



図3 仲尾次砂層

琉球層群

琉球層群は琉球石灰岩と国頭礫層で構成され、そのうち琉球石灰岩最下部の那覇石灰岩層と国頭礫層は同時異層とされる。これら石灰岩は礁性石灰岩のため、含まれる化石は豊富で、現生の生物相とほとんど変わらない。

国頭礫層は本島中南部では分布せず、本島中部の読谷村-石川市を結ぶラインより北側で発達、各地で中位段丘面を形成する。本地域でも、同市東海岸側においては標高120m前後の段丘面を形成し、西海岸側では丘陵地で広くみられ、未固結中礫層を主体に非石灰質泥層をレンズ状または層状に挟む場合がある。礫種は近郊の基盤岩で構成され、呉我礫層に比べ円磨度、淘汰度は悪い。

那覇石灰岩層は、下部に石灰質砂層を含み、次第にマッシブな塊となる。名護市東海岸では、岬の先端や小島などの限られた場所、西海岸では羽地内海周辺に分布し、屋我地島では石灰質砂層とともに発達する。化石は豊富に含まれるが、石灰岩が強固なため化石を岩石中から取り出すのは困難であり、今回は那覇石灰岩層からは採集していない。

各層の化石の状況

嘉陽層

嘉陽層からは、時代を決定するヌンムリテスが報告されている。今回ヌンムリテスは確認できなかったが、生痕化石および流痕が確認できた。(写真4)

生痕化石は、天仁屋川河口～天仁屋崎間の崖、およびパン崎周辺で多くみられ、保存状

態も良い。これらは、地層が逆転している場面で多く確認され、泥岩の上にミミズ腫れのような盛り上がった構造を示す。特に多いのは *Helminthoida* 類で、その他にも、*Spirodeshmos* 類、*Spirorhaphe* 類、*Paleodictyon*、*Cosmorhaphe* などがみられ、これらは 4000 m を越える水深に生息するものとされる。

天仁屋川河口から海岸沿いに 400 m ほど北東にいくと、流痕が確認できる。生物化石ではないが、漣の化石とも呼ばれるものなので、今回取り上げた。

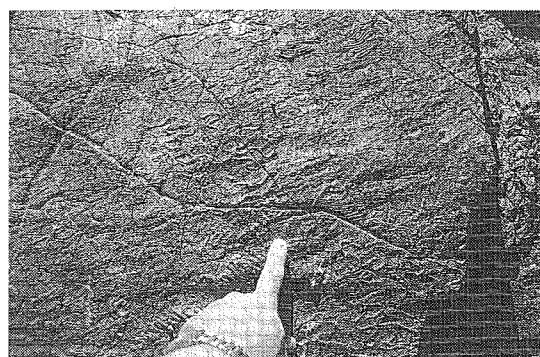


図 4 嘉陽層中の生痕化石

羽地層群

呉我礫層からは、最下部からのカキ化石の報告（高安、1976）があるが、採集場所、層準など不明な点があり、呉我礫層の定義とともに、再考が必要と思われる。今回の調査では、呉我集落でみられる最下部から、炭化木化石を採集した。仲尾集落北方でみられる緑色～暗灰色泥層からも小炭化木が確認できる。これらの状況から花粉化石が含まれていると思われ、詳細については別の機会に報告したい。今回の調査ではどの層準でも炭化木以外には化石は見つかっていない。

仲尾次砂層は、灰色石灰質砂～泥層で、固結度は低く、海産化石を多産する。主な産地は仲尾次、我部祖河、古我知である。仲尾次では、砂層中に二枚貝、巻貝、ツノガイ、単体サンゴ、コケムシ、有孔虫、サンゴなど肉眼的大きさの化石が確認できる。ここでは特に二枚貝が多い。我部祖河においては、泥層

中に二枚貝、巻貝の他、カニ類が確認できたが、他の肉眼的大きさの化石は見あたらず、仲尾次との共産化石もあるが、堆積環境の違いを呈している。また古我知においては、灰色泥層中にアナダラ類、ウミニナ等限定された種類を非常に多く産し、他の化石はほとんどみられない。このアナダラ含有層は、我部祖河露頭の近くにあり、堆積環境の変化を見る上で面白い教材となろう。

仲尾次の羽地支所裏露頭においては、近年露頭が後退しつつあり、化石含有層が限られた場所でしかみられなくなった。層厚にしてわずか 3～4 m の砂層の中に、保存の良い化石が豊富に含まれている。主なものは、化石種のモミジツキヒガイのほか、スダレモシオガイが多く、またリュウキュウキンチャクガイ、サトウニシキなど二枚貝、特にペクトン類が多い。その他ツノガイ、コシダカサザエが多くみられ、これらの化石は、仲尾次砂層の堆積環境が水深数十メートルまでの開かれた海域を示している。貝以外では有孔虫オパキュリナの密集がみられ、この密集部分は、我部祖河や仲尾でも局部的にみられる。

我部祖河においても、耕作地の拡大と自然崩壊により、露頭が後退しつつある。ここでの採集は、切り立った崖を崩すために、落石や崩壊を気にしながらの採集となる。ここでは泥層の上に小礫質砂層が乗り、泥層ではアナダラ類、カキ類が多くみられ、泥層上部では、ヌノメアカガイが目立つ。地形的に泥層が水を多く含んだ状態であり、化石の保存は良くない。アナダラ類などは貝に厚みがあり、比較的よく保存されているが、貝化石の種類によってはもろく崩れる場合があり、乾燥してからでないと取り出しにくい。転石の中に多くの化石を見いだせるが、アナダラ類やカキ類のほか、小型の殻の薄い貝も多い。また、泥層の中から、同一種と思われるカニ類が 5 個体採集できた。地形も合わせて判断すると、内湾的な比較的浅い堆積場が考えられる。

古我知においては、呉我層と思われる中礫層の上に泥層が乗り、アナダラ類、ウミニナ

類、カキ類がほとんどで、特にコガチサルボウ（仮称）がその構成のほとんどを占め、ウミニナ類、カキ類は次いで多い。その他には *Hindsia* sp. が見られるのみである。堆積環境も、内湾的な河口付近の潮間帯が考えられる。

古我知東方において、中礫層の中にカキ類化石の破片が比較的多く含まれる層を確認したが、この礫層が呉我層、国頭礫層のいずれであるか判明しておらず、今回は記述程度にとどめる。

今回採集した化石は表1に示す。

琉球層群の化石

国頭礫層は、広い範囲で段丘面を形成する。その構成層は、淘汰の悪い中礫層を主体とし、今回の調査では天仁屋、古我知、親川、許田において炭化物を含む泥層をともなうことが確認できた。いずれも非石灰質の泥～細粒砂の層で、その岩相より淡～汽水域の堆積物と考えられ、化石においても炭化木やカニ類と思われる生痕化石（巣穴）がみられる程度である。

宇茂佐北方において那覇石灰岩下部褐色石灰質砂層から、カキ類、ペクテン類を中心とした二枚貝化石が確認できたが、いずれも破片であり異地性の化石である。この露頭はもうすでにコンクリートにより吹き付けられている。

まとめ

名護市から産出する化石は、国頭層群嘉陽層、羽地層群呉我礫層および仲尾次砂層、琉球層群の琉球石灰岩および国頭礫層において確認できた。嘉陽層からは深海性生痕化石9

種、呉我礫層からは炭化木化石、仲尾次砂層からはカニ類も含め保存の良い海産化石81種、琉球層群国頭礫層からは炭化木化石およびカニと思われる生痕化石、石灰質砂層からは、海産貝化石6種であった。これら貴重な化石が郷土の自然学習や研究材料として生かされるよう、吹き付けの限定や露頭保存など、観察場所の確保、保存を訴えていきたい。

文献

- Flint, D. E., Saplis, R. A. and Corwin, G. 1959. *Military geology of Okinawa-jima, Ryukyu-retto*, 5 Geol. 88p, U.S. Army Pacific off. Eng., Intell. Div., with personnel of USGS.
- 沖縄県. 1989. 沖縄本島北部1「名護」「国頭平良」土地分類基本調査, 37.
- 小西健二. 1965. 琉球列島の構造区分. 地質雑. 71: 437-457.
- MacNeil, F. S. 1960. *The Tertiary and Quaternary Gastropoda of Okinawa*. Prof. Paper, USGS.
- Noda, H. 1971. New anadarid and associated molluscan fauna from the Haneji Formation, Okinawajima, Ryukyu Islands. *Trans. Proc. Paalaeon. Soc. Japan*, N. S., (81): 27-51.
- Noda, H. 2002. *Molluscan fossils from the Ryukyu Islands, Southwest Japan. Part4*. Sci. Rep., Inst. Geosci., Univ. Tsukuba, Sec. B, 23:53-116.
- 高安克己. 1976. 沖縄本島における第四系層序の再検討. 琉球列島の地質学研究. (1): 79-96.
- 木崎甲子郎編著. 1985. 琉球弧の地質誌. 沖縄タイムス社, 那覇.

表1 仲尾次砂層產貝化石

Pelecypoda	Gastropoda
<i>Acar congenita</i>	<i>Astralium (Astralium) haematragum</i> (Menke)
<i>Acar plicatum</i> (Dillwyn)	<i>Batillaria flectosiphonata</i> Ozawa
<i>Amussiopecten praesignis</i> (Yokoyama)	<i>Cerithium (Proclava) turritum</i> Sowerby
<i>Anadara (Scapharca) suzukii</i> (Yokoyama)	<i>Clanculus bronni</i> (Dunker)
<i>Anadara (Hataiarca) kogachiensis</i> Noda	<i>Concellaria (Trigonosota) taiwanensis</i> Nomura
<i>Anadara (Hataiarca) takaoensis</i> (Nomura)	<i>Conus tesselatus</i> Born
<i>Anadara (Tosarca) sedanensis</i> (Martin)	<i>Crenavolva frumentum</i> (Sowerby)
<i>Anomia chinensis</i> Philippi	<i>Cymatium (Cymatriton) nicobaricum</i> (Roeding)
<i>Antigona lamellalis</i> Schumacher	<i>Erosaria (Erosaria) erosa phragedanina</i> Melvill
<i>Azorinus abbreviatus</i> Gould	<i>Erosaria tomilini</i> Schilder
<i>Barbatia (Abarbatia) decussata</i> (Sowerby)	<i>Eunaticina papilla</i> (Gmelin)
<i>Callista (Callista) chinensis</i> (Holton)	<i>Fusinus perplexus</i> (A. Adams)
<i>Cardita leana</i> Dunker	<i>Gyrineum pusillum</i> (Broderip)
<i>Chlamys (Azumapecten) subsquamatus</i> (Nomura)	<i>Hindsia</i> sp.
<i>Chlamys (Mimachlamys) satoi</i> (Yokoyama)	<i>Lunella granulatus</i> (Gmelin)
<i>Clementia (Clementia) vatheleti</i> Mabilla	<i>Marmorostoma (Batillus) genmata</i> (Reeve)
<i>Crassostrea gigas</i> (Thunberg)	<i>Nassarius (Niotha) genmulatus</i> (Lamarck)
<i>Cucullaea granulosa</i> Jonas	<i>Nassarius (Zeuixs) caelatus</i> (Gould)
<i>Decatopecten amiculum</i> (Philippi)	<i>Neverita (Glassaulax) didyma</i> (Roding)
<i>Decatopecten striatus</i> (Schumacher)	<i>Pyrene flava</i> (Brugiere)
<i>Fragum alfuricum</i> (Fischer)	<i>Rhinoclavis (Proclava) kochi</i> (Philippi)
<i>Glycymeris (Glycymeris) formosana</i> (Yokoyama)	<i>Rostellaria spinofera</i> Martens
<i>Grammatomya squamosa</i> (Lamarck)	<i>Strombus (Euprotombus) aurisdianae</i> Linnaeus
<i>Laevicardium biradiatum</i> (Bruguere)	<i>Strombus (Labistrombus) japonicus</i> (Reeve)
<i>Laternula (Laternula) anatina</i> (Linnaeus)	<i>Strombus urceus</i> urceus
<i>Lucina kuninagaensis</i> Nomura and Zinbo	<i>Strombus</i> sp.
<i>Lunulicardia subretusa</i> (Sowerby)	<i>Tosatrochus attenuatus</i> (Jonas)
<i>Lutraria (psamophila) sieboldi</i> Deshayes	<i>Tugurium exutum</i> (Reeve)
<i>Macoma (Macoma) praetexta</i> (Martens)	<i>Turbo (Batillus) chinensis</i> Ozawa and Tomida
<i>Myadora fluctuosa</i> Gould	<i>Turritella (Kuroshioia) filiola</i> Yokoyama
<i>Nipponocrassatella nana</i> (Adams and Reeve)	<i>Uromitra obeliscus</i> (Reeve)
<i>Ostrea denzelamellosa</i> Lischke	<i>Volva (Pellasimnia) macneili</i> Noda
<i>Paphia (Paphia) euglypta</i> (Philippi)	
<i>Pardosinia amphidesmoises</i> (Reeve)	
<i>Periglypta (Tigammona) chemnitzi</i> (Henley)	
<i>Plicatula simpex</i> Gould	
<i>Pododesmus (monia) noharai</i> Noda	
<i>Pretostrea imbricata</i> (Lamarck)	
<i>Solecrutus divaricatus</i> (Linnaeus)	
<i>Tucetilla pilsbryi</i> (Yokoyama)	
<i>Vasticardium (Vasticardium) burchardi</i> (Dunker)	
<i>Ventricularia (Ventricularia) foveolata</i> (Gmelin)	
<i>Verilarca interpellata</i> (Grabau and King)	
<i>Striarca symmetrica</i> Reeve	
<i>Glycydonta marica</i> (Linnaeus)	

Scaphopoda

- Fissidentalium vernediei* (Sowerby)
Dentalium aprinum Linnaeus
Antalis weinkauffi weinkauffi (Dunker)

Plate1

1. *Marmorostoma (Batillus) genmata* (Reeve) コシダカサザエ ×1, 仲尾次
2. *Gyrineum pusillum* (Broderip) イササボラ×0.9, 仲尾次
3. *Astralium (Astronium) haematragum* (Menke) ウラウズガイ×0.7, 仲尾次
4. *Strombus (Euprotombus) aurisdianae* Linnaeus マイノソデ×0.8, 仲尾次
5. *Strombus* sp. ×0.7 ソデガイの仲間, 仲尾次
6. *Strombus (Labistrombus) japonicus* (Reeve) シドロガイ×0.9, 仲尾次
7. *Nassarius (Zeuxis) caelatus* (Gould) ハナムシロガイ ×0.7, 我部祖河
8. *Neverita (Glassaulax) didyma* (Roding) ツメタガイ×0.7, 我部祖河
9. *Hindsia* sp. ×1.8, 古我知
10. *Lunella granulata* (Gmelin) カンギクガイ ×0.7, 我部祖河
11. *Fusinus perplexus* (A.Adams) ナガニシ ×0.9, 我部祖河
12. *Batillaria flectosiphonata* Ozawa ウミニナ ×0.7, 古我知
13. *Conus tesselatus* Born ハルシャガイ×0.8, 仲尾次
14. *Turritella (Kuroshioia) filiola* Yokoyama ×1.2, 仲尾次
15. *Erosaria tomilini* Schilder ウミナシジミダカラ ×0.9, 仲尾次
16. *Barbatia (Abarbatia) decussata* (Sowerby) ミミエガイ ×2.0, 仲尾次
17. *Acar congenita* イトココシロガイ ×1.2, 仲尾次
18. *Acar plicatum* (Dillwyn) コシロガイ ×1.2, 仲尾次
19. *Anadara(Hataiarca) takaoensis* (Nomura) ×0.8, 仲尾次
20. *Anadara(Hataiarca) kogachiensis* Noda コガチサルボウ(仮称) ×0.6, 古我知
21. *Anadara(Tosarca) sedanensis* (Martin) ×0.7, 仲尾次
22. *Decatopecten amiculum* (Philippi) リュウキュウキンチャクガイ ×0.7, 我部祖河
23. 24. *Decatopecten striatus* (Schumacher) キンチャクガイ ×1.2, 我部祖河
25. *Chlamys (Azumapecten) subsquamatus* (Nomura) ×0.6, 仲尾次
26. *Nipponocrassatella nana* (Adams and Reeve) スダレモシオガイ ×0.7, 仲尾次
27. *Callista (Callista) chinensis* (Holten) マツヤマワスレガイ×0.7, 仲尾次
28. *Azorinus abbreviatus* Gould ズングリアゲマキガイ ×0.7, 我部祖河
29. 30. *Glycydonta marica* (Linnaeus) ×1.2, 仲尾次
31. *Chlamys (Mimachlamys) satoi* (Yokoyama) サトウニシキガイ ×0.7, 我部祖河
32. *Clementia (Clementia) vatheleti* Mabilla フスマガイ×0.7, 我部祖河
33. *Paphia (Paphia) euglypta* (Philippi) スダレガイ×0.8, 仲尾次
34. *Glycymeris (Glycymeris) formosana* (Yokoyama) ×0.7, 仲尾次
36. *Cucullaea granulosa* Jonas ヌノメアカガイ×0.7, 我部祖河

Plate 2

1. *Amussiopecten praesignis* (Yokoyama) モミジツキヒガイ ×0.6, 仲尾次
2. *Crassostrea gigas* (Thunberg) マガキ ×0.6, 我部祖河
3. *Anomia chinensis* Philippi ナミマガシワガイ ×0.6, 古我知
4. *Ostrea denzelamellosa* Lischke イタボガキ ×0.6, 古我知
5. *Antigona lamellalis* Schumacher サツマアサリ ×0.8, 我部祖河
6. *Fissidentalium vernediei* (Sowerby) マルツノガイ × ×1.2, 仲尾次
7. *Dentalium aprinum* Linnaeus ミズイロツノガイ ×1.2, 仲尾次
8. カニ1 ×1.1, 我部祖河
9. 単体サンゴ1 ×0.6, 仲尾次
10. 単体サンゴ2 ×0.6, 仲尾次
11. 炭化木 ×0.3, 国頭礫層(屋部)
12. カニ2 ×1.0, 我部祖河
13. 有孔虫 *Operculina* ×1.2, 仲尾次

Plate 1

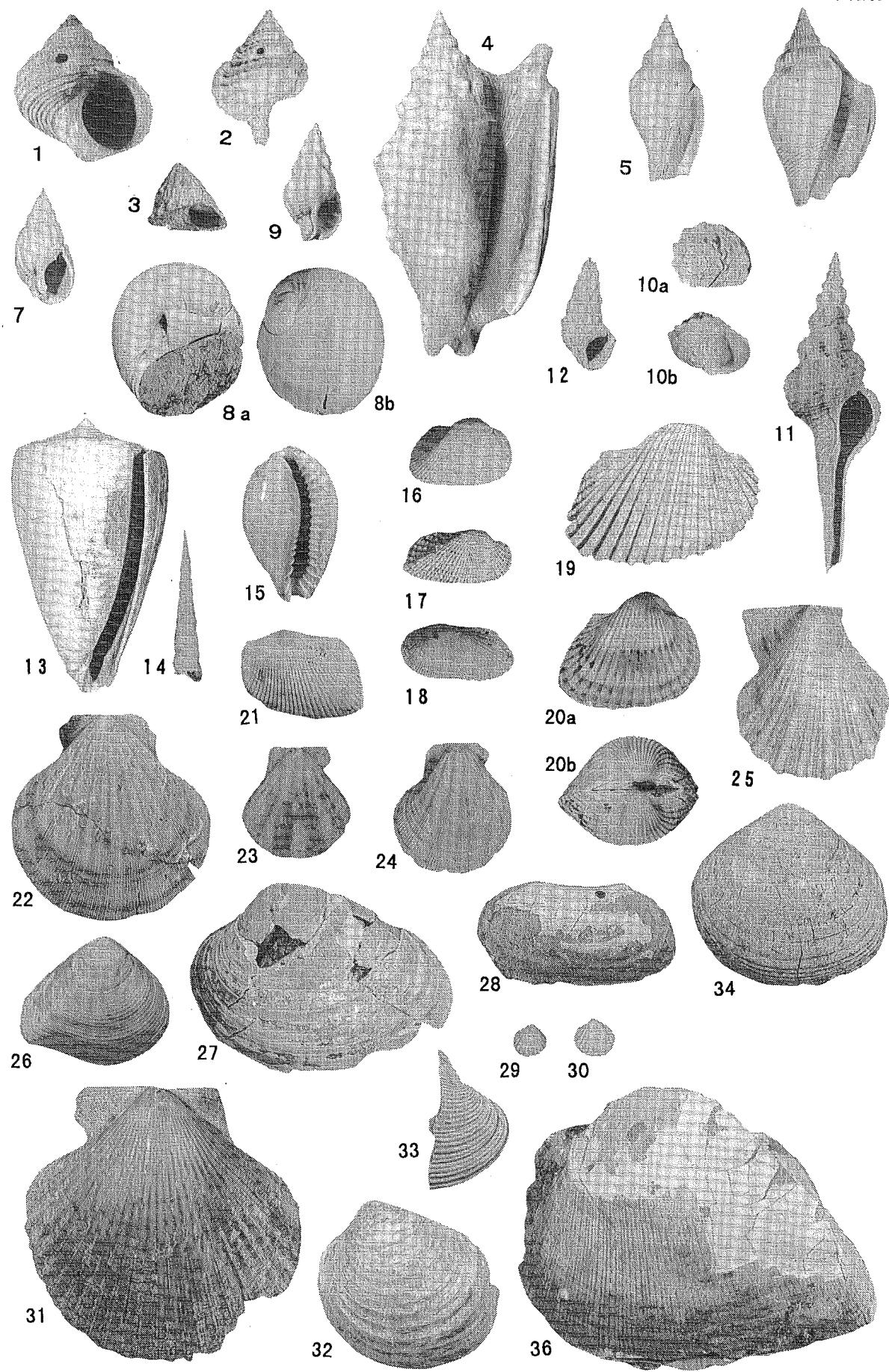
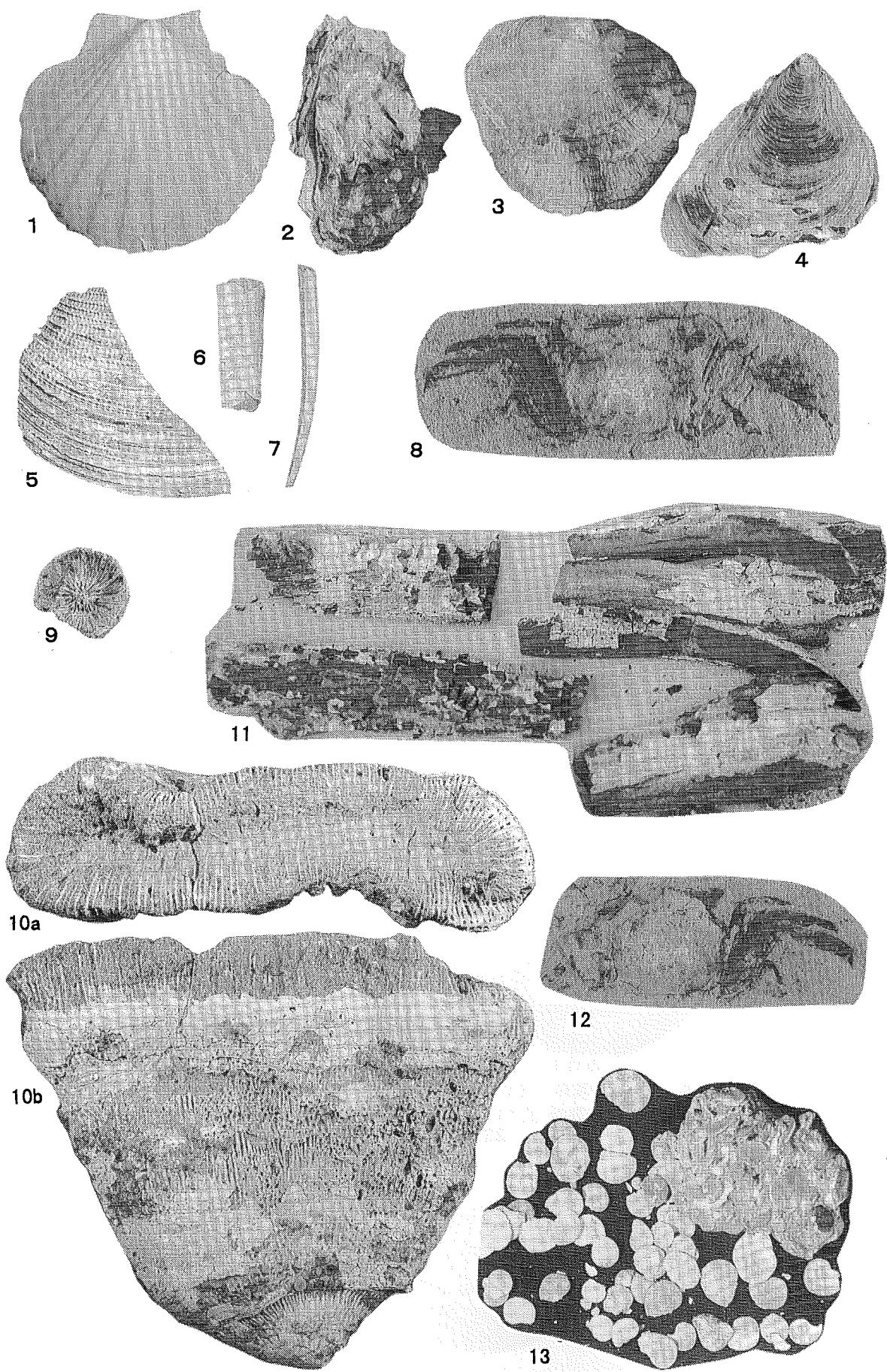


Plate2



先島諸島における野生化したインドクジャクの分布と現状について

田中 聰* · 嵩原 建二*

Distribution and Present Status of Feral Common Peafowls *Pavo cristatus* in the Sakishima Islands, the Ryukyu Islands

Satoshi TANAKA* and Kenji TAKEHARA*

はじめに

琉球列島は、複雑な地史的変遷の結果、陸生生物で固有種が多いことや大陸ではすでに絶滅してしまったような生物が遺存種として生きながらえていることなどにより、きわめて特異な生物相を形成している。亜熱帯では世界的にも稀な湿潤気候の下、それぞれの島は大きさ・地形・土壤等の違いに起因した独自の生物群集を支えている。このような生物群は学術的に貴重であるばかりでなく、最近のエコツーリズムの隆盛をかんがみると、観光資源としての潜在的価値も高い。しかしながら、沖縄県における近年の動植物の減少は著しい。森林伐採・埋め立て・人工護岸の構築などの生息地の破壊が動植物の減少をもたらしてきたことは明らかであるが、それに加えて近年強い懸念が抱かれているものに他の土地から人為的にもたらされた外来種（移入種）の問題がある。外来種は導入された場所の生物多様性や人の生活に影響を与えることが多い。沖縄県ではウリ類の害虫となったウリミバエや捕食をとおしてヤンバルの固有種を駆逐する勢いのジャワマンガースなどが、その顕著な事例である。このような外来種問題は国際的にも大きな注目を集めており、国際自然保護連合（IUCN）では外来種による生物多様性の減少を防止するためのガイドラインを策定している（Invasive Species Specialist Group, 2000）。また、国内にお

いても、全国の外来種の現状を整理した『外来種ハンドブック』が昨年秋に刊行された（日本生態学会編、2002）。しかしながら、その中には本稿で取り上げる先島諸島において野生化したインドクジャク *Pavo cristatus*（これ以後クジャクと表記する）についてはリストにさえ触れられていない。

私たちは沖縄県立博物館総合調査の一環として小浜島を訪れ、クジャクが島内全域に高密度で生息していることを確認し、さらに、先島諸島の他の島にもクジャクが野生化しているという情報を複数の人から耳にした。小浜島での調査結果の詳細は2004年3月に刊行予定の『小浜島総合調査報告書』において公表する予定である。しかし、外来種の問題はできるだけ速やかな対応が効果的であるため、先島諸島において野生化したクジャクの現状を明らかにすることを目的にアンケート調査をおこなった。本稿は、アンケート調査の結果を整理し、先島諸島のどの島にクジャクが野生化なし定着しているのかを明らかにすることに加えて、これ以上分布を拡大させないよう注意を喚起するとともに、関係者による速やかな対応を促すことを目的とする。

方 法

今回調査対象としたのは八重山諸島では石垣島、竹富島、小浜島、黒島、鳩間島、新城島、西表島、波照間島、与那国島、宮古諸島

* 〒903-0823 那覇市首里大中町1-1 沖縄県立博物館

Okinawa Prefectural Museum, 1-1, Onaka-cho, Shuri, Naha, Okinawa 903-0823, Japan

では宮古島、池間島、伊良部島、池間島、来間島、多良間島である。これらの島で自然観察に携わっている住民や学校に対して電話で聞き取り調査をおこない、野生化しているクジャクが「いる」という場合、郵送あるいはファックスでアンケート用紙と先島諸島の地図を送付し、回答を依頼した。アンケートの回答は2002年12月20日から2003年1月21日に回収した。アンケート調査の質問項目は以下の通りである。

1. あなたの島で、あなた自身が野生化したクジャクを目撃されたことはありますか。
2. 1. で「はい」とお答えいただいた方にお聞きします。クジャクを目撃されたのはいつ頃からいつ頃までですか。(わかる範囲でけっこうです)
3. あなたの島で、あなた以外の人が野生化したクジャクを目撃したということを聞かれたことがありますか。
4. 3. で「はい」と答えられた方にお聞きます。クジャクを目撃されたのはいつ頃だと聞かれましたか。(わかる範囲で結構です)
5. 1. で「はい」と答えられた方にお聞きます。クジャクが島に入った経緯をご存じですか。ご存じでしたら、その経緯を簡単に記入してください。
6. クジャクは現在でも目撃されますか。
7. クジャクは年々数を増やしているようですか。
8. できましたら、クジャクの目撃情報を裏の地図に●で示してください。

さらに、石垣島において野生化したクジャクが学校の飼育個体の逸走によるとの情報があったため、石垣島のすべての小学校にクジャクの飼育について電話による聞き取り調査をおこなった。

結果

今回の調査では下地島、水納島、嘉弥真島、外離島および内離島の情報は得られなかった。また、島全域が観光地になっている由布島は

調査対象から除外した。電話による聞き取り調査の情報件数は少なかったが、宮古諸島では池間島(情報件数2)、来間島(1)、多良間島(2)、八重山諸島では竹富島(1)、鳩間島(1)、波照間島(1)でクジャクが目撃されていなかった。その他の9島ではクジャクが目撃されていた(表1)。それぞれの島における生息状況を次に述べ、目撃地点を図1に示す。なお、文中に示す#を付した番号は表1の情報番号に対応している。

宮古島

宮古島では1997年からクジャクが目撃されており、現在も個体数を増やしている。島の中央部を中心に、東部と北部をのぞき広い範囲にわたって目撃されている。大野山林での目撲例が多く、現在10羽以上が生息している(#3)。城辺町「いこいの森」では2001年秋に13羽が目撲され、翌年の夏には4羽の雛が確認されている(#3)。少なくとも、「いこいの森」のクジャクは、近隣の小学校で飼育していたものが逃げ出したものらしい。なお、宮古島のクジャクは八重山諸島から持ち込まれたという情報があった。

伊良部島

島内の5校への聞き取り調査のうち、2校からはクジャクの目撃情報はなかった。しかし、宮古島在住の情報提供者(#3)と残りの3校からは目撃情報を得た。このうち2件は現在もクジャクがいることを示している。目撲地点は牧山公園に限られている。この島のクジャクは、数年前に南洋漁業の漁師が学校に寄贈した2番のクジャクを2000年頃に逃がしてしまったものが野生化したもので、現在も個体数を増やしているという。

石垣島

1994年からクジャクの目撃情報があり、6件が現在も生息を確認しており、そのうち3件は個体数が増加していることを示している。15の目撲地点の大部分は於茂登岳付近以南に

表1 インドクジャクの生息状況についてのアンケート調査結果

島名	質問番号							情報番号
	1	2	3	4	5	6	7	
宮古島	はい	1997/8~02/3	はい	97/?~02/12/2	ペットとしての飼育	はい	はい	1
	はい	02/5上旬						2
	はい	1997/4頃~	はい		八重山から持ち込まれた。	はい	はい	3
伊良部島			はい	2~3年前				4
	いいえ		はい	02/7頃	数年前に、遠洋漁業の漁師から学校に寄贈された。	はい	はい	5
	いいえ		はい	02/12	小学校で飼っていたものが逃げた。	はい	不明	6
	はい							3
石垣島	はい	1996年以來	はい	不明	小浜島から持ち込まれただろう。	はい	いいえ	7
	はい	1994年~02/12	はい	1994年頃	小浜島のリゾート施設より小中学校に愛玩用として持ち込まれ、それが小屋から逃げてしまった。	はい	はい	8
	はい	不明	はい	不明	小浜島のリゾート施設が飼っていたものが島で野生化し、それが他の島に持ち込まれた。	はい	不明	9
	はい	01/5~02/8	はい	02/11頃	小浜島で飼育していく増えたものが小学校などに寄贈された。檻から逃げて広がったと聞いた。	はい	はい	10
	はい	00/4頃から	はい	02/12頃		はい	いいえ	11
	いいえ		はい	01,02年		いいえ	いいえ	12
	はい	01/6~02/12				はい	はい	13
	小浜島	現地調査により多数生息していることを確認						
黒島	はい	2000年頃~	はい	2000年以前から	小浜島のリゾート施設より、数羽が鑑賞用に持ち込まれ、それが逸走した。	はい	はい	15
	はい							8
新城島（上地島）	はい							15
	はい							7
	はい							8
	はい	1992/5~	はい	不明	小浜島のリゾート施設を経営する会社がこの島に持ち込んだ。	はい	不明	16
	はい	1969/4~		1969/4~	昭和40年代にリゾート関係の企業がこの島に宿泊施設を建設。鑑賞用として、当初は柵で囲い飼育していたが、管理者がいなくなり野性化した。現在200羽程度生息していると予想される。この島から小浜島のリゾート施設（同じ会社）に持ち込み、そこから逃走したものが小浜島で野生化した。	はい	はい	17
	はい		はい					
新城島（下地島）	はい							8
	はい							10
西表島	はい	02/4頃(1羽)	はい	1990頃1羽 1998頃1羽	由布島の観光施設から持込まれた。	いいえ		19
	いいえ			01/10頃	由布島の観光施設で放し飼いにされていたものが逃げだし、西表島に渡ったことがあった。2001年10月12日に飼育小屋が完成し、その後は逃げた個体はいないようだ。2002年10月現在、16羽が由布島の小屋の中で飼育されている。			20
与那国島	はい	02/4に居住した時以来	はい	1994年以降	10年ほど前に学校で飼育されていた一羽が、8年ほど前に台風で檻が壊れ、逃走。その後、山中、牛舎で見られるようになった。	はい	はい	21
	はい	1994/10~02/12	はい	1994~02/12	1994/8/19に襲来した台風16号により与那国町内の小学校で飼育されていたクジャク2羽の小屋が破壊し、逃走した。また、町民が飼育していたクジャクがその年の台風前に1羽逃走した。	はい	はい	22
	はい	01/3~02/11	はい	01/3頃	学校施設で飼育していたものが逃走。	はい	はい	23

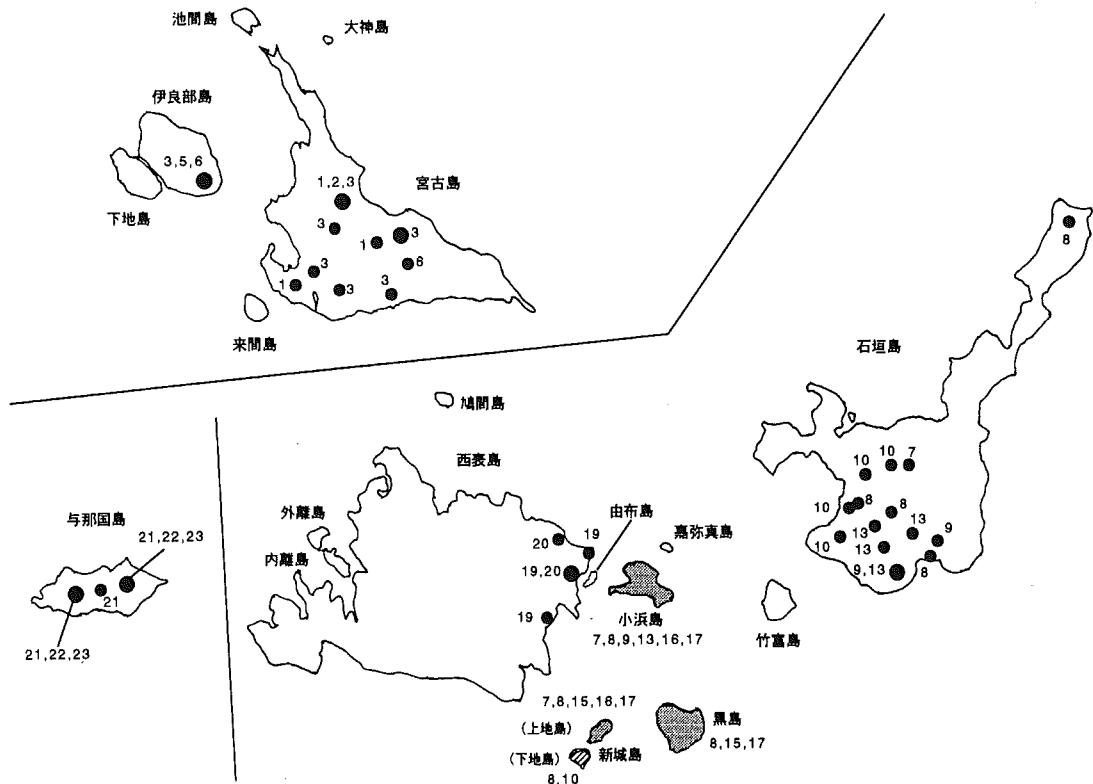


図1 先島諸島におけるインドクジャクの目撃地点。黒丸は1回の、大きい黒丸は複数の目撃情報があった地点を示す。黒丸に付した番号は表1の情報番号に対応する。影で示した島はクジャクが島全域に分布することを示し、斜線で示した島は目撃地点が明確でないことを示す。

散らばっているが、平久保半島の平野付近でも目撃例があった。移入の経緯については、4件が小浜島からの持ち込みをあげており、それが小学校で飼育され、飼育施設から逃げ出したという。小学校への聞き取り調査の結果、20校のうちクジャクを飼育しているのは2校のみであった。そのうち1校では保護者から寄贈された1雄が逃げ出ましたが、再び戻ってきたものを捕らえたという。もう1校では現在2羽飼育しており、以前、別の小学校へ寄贈したことがあり、また、逃げ出したことがあったという。残念ながら、この小学校からクジャクを譲り受けたという情報は他の学校からは得られなかった。

小浜島

小浜島では直接野外調査をおこなったため、

聞き取り調査やアンケート調査はおこなわなかったが、ほかの島に在住する6名から地図上に記入するなどの報告があった。

田中は昨年の9月9日に小浜島のほぼ全域でロードセンサスをおこない、10時20分から13時3分までの間、単独から6羽の群まで、合計29羽をカウントした。クジャクの分布は部落や港付近をのぞくほぼ全域にわたっており、爬虫類などの定量調査のために入った大岳の林内においてもクジャクが確認された。他の島で多数のトカゲ類が目撃されるような場所で目撃されたトカゲ類がきわめて少なかつたということを指摘しておきたい。

黒島

1980年代後半に、小浜島のリゾート施設から数羽が持ち込まれ、それが逃げ出し野生化

したという。現在、島内に数百羽レベルで生息しているらしい。

新城島（上地島・下地島）

上地島在住の情報提供者（#17）をはじめ、石垣島・黒島在住の情報提供者（#7、8、15、16）からも、上地島全域にクジャクが多数生息するとの情報を得た。移入の経緯については、小浜島から持ち込んだという指摘もあったが（#16）、上地島在住の情報提供者からは、最初にクジャクが持ち込まれたのはむしろ上地島であり、そこから小浜島に持ち込まれたという具体的な指摘があった。この情報提供者によれば、島の中では野菜なども網で囲わなくてはことごとくクジャクの食害を受けるという。また、従来普通にみられ、島民の食卓にのぼった野草類がきわめて少なくなり、キシノウエトカゲなどのトカゲ類、アサギマダラ・オオゴマダラなどの蝶類、メジロ・シロガシラなどの鳥類の姿も激減したという。また、島民が捕らえたクジャクがヤシガニを食べていたこともあるという。

下地島では、島の牧場関係者によればクジャクはみられないということであった。しかし、石垣島在住の情報提供者（#8、10）によれば、時期や正確な場所の情報はなかったが、この島でも目撃されたことがあるという。個体数が少ないようであるので、目撃された個体は上地島から飛来した可能性が高い。

西表島

クジャクの目撃情報2件は、いずれも島の東部の海岸近くである。1990年および1998、2001、2002年と目撃された年に隔たりがある上、目撃数も少ないとことから、1990年に目撃されたものが定着している可能性は低いものと思われる。移入の経緯としては、小浜島から持ち込まれたか由布島の観光施設から逃げ出したということである。由布島の観光施設では2001年10月に飼育小屋を造り、その中でクジャクを飼育しているため、2002年4月頃に目撃されたクジャク（#19）は、小浜島か

らのものである可能性が高い。

与那国島

3件の情報は、いずれもクジャクが現在も島に定着し、個体数を増やしていることを示している。クジャクをどこから持ち込んだかは不明だが、10年ほど前から学校で飼育していたものが1994年の台風16号によって壊れた小屋から逃げ出し、それが繁殖したものであるらしい。目撃地点は3カ所に限られている。

考 察

今回の調査では、アンケート対象者も少なく、また、情報提供者間の重複情報を特定することができなかつたが、先島諸島におけるクジャクの分布や生息状況をおおよそとらえることができた。調査対象とした宮古諸島6島のうちの2島、八重山諸島9島のうちの6島でクジャクの野生化が確認された。そのうち、小浜島・新城島（上地島）・黒島では現在きわめて高密度で生息しており、西表島をのぞく7島で定着し、個体数を増加させている状況が明らかとなった。インドクジャクはパキスタン、インド、スリランカ、ネパール、バングラデシュなどが原産地で、食性の幅が広く、野生のものは穀物、植物の芽や種子・果実などの植物質のものから、昆虫、マイマイ、トカゲ類や小型のヘビ類、小型哺乳類といった動物まで捕食する（Del Hoyo et al., 1994; Long, 1981）。クジャクが高密度で生息している小浜島では、定量的な調査の結果、トカゲ類などの小動物がきわめて少なく、新城島（上地島）でもキシノウエトカゲなどのトカゲ類や蝶類が激減したということがわかった。たとえクジャクだけが原因でなくとも、これらの動物がクジャクに捕食されている可能性はきわめて高い。また、新城島（上地島）で小鳥類が少なくなったのは、穀物や果実等の餌をめぐる競争の結果、クジャクに排除されたのかもしれない。直接的な資料はないが、このような状況をふまえると、クジャクは島々の生物多様性を脅かす侵略的外来種となって

いる可能性が高い。

先島諸島のクジャクの導入経路は2通りであった。一つは南洋漁業の漁師が持ち帰り、学校に寄贈したものが逸走し野生化したという伊良部島の例であり、もう一つは新城島(上地島)に建設した宿泊施設で飼育したクジャクが逃げ出し野生化した例である。上地島のクジャクは、その後小浜島に導入され、そこで野生化し、さらに黒島・石垣島に導入されたものが飼育施設から逃げ出し野生化した。伊良部島でクジャクが逸走したのは2000年頃であるため、宮古島や与那国島のクジャクも小浜島等から導入されたのだろう。

今回、少なくとも4つの学校でクジャクを逸走させたということがわかった。台風で小屋が壊れたなど、意図的でないにせよ、逸走させてしまったということは結果的に十分な管理ができなかったことを示している。クジャクは美しい鳥であるし、人に危害を与えるようなこともないだろう。また、動物の飼育は、子供たちに生命尊重の態度などを育成する上で大きな役割を担っている。しかしながら、どのような動物であれ、その飼育管理は徹底しなければならない。そのような徹底した管理姿勢を通して、子供たちに本来の自然を残すことの意義を伝えることは学校の重要な役割だろう。

今回のアンケート調査では、伊良部島にウサギが、石垣島にキジ、ホロホロチョウ、リスザルが野生化している(いた)という情報もあった。クジャクの問題はまさに一つの事例にすぎない。外来種問題の予防や解決のためには、教育センターなどの研修機関での教職員の研修、学校における生徒への正しい知識の教示、博物館等での一般市民への普及啓発、行政担当部署による駆除事業や飼育動物管理者に対する注意の喚起等が並行しておこなわれなければならないだろう。そのためには、機関の間の連携が必要である。さらに、

同じ問題意識をもち活動している民間団体とも連携できるような体制がつくられることが望ましい。

謝 辞

本報告の主要な部分を構成するアンケート調査については、井口修・池原賢・江川義久・大泊智明・小野寺至・親泊宗正・黒島和男・島達也・島仲信良・庄山守・城間恒宏・新城貞美・杉本和信・砂川栄喜・田盛高司・仲底善章・福仲用治・藤本治彦・宮良清晃・村田行・本成尚の各氏にご協力いただいた。新城安哲・藤本治彦両氏にはさまざまな情報をいただいた。また、石垣市内の全小学校および池間中学校・伊良部中学校・伊良部小学校・来間中学校・多良間中学校・竹富小学校・鳩間中学校・波照間中学校・久部良中学校・パナリ牧場および比嘉英秀氏には電話での聞き取り調査にご協力いただいた。文献については川上和人・大河内勇両氏にお世話をになった。

以上の方々に対し、厚くお礼申し上げる。

文 献

- Del Hoyo, J., A. Elliott and J. Sargatal (eds.) 1994. *Handbook of the Birds of the World*. Vol. 2. Lynx Edicions, Barcelona.
- Invasive Species Specialist Group. 2000. IUCN guidelines for the prevention of biodiversity loss caused by alien invasive species. (<http://iucn.org/themes/ssc/pubs/policy/invasivesEng.htm/>) (日本語訳が『外来種ハンドブック』に所収)
- Long, J. L. 1981. *Introduced Birds of the World*. David & Charles, London.
- 日本生態学会(編). 2002. 『外来種ハンドブック』地人書館, 東京.

大東諸島産鳥類目録

姉崎 悟¹・嵩原建二²・松井晋³・高木昌興³

A Check-list of the Birds in the Daito Islands

Satoru ANEZAKI¹, Kenji TAKEHARA², Shin MATSUI³ and Masaoki TAKAGI³

はじめに

大東諸島は、沖縄島から東へ約400kmの海上に位置する海洋島で、北大東島、南大東島および沖大東島の3島からなる。かつては原生林に覆われた無人島であったが、1900年以降の開拓により大半の森林が伐採され、北大東島と南大東島はサトウキビ畑に広くおおわれた島となり、沖大東島は戦後に再び無人島化し、1956年以降はアメリカ軍の射爆演習場となっている。

島の開拓は鳥類にも大きな影響を及ぼし、いくつかの種は大東諸島から絶滅したが、逆に耕地の拡大が新たな生息環境を作り出し、モズ *Lanius bucephalus* のような新たな種の定着もみられるようになった。こうした繁殖鳥類相の遷移や、固有亜種の存在、渡り鳥の中継地としての価値など、大東諸島には学術上注目すべき点が多くみられるが、これまでの記録が十分に整理されていなかったため、鳥類相が推察によって論じられることも少なくなかった。このことから筆者らは、鳥類相研究の基礎資料となることを目標に、まず2001年に南大東島産鳥類目録を発表した(姉崎・嵩原, 2001)。今回はさらに対象を広げ、その後新たに収集された南大東島の情報と、北大東島および沖大東島についての情報をまとめ、大東諸島産鳥類目録の作成と、繁殖鳥類相についての考察をおこなったので報

告する。

本報告を行うにあたり、山階鳥類研究所の平岡考氏には文献調査と標本調査で多大な協力を頂いた。梶田学氏には文献調査に協力頂いたほか、多くの助言を頂いた。池長裕史、宇佐見依里、大沢啓子、奥土晴夫、鹿嶋雄二、須貝沢美、中川雄三、西浜良修および土方秀行の各氏には、貴重な観察情報を提供頂いた。また、(財)自然環境研究センター、沖縄大学の中村和雄博士、南大東村教育委員会の宮城克之氏と東和明氏、北大東村教育委員会の沖山昇氏と浅沼忠夫氏には調査に協力して頂いた。以上の方々に厚く御礼申し上げる。

調査地の概況

大東諸島は、北大東島（面積12.71km²／周囲13.52km／最高点74m。以下同様）、南大東島（30.74km²／20.80km／75m）および沖大東島（1.19km²／4.58km／31m）の3島からなる（図1）。いずれも隆起環礁の島で、海岸線は高さ10~20m程度の断崖となっており、中央部は盆地状で、その盆地に北大東島では20、南大東島では100近くの池沼が点在している。北大東島と南大東島はかつてダイトウビロウ *Livistona chinensis var. amanoii* が優占する森林におおわれていたが、1900年以降の開拓により大半が伐採され、島面積の半分以上がサトウキビ畑と化した。島を囲うように現

1 〒487-0033 春日井市岩成台8-3-6 510-102
510-102, 8-3-6, Iwanaridai, Kasugai, Aichi 487-0033, Japan

2 〒903-0823 那覇市首里大中町1-1 沖縄県立博物館
Okinawa Prefectural Museum, 1-1, Onaka-cho, Shuri, Naha, Okinawa 903-0823, Japan

3 〒558-8585 大阪市住吉区杉本3-3-1 大阪市立大学理学部動物社会研究室
Laboratory of Animal Sociology, Osaka City University, 3-3-1, Sugimoto, Sumiyoshi, Osaka,
558-8585, Japan

存する防風林も、リュウキュウマツ *Pinus luchuensis* やモクマオウ *Casuarina equisetifolia*などの移入種による植林が大半を占めている。開拓以前は淡水魚と両生類が生息せず、爬虫類ではオガサワラヤモリ *Lepidodactylus lugubris* が、哺乳類ではクビワオオコウモリ *Pteropus dasymallus* とキクガシラコウモリの一種 *Rhinolophus sp.*（絶滅）が生息していたが、その後、ホオグロヤモリ *Hemidactylus frenatus*、ブラーミニメクラヘビ *Ramphotyphlops braminus*、クマネズミ *Rattus rattus* などが人間活動に伴って侵入し、淡水魚類、ヒキガエル類、淡水生カメ類、イタチ *Mustela itatsi* なども移入された（奥土, 2000; Yamashiro et al., 2000; 前田, 2001）。沖大東島もかつてはビロウ林におおわれていたが、戦前の燐鉱採掘によって森林が伐採され、多くの表土が失われた。戦後はアメリカ軍の射爆演習場となっているため状況は不明だが、北大東村誌（北大東村誌編集委員会, 1986）に収録された1973年撮影の写真をみる限り、樹木の乏しい荒地と化しているようである。

調査方法

目録作成にあたり、まず文献調査、標本調査および現地調査を行なった。文献は末尾に示した60件（文献記号A 1～G 6）と折居彪二郎氏が1922年9月26日～10月28日と1936年10月30日～11月29日に大東諸島で採集した鳥類の記録を行った直筆のノート2冊（文献記号O1,O2。以下「折居ノート」：苫小牧市立中央図書館所蔵）を調査した。

標本は山階鳥類研究所、南大東村ふるさと文化センターにおいて調査した。現地調査は下記に示したように各時期に島に滞在し、任意に観察した鳥類を記録した。また、私信によって得られた情報も加味した。

得られた情報は、姉崎・嵩原（2001）と同様にリスト化し、まず文献調査と現地調査の結果、および私信による記録をまとめ、これ

を補足する形で標本調査の結果と折居ノートから得られた情報を追加した。文献の情報のうち誤記と思われるものは除外したが、筆者からの私信によって正しい情報が得られた場合は、「(修正)」と付記して表示した。同じ情報が複数の文献に記されている場合は、最も詳細に記述されていると思われた文献のみ示した。亜種は、標本や詳細な観察によって同定されたと思われるものに限り記し、最初に同定したと思われる文献のみ示した。北大東村誌（北大東村誌編集委員会, 1986）および南大東村誌（南大東村誌編集委員会, 1990）に収録されている開拓以前および初期に関する資料情報は備考欄に記し、両方に収録されている場合は南大東村誌のページ数を示した。現地調査による記録は「PS」（Present Survey）と表示した。折居ノートの情報については、「稚子隼」と記された標本が実際にはサシバ *Butastur indicus* であるなど、種の同定に疑わしい点がみられたので、標本が得られていない種の観察情報は参考記録とし、備考欄に示した。

なお、現地調査は、南大東島で2001年：2月24日～25日；嵩原：30種、同年9月14日～17日；姉崎：31種、同年11月21日～25日；嵩原：36種。2002年9月25日～26日；嵩原：29種、同年4月10日～4月26日；高木：29種、同年6月24日～7月17日；高木：24種、同年11月1日～11月3日；高木：27種、同年4月14日～8月19日；松井：45種、同年9月19日～12月18日；松井：74種、北大東島で2001年8月27日～30日；嵩原：22種、2002年3月21日～23日；嵩原：31種、同年9月26日～27日；嵩原：24種、同年10月30日～11月3日；嵩原：36種である。

目録対象外の種

清棲（1952）はミヤコドリ *Haematopus ostralegus* が南大東島に分布すると示しているが、Hachisuka and Udagawa (1953) は誤記の可能性があると述べており、ほかの文献および山階鳥類研究所における調査でも

記録を確認できなかった。日本鳥学会(2000)はハジロミズナギドリ *Pterodroma solandri*が南大東島で記録されたと記しているが、のちに公開された正誤表によってこの記録は削除された。また、ベニバト *Streptopelia tranquebarica* が大東諸島に分布すると示しているが、記録を確認できなかつた。姉崎・嵩原(2001)は南大東村ふるさと文化センターにオオミズナギドリ *Calonectris leucomelas* の標本があると記したが、再調査したところ、「オオミズナギドリ?」というラベルが付いたオナガミズナギドリ *Puffinus pacificus* の標本であった。1903年「大東島取調書」には、沖大東島でクロアジサシ *Anous stolidus* (およびセグロアジサシ *Sterna fuscata*) が群れで繁殖していたと記されているが(南大東村誌編集委員会, 1990:p.935)、種の同定の根拠は不明である。折居ノート(1936)には1936年11月1日にセグロセキレイ *Motacilla grandis*、15日にウズラ *Coturnix japonica* を南大東島で観察したとの記述があるが、前述したように折居による種の同定には疑わしい点がある。以上から、上記7種は目録から除外した。また、1975年10月に害虫駆除の目的で北大東島に導入された明らかな人為分布種であるキジ *Phasianus colchicus*(北大東村誌編集委員会編, 1986:P.420-421)、外来種であるドバト *Columba livia var. domestica* (南大東島で記録あり。奥土, 2000) も本目録から除外した。

結果および考察

全調査の結果

今回の調査で鳥類目録に示すようなデータが得られ、全部で186種を確認した。このうちオオゲンカンドリ *Fregata minor*, メジロガモ *Aythya nyroca*, アカエリヒレアシギ *Phalaropus lobatus*, ミツユビカモメ *Rissa tridactyla*, オニアジサシ *Hydroprogne caspia*, ベニアジサシ *Sterna dougallii*, コシアカツバメ *Hirundo daurica*,

マミジロキビタキ *Ficedula zanthopygia* およびマヒワ *Carduelis spinus* は、現地調査ないし私信によって今回大東諸島初記録となつた。

繁殖鳥類について

今回の調査で繁殖(巣、卵、ヒナないし巣立ち間もない幼鳥)の情報が得られたのは、カツブリ *Tachybaptus ruficollis*, リュウキュウヨシゴイ *Ixobrychus cinnamomeus*, マガモ *Anas platyrhynchos*, カルガモ *A. poecilorhyncha*, ノスリ *Buteo buteo*, ヒクイナ *Porzana fusca*, バン *Gallinula chloropus*, オオアジサシ *Thalasseus bergii*, リュウキュウコノハズク *Otus elegans*, カワセミ *Alcedo atthis*, ヒヨドリ *Hypsipetes amaurotis*, モズ *Lanius bucephalus*, イソヒヨドリ *Monticola solitarius*, ウグイス *Cettia diphone*, メジロ *Zosterops japonicus* およびスズメ *Passer montanus* の16種である。ただしカワセミとイソヒヨドリは巣しか確認できておらず、卵やヒナの確認が望まれる。ヨシゴイ *Ixobrychus sinensis*, ゴイサギ *Nycticorax nycticorax* およびミサゴ *Pandion haliaetus* は繁殖が確認されていないが、ほぼ周年記録があるので、大東諸島でも繁殖している可能性が高いと思われる。アホウドリ *Diomedea albatrus*, カツオドリ *Sula leucogaster*, アカモズ *L. cristatus*, リュウキュウカラスバト *Columba jouyi*, ヤマガラ *Parus varius* およびハシブトガラス *Corvus macrorhynchos* の6種も繁殖記録がなく、戦後の記録が皆無か稀だが、前3種は後述するように繁殖を示唆する記述がある。残り3種は夏期の分布を示す記述があるほか(南大東村誌編集委員会編, 1990)リュウキュウカラスバトについては秋期ながら幼鳥の記録(Kuroda, 1925)もあることから、かつては繁殖していたが、その後絶滅した可能性が高い。以上から、本稿では大東諸島の繁殖鳥類を上記25種と考えることにする。このうちカツブリ, ノスリ, リュウキュウコノハズク,

ウグイス、ヒヨドリ、ヤマガラおよびメジロの7種は大東諸島固有亜種であることが認められているが（日本鳥学会, 2000）、前4種については後述するように固有亜種とすることについて異論が認められた。ミソサザイも大東諸島固有亜種ダイトウミソサザイ *Troglodytes troglodytes orii* として記載されており（Yamashina, 1938）、多くの文献で繁殖していたとされているが、この亜種は1月採集の標本1体に基づく記載であり、ほかに記録がないことから、渡り性の別亜種に含まれる可能性が考えられる。よって本稿では繁殖鳥類から除外した。

以下、主な種についてまとめた。

(1) カイツブリ

本土産よりも羽色が暗色で翼が短いなどの特徴から、Kuroda (1927) は南大東島産をもとに亜種ダイトウカイツブリ *Tachybaptus ruficollis kunikyonis* を記載した。当時は奄美大島産と石垣島産もこの亜種とされていたが、標本による比較は行なわれておらず、現在は大東諸島固有亜種とされている（日本鳥学会, 2000）。大東諸島産は一時期亜種カイツブリ *T. r. poggei* に含められていたが（日本鳥学会, 1942, 1958, 1974）、どのような検討を経てカイツブリとされ、また再び固有亜種として独立させたのかは不明である。なお、亜種の問題とは別に大東諸島では1970年代から白変個体の存在が知られており、遺伝学的に興味深い固有性を持つ個体群だといえる。

(2) アホウドリ

Kuroda (1925) によれば、開拓初期に恒藤規隆氏が沖大東島で多数観察しており、黒田 (1935) は「多分繁殖」と記している。新垣 (1980) は南大東島の漁師や古老から、沖大東島でコアホウドリ *Diomedea immutabilis* が今（1980年）でも繁殖しているのではないかとの話を聞いているが、これはアホウドリと混同した可能性がある。以上から、現状は不明だが、沖大東島でかつてアホウドリが繁殖していた可能性は高いと思われる。

なお、1892年8月に沖大東島を訪れた者が「灌木延茂シ伸天鵠ノ群之ニ巣クヲ見ル」と記述しているが（南大東村誌編集委員会, 1990: p.921）、8月は非繁殖期であるため、この記述は別の海鳥を述べた可能性がある。

山成 (1935) は、北大東島の黒部崎付近で1919年頃までアホウドリが繁殖していたと記しており、北大東村誌編集委員会 (1986) によれば、黒部崎の「クロブ」は八丈島や鳥島の方言でアホウドリを意味するという。しかし、服部 (1889) はクロアシアホウドリ *D. nigripes* を「くろぶ」、アホウドリを「しらぶ」と記述しており、黒部崎で繁殖していた「クロブ」はクロアシアホウドリであった可能性も考えられる。

南大東島では1892年8月に南大東島で「信天翁」が観察されたとの記述があり（南大東村誌編集委員会, 1990）、新垣 (1980) は南大東島についても「(コアホウドリが) 80年前までは島で繁殖していた」との話を聞いているが、ほかにアホウドリ類の繁殖を示唆する情報がなく、南大東島での繁殖については疑問が残る。

(3) カツオドリ

黒田 (1935) は沖大東島で「多分繁殖」すると記しており、1903年6月には北大東島と沖大東島で「オサドリ」の卵が観察されていることから（南大東村誌編集委員会, 1990: p.934, 935）、この2島では繁殖していた可能性が高いと考えられる。なお、ほかにも開拓初期の資料には「カツオドリ」についての記述があるが（南大東村誌編集委員会, 1990: p.140, 1117, 1193）、開拓民の主な出身地である八丈島ではオオミズナギドリを「かつおどり」と呼ぶため（内山, 1973）、これらの記述の中には種カツオドリではない内容が含まれている可能性もある。

(4) ゴイサギ

折居ノート (1936) の記述を除くと、本種は1988年まで記録がなかった種である。定着した要因は明らかでないが、ゴイサギが好む淡水魚は開拓以降に移入されており、餌動物

の増加が要因のひとつとして考えられる。また、近年になって奄美諸島や沖縄諸島でも繁殖が確認されていることから（常田, 2001; 沖縄野鳥研究会, 2002）、繁殖分布が南へ拡大している傾向があるのかもしれない。

(5) マガモ

沖縄県では大東諸島だけで繁殖しており、自然分布とされているが、かつては移入されたナキアヒルが野生化した可能性も指摘されていた（Kuroda, 1925; 石澤, 1927）。今回の文献調査で、南大東島で1902年に「アヒルを飼育していたとの記述がみつかったため（南大東村誌編集委員会 1990: p.123, 1004）」、アヒルが野生化した可能性も否定はできないが、アヒルは「大切ニサレテ居タ」とあり、1903年6月には「野禽」として「鴨」が観察されていることから（南大東村誌編集委員会 1990: p.1112）、当時からカモの一一種が留鳥として自然分布していた可能性は高いと考えられる。種類は特定できないが、折居ノート（1922）にはマガモ以外のカモ類の記述がなく、「鴨」がマガモであった可能性は高い。以上から、本稿ではマガモを自然分布とみなすこととする。

なお、樋口（1979）は市田則孝氏および柚木修氏からの教示として、大東諸島産のオスの繁殖羽は羽色が地味な傾向にあると記しており、今回の現地調査でも、冬鳥として渡ってくる個体より繁殖個体のほうが地味な印象を受けた。ただし、詳細に比較が行なわれたことはなく、また、カルガモと中間的な羽色も観察されていることから、詳しい調査が望まれる。

(6) ノスリ

沖縄県では唯一、1964年に南大東島で繁殖記録がある（黒田, 1971）。1964年当時は3つがいが生息していたとされるが、その後1999年を除いて夏期の調査で確認されておらず、繁殖環境となる森林が非常に少ないと考えると、繁殖個体群は消滅した可能性が高い。折居ノート（1936）には「(1936年秋に)毎日一二羽見へ居ル」との記述があるが、實際

に採集された標本はチュウヒ *Circus spilonotus* であり、ほかに戦前の記録はない。このことから、繁殖は短期間の偶発的なものであった可能性も考えられる。なお、1964年に確認されたヒナ2羽は採取され、うち1羽は那覇市で数年間飼育され、これを生きた状態でタイプ標本とし、亜種ダイトウノスリ *Buteo buteo oshiroi* が記載された（黒田, 1971）。亜種ノスリ *B. b. japonicus* よりも小型で、上面が黄褐色に富み、翼、尾の地色が濃く規則帶をなすことが特徴とされるが、ノスリは変異の多い種であるため、タイプ標本の特徴が個体群の特徴に一致するかについては検討が必要だと指摘されている（環境庁自然保護局野生生物課, 1991）。飼育環境が羽色やサイズに影響を及ぼした可能性もないとはいえず、亜種の独立性については再検討が必要であるが、タイプ標本はのちにカゴ抜けしており、大東諸島産の標本は1体も残されていない。

(7) リュウキュウカラスバト

この種は、1936年11月に南大東島で採集されたメス1羽を最後に記録がないことから、絶滅したと考えられている（環境省自然環境局野生生物課, 2002）。南大東島では幼鳥も採集されているので繁殖していたと考えられるが、北大東島では2羽を撃ち落とした記述があるだけで、標本は得られていない（Kuroda, 1925）。沖縄諸島と大東諸島の固有種で、このような分布をする種はほかになく、沖縄諸島と大東諸島の鳥類相の強い関連性を示唆する、興味深い分布である。

(8) リュウキュウコノハズク

大東諸島産は琉球列島産よりも上面が淡色で赤みが弱く、翼長と嘴峰が短いことから、固有亜種ダイトウコノハズク *Otus elegans interpositus* とされているが（Kuroda, 1923）、タイプ標本が鳥の渡り期の10月に採集されており、その特徴が北海道で繁殖期に採集された別種コノハズク *O. scops* の標本に似ていることから、固有亜種ではなく、渡来していたコノハズクの標本をもとに記載された可能

性が指摘されている（安部, 1993）。タイプ標本は焼失しているため（Hachisuka and Udagawa, 1953）確認することができないが、大東諸島で繁殖している個体群が原記載の内容に一致するかどうか、改めて検討する必要があるだろう。

なお、Severinghaus et al. (2002) は琉球列島各地の個体を遺伝的、形態的に分析し、南大東島産は遺伝的に沖縄諸島以北のリュウキュウコノハズクに近縁だが、形態的には著しく小型な点で、琉球列島産と区別し得る単独のグループを形成していることを示唆している。

リュウキュウコノハズクは森林を主な生息環境とする種だが、大半の森林が失われた今でも生息していることは非常に興味深く、貴重である。しかし、近年北大東島では確認されておらず、早急な実態調査と保護対策が必要である。

(9) カワセミ

主に秋期から春期に記録されていた種で、夏期の記録はごく最近のことであるから、近年定着した可能性も考えられる。定着した要因として、ゴイサギ同様、開拓以降に移入された淡水魚の存在が考えられるが、まだ巣しか確認されておらず、継続的に繁殖しているかどうか、今後詳しい調査が必要である。

(10) アカモズ

亜種シマアカモズのみ記録があり、1972年10月の調査で「最も普通な鳥」として記録され、伝聞により繁殖すると記された（池原, 1973）。また、1974年5月の調査ではモズとアカモズがほぼ同等の割合で確認され、雑種と思われる中間的羽色の個体も観察された（日本野鳥の会, 1975）。繁殖や交雑を実際に確認した記録はないが、最近のDNA解析により、大東諸島で繁殖するモズの中に、外観はモズに一致するがアカモズ特有のDNA領域を持つ個体がいることが確認されており（M. Takagi and J. Nagata, unpublished data）、1970年代にアカモズが定着し、モズと交雑していた可能性は高いと考えられる。

戦前は秋期に2回採集記録があるのみで、折居ノート（1922）には「開墾前ハ多数ニ見シ者ナリシモ現今ハ希メテ希レナリ絶滅ニ近シ」とあるが、ほかに開拓以前の生息を示す記述はなく、折居ノート（1936）にモズ類の記述が一切ないことから、戦前は不定期な旅鳥ないし冬鳥であったと考えられる。アカモズおよびモズが大東諸島に定着した要因として、餌となるバッタ類が1971年頃から異常発生を繰り返していたことがあげられているが（日本野鳥の会, 1975）、1980～90年代にはアカモズが記録されていないことから、繁殖個体群は1970年代後半に消滅し、雑種個体の系統もモズと交配を繰り返すうちにモズの特徴に近づいていったものと推察される。2001年以降は渡りの時期にのみ記録があるが、これは戦前と同様、現在も不定期な旅鳥ないし冬鳥として渡来しているためであろう。

(II) ウグイス

1922年に南大東島で採集された個体をもとに亜種ダイトウウグイス *Cettia diphone restricta* が記載され（Kuroda, 1923）、その後記録がないことから絶滅したと考えられていたが、梶田ほか（2002）によって沖縄島で繁殖する個体群もダイトウウグイスであることが確認された。今後新産地がみつかる可能性もあるが、リュウキュウカラスバト同様、沖縄諸島と大東諸島の鳥類相の強い関連性を示唆する、興味深い分布である。

ダイトウウグイスの繁殖については南大東島で卵の情報があるが、通常無斑であるウグイスの卵について、Hachisuka and Udagawa (1953) は本土産と模様（spots）が異なると述べている。これが事実ならこの卵は別種の可能性があるが、同じ卵について折居ノート（1922）には、「小豆色ナラスシテ茶褐色ナル点大ニ異レリ」「Sepia色ナル由数回採取セシ者ノ證スル處」と色の違いが記されており、この特徴はウグイスの卵として自然だといえる。おそらく Hachisuka & Udagawa (1953) の記述は誤記だと思われるが、仮にウグイスの卵でないとしても、

1885年8月、1892年8月および1903年6月に南大東島でウグイスを観察したとの記述があることから(南大東村誌編集委員会編, 1990: p.912, 923, 933, 1109, 1112)、ダイトウウグイスが繁殖していた可能性は高いと思われる。

1937年と1938年には亜種リュウキュウウグイス*C. d. riukiuensis*が採集され、Hachisuka & Udagawa (1953) はこれを移入個体と考えたが、開拓初期（1915年に渡航）の島民である国京国平氏は移入されたことがないと伝えている（山階, 1941）。1937～1992年にはウグイスが秋期から春期にだけ記録されており、沖縄島ではリュウキュウウグイスが冬鳥であることから（梶田ほか, 2002）大東諸島でも同様と思われるが、近年、繁殖期にも亜種不明のウグイスが観察されているので、詳しい調査が必要である。

(12) スズメ

開拓初期には分布していなかったとの記述がある(南大東村誌編集委員会編、1990)。Kuroda (1925) は伝聞により移入種と記しているが、その根拠は明らかでない。佐野 (1988) は、戦後に作られた麦畑が本土から移動してきた若鳥の定着の要因になったと推察しており、定着時期に誤りはあるものの(実際は戦前から分布)、耕地の増加により自然分布で定着した可能性は十分あると思われる。

(13) ハシブトガラス

日本鳥学会 (2000) は迷鳥 (Accidental Visitor) と記しているが、国京氏は多数生息していたが有害駆除で激減したと伝えている(黒田, 1926)。また、開拓以前および初期の南大東島でカラス類が観察されていることから(南大東村誌編集委員会編, 1990: p.912, 920, 933, 948, 1008, 1109, 1112)、留鳥だったが、その後絶滅したものと考えられる。1924年採集の標本は当初亜種ハシブトガラス*Corvus macrorhynchos japonensis*とされたが、一時期タイワンハシブトガラス*C. m. colonorum*に変更された(日本

鳥学会, 1932; 山階, 1934)。標本は1945年に焼失しているため(Hachisuka and Udagawa, 1953)、直接確認できないが、日本鳥学会 (1942) が亜種ハシブトガラスに戻していることから、何らかの検討がなされたものと思われる。南大東村ふるさと文化センターには時期不明の標本が1体あるが、詳細は不明で、島外産の可能性も考えられる。仮に南大東島産だとしても、かつての繁殖個体群ではなく、近年の迷行個体であろう。

これまでの結果および考察から、大東諸島の繁殖鳥類は(A)開拓によって絶滅したもの、(B)開拓以降に定着したもの、(C)開拓以前から現在まで繁殖しているものの3つに大きく分けられる。(A)に該当するのは7種(アホウドリ, カツオドリ, オオアジサシ, リュウキュウカラスバト, ウグイス, ヤマガラ, ハシブトガラス)で、森林か開けた海岸を主な繁殖環境としており、こうした環境が開拓により大きく破壊されたことが絶滅の主な原因であると推察される。(B)に該当するのは5種(ゴイサギ, カワセミ, モズ, アカモズ, スズメ、ただし、アカモズは近年消滅)で、定着の要因は様々だが、開拓による生態系の変化が大きく影響していると推察される。(C)に該当するのは12種(残る13種からノスリを除く。ただしヨシゴイ, カルガモおよびミサゴは戦前の記録が乏しいため、開拓以降に定着した可能性もある)で、このうち7種(カツブリ, リュウキュウヨシゴイ, ヨシゴイ, マガモ, カルガモ, ヒクイナ, バン)は淡水域を好む種であり、こうした種が多く定着しているのは、池沼が多い南北大東島の特徴だといえる。ノスリについては、開拓以前から定着していたのか、それとも偶発的な繁殖であったかは不明だが、繁殖個体群の消失には森林伐採による繁殖環境の減少など、人間活動の影響も大きく関わっていたと思われる。

大東諸島の繁殖鳥類相を沖縄県の他地域と比較すると、大東諸島だけで繁殖例がある種

はマガモ、ノスリおよびモズの3種で、ヨシゴイとミサゴおよびアカモズも繁殖が確認されれば、大東諸島だけということになる。これらの種は琉球列島では主に冬鳥であり、本土と越冬地を結ぶ本来の渡りルートから外れ、大東諸島に迷行した個体群がそのまま定着の機会を得たものと推察される。リュウキュウカラスバトは沖縄諸島と大東諸島の固有種だが、おそらく沖縄諸島から大東諸島に拡散し定着したものであろう。このように、大東諸島には本土由来の種と沖縄諸島を中心とした琉球列島由来の種が混在していると考えられる。

これとは別に、アホウドリなどの海鳥は古くから定着していたと思われ、北大東島の洞窟でみつかっている更新世後期の海鳥の骨(大城, 1987)や、かつて多数採掘された燐鉱の存在(海鳥の糞や死骸、魚骨の堆積に由来。北大東村誌編集委員会編, 1986)がそれを強く示唆している。

一方、沖縄諸島及び宮古・八重山諸島で繁殖するもので、大東諸島で繁殖していない種はクロサギ *Egretta sacra*, ミフウズラ *Turnix suscitator*, キジバト *Streptopelia orientalis*, アカショウビン *Halcyon coromanda*(夏鳥), キビタキ *Ficedula narcissina*, サンコウチョウ *Terpsiphone atrocaudata*(夏鳥)など10種以上あり、多くの種にとって大東諸島への拡散、定着が困難なものであることがうかがわれる。

今後の課題について

大東諸島の繁殖鳥類について考察してきたが、25種全てにおいて繁殖が確認されているわけではなく、また、今回述べた以外の種が繁殖している可能性も十分考えられ、今後、調査が不十分な夏期を中心に、繁殖確認を重点においていた調査が望まれる。また、疑問が残る固有亜種については詳細に標本調査を行ない、現在も生息する亜種については、標識調査や落鳥個体の収集などによってより多くの情報を得て、再検討することが重要と思われ

る。今回は述べなかったが、大東諸島を中継地、あるいは越冬地とする渡り鳥の実態を把握することも重要で、その点でも標識調査や落鳥個体の収集は重要である。また、リュウキュウコノハズクのように絶滅の危機にある個体群は、実態を把握し、保護対策を考えることも早急な課題であろう。

文 献

(末尾リストにないもの)

- 服部徹. 1889. 鳥嶋信天翁の話 動物学雑誌 1:405-411.
- 梶田学・真野徹・佐藤文男. 2002. 沖縄島に生息するウゲイス *Cettia diphone* の二型について—多変量解析によるリュウキュウウゲイスとダイトウウゲイスの再評価—. 山階鳥研報 33(2):148-167.
- 前田喜四雄. 2001. 日本コウモリ研究誌—翼手類の自然史. 東京大学出版会, 東京.
- 沖縄県環境保健部自然保護課(編). 1996. 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物—レッドデータおきなわ—. 沖縄県環境保健部自然保護課, 那覇.
- 大城逸朗. 1987. シリーズ沖縄の自然4 失われた生物—沖縄の化石—. 新星図書出版, 那覇.
- Severinghaus, L. L., Hsu, Y., Chen, Ch. and Tsai, Ch. 2002. Population differentiation of elegant scops owls (*Otus elegans*) on Ryukyu Islands(Abstract). International symposium: Molecular Perspectives on the Process of Dispersals, Isolations and Diversifications of Animals and Plants in the East Asian Islands: 15-16, 31.
- 常田守. 2001. 水が育む島 奄美大島. 文一総合出版, 東京.
- Yamashiro, S., Toda, M. and Ota, H. 2000. Clonal composition of the parthenogenetic gecko, *Lepidodactylus lugubris*, at the northernmost extremity of its range. Zoological Science 17:

1013-1020.

内田圭三. 1973. 動物, 八丈島誌. pp.36-51.
八丈島誌編集委員会. 東京.

文献調査の対象リスト

(発行年順で配列)

- A1 : Kuroda, NM. 1923. Descriptions of new forms of birds from the Borodino Islands. *Bulletin of the British Ornithologists' Club* 43:120-123.
- A2 : Kuroda, NM. 1925. A contribution to the knowledge of the avifauna of the Riu Kiu Islands and the vicinity. published by the author, Tokyo.
- A3 : 黒田長禮. 1926. 琉球孤島産鳥類の小採集物に就て. 鳥 5(22):79-95.
- A4 : 石澤健夫. 1927. 本州に於けるマガモの蕃殖地に就て. 鳥 5(23):261-264.
- A5 : Kuroda, NM.. 1927. Descriptions of two new forms. *Ibis* 12th Ser. 3:722-723.
- A6 : 黒田長禮. 1930. ヒメアマツバメの新渡来地. 鳥 6(29):314.
- A7 : 黒田長禮. 1932. 大東列島より初めて知らるる鳥類. 鳥 7(33,34):261-262.
- A8 : 日本鳥学会. 1932. 改訂 日本鳥類目録. 日本鳥学会, 東京.
- A9 : 山階芳麿. 1934. 日本の鳥類とその生態第1巻. 梓書房, 東京.
- B1 : 黒田長禮. 1935. 大東列島の鳥類に就て. 植物及動物 3(7):129-130.
- B2 : 山成不二麿. 1935. 北大東島に於ける磷酸礬土鉱床 [VII] 磷鉱の分布. 東北帝国大学理学部地質学古生物学教室研究邦文報告 (15):25-26.
- B3 : Yamashina, Y. 1938. A new subspecies of *Troglodytes troglodytes* from the Borodino Islands. *Tori* 10 (48):227-228.
- B4 : 山階芳麿. 1941. 日本の鳥類とその生態 第2巻. 岩波書店, 東京.
- B5 : 日本鳥学会. 1942. 日本鳥類目録 改訂 3版. 日本鳥学会, 東京.
- B6 : 清棲幸保. 1952. 日本鳥類大図鑑~. 講談社, 東京.
- B7 : Hachisuka, M. and Udagawa, T. 1953. Contribution to the ornithology of the Ryukyu Islands. *Quarterly Journal of the Taiwan Museum* (4):141-279.
- B8 : 三島冬嗣. 1956. アオバヅクの亜種に就て. 鳥獣集報 15(1):25-35.
- B9 : 日本鳥学会. 1958. 日本鳥類目録 改訂 4版. 日本鳥学会, 東京.
- C1 : 黒田長久. 1971. 南大東島のノスリ新亜種について. 鳥 20(89):125-129.
- C2 : 池原貞雄. 1973. 大東島の陸産脊椎動物. 大東島天然記念物特別調査報告. pp. 52-62. 文化庁, 東京.
- C3 : 日本鳥学会. 1974. 日本鳥類目録改訂 第5版. 学習研究社, 東京.
- C4 : 日本野鳥の会. 1975. 大東諸島. 環境庁委託調査 特定鳥類等調査. pp.269-298. 環境庁, 東京.
- C5 : 友利哲夫・新垣秀雄. 1975. 沖縄の自然野鳥. 新星図書, 那覇.
- C6 : 横口広芳. 1979. 島にすむ鳥の生態. 日経サイエンス 9(8):74-88.
- C7 : 中村一恵. 1979. 日本近海産シロハラミズナギドリの分類と分布. 海洋と生物 1(1):24-31.
- C8 : 日本野鳥の会. 1980. 短報—野鳥情報—. 野鳥 45(8):47-48.
- C9 : 畑正憲. 1986. 人魚の国 天然記念物の動物たち. 角川書店, 東京.
- D1 : 池田善英. 1986. 北大東島で冬期に観察された鳥類. 山階鳥類研究所研究報告 18:68-70.
- D2 : 北大東村誌編集委員会(編). 1986. 北大東村誌. 北大東村役場, 沖縄.
- D3 : 沖縄野鳥研究会(編). 1986. 沖縄県の野鳥. 沖縄野鳥研究会, 沖縄.
- D4 : 佐野昌男. 1988. 信州の自然誌 スズメ人里の野鳥. 信濃毎日新聞社, 長野.

- D5 : 南大東村誌編集委員会(編). 1990. 南大東村誌 改訂. 南大東村役場, 沖縄.
- D6 : 森岡弘之. 1990. トカラ列島の繁殖鳥類とその起源. 国立科学博物館専報 (23) :151-166.
- D7 : 大沢啓子・大沢夕志. 1990. 南大東島で観察された鳥類. 山階鳥類研究所研究報告 22:133-137.
- D8 : 環境庁自然保護局野生生物課(編). 1991. 日本の絶滅のおそれのある野生生物—レッドデータブック—脊椎動物編. 日本野生生物研究センター, 東京.
- D9 : 嵩原建二. 1991. 北大東島の鳥類について. 沖縄県教育委員会文化課紀要 (7) :88-98.
- E1 : 宮城邦治・嵩原建二. 1992. 北大東島の鳥類と哺乳類. ダイトウオオコウモリ保護対策緊急調査報告書. pp.53-62. 沖縄県教育委員会, 那覇.
- E2 : 安部直哉. 1993. 特異な「リュウキュウコノハズク」. *Birder* 7(8):18-21.
- E3 : 森岡照明・叶内拓哉・川田隆・山形則男. 1995. 図鑑 日本のワシタカ類. 文一総合出版, 東京.
- E4 : 大沢夕志・大沢啓子. 1995. オオコウモリの飛ぶ島. 山と渓谷社, 東京.
- E5 : McWhirter, D., Ikenaga, H., Iozawa, H., Shoyama, M. and Takehara, K. 1996. A Check-list of the birds of Okinawa Prefecture with notes on recent status including hypothetical records. *Bull. Okinawa Pref. Mus.* (22): 83-152.
- E6 : 嵩原建二・久貝勝盛・大城亀信. 1996. 最近(1995年4月から1996年3月)沖縄県で目撃された興味深い鳥類について. 沖縄県立博物館紀要 (22):173-178.
- E7 : 佐伯昌彦. 1996. 最近何か出でますか?—野鳥情報ネットワーク—35 沖縄県南大東島. *Birder* 10(10):97.
- E8 : 鹿嶋雄二. 1997a. Photo Gallery, カイツブリ(白変). *Birder* 11(4):57.
- E9 : 鹿嶋雄二. 1997b. 1996年日本に舞い降りた珍鳥たち カラシラサギ. *Birder* 11(6): 47-48.
- F1 : 沖縄県環境保健部自然保護課(編). 1997. 特殊鳥類生息環境調査 伊平屋島・久米島・南大東島・北大東島湿地編. 沖縄県環境保健部自然保護課, 那覇.
- F2 : 大沢夕志・大沢啓子. 1997. 南大東島自然ガイドブック. ボーダーインク, 那覇.
- F3 : 大沢夕志・大沢啓子. 1998. 南大東島自然ガイドブック(第2刷). ボーダーインク, 那覇.
- F4 : 茂田良光. 1999. メジロ(2)—日本産と外国産の亜種の識別. *Birder* 13(3):46-53.
- F5 : 嵩原建二・姉崎悟・高木昌興・奥土晴夫・金川雅之. 1999. 南大東島で最近新たに記録された鳥類について. 沖縄県立博物館紀要 (25):75-93.
- F6 : 日本鳥学会. 2000. 日本鳥類目録 改訂第6版. 日本鳥学会, 帯広.
- F7 : 奥土晴夫. 2000. 南大東島の自然. ニライ社, 那覇.
- F8 : 高木昌興. 2000. 南大東島に生息するモズの羽色および形態の記載, 島内の分布状況と繁殖生態. 山階鳥類研究所研究報告 32 (1):13-23.
- F9 : 姉崎悟・嵩原建二. 2001. 南大東島産鳥類目録. 沖縄県立博物館紀要 (27):51-75.
- G1 : 説田健一・時田賢一. 2001. 柳原要二鳥類コレクション標本目録. 岐阜県博物館調査研究報告書 (22):17-24.
- G2 : 嵩原建二・中村和雄. 2001. 大東諸島に生息するダイトウコノハズクの個体数の推定. 日本鳥学会2001年度大会講演要旨集 :114.
- G3 : Driscoll, P. V. and Ueta, M. 2002. The migration route and behaviour of Eastern Curlews *Numenius madagascariensis*. *Ibis* 144 (on-line) :E119-E130.

- G4 : 池田啓・伊澤雅子(監修). 2002. 週刊
日本の天然記念物 動物編19 ダイトウオ
オコウモリ. 小学館, 東京.
- G5 : 環境省自然環境局野生生物課(編). 2002.
改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生
物—レッドデータブックー2 鳥類. 自然
環境研究センター, 東京.
- G6 : 沖縄野鳥研究会(編). 2002. 沖縄の野
鳥. 新報出版, 那覇.
- 折居彪二郎採集ノート類
(苦小牧市立中央図書館所蔵)
- O1 : 1922年「琉球・大東・北大東列島・台
湾～九州間鳥類標本台帳」(資料番号：
1040270025)
- O2 : 1936年「琉球の鳥類採集ノート」(資料：
104027215)

大東諸島產鳥類目錄

N：北大東鳥	S：南大東鳥	O：沖大東島	◎：南北両島	※灰色地のマークは、山階鳥類研究所に南大東島巣標本あり
*：日本鳥学会 (2000) が大東諸島の分布を示していない種				
EX：絶滅	CR：絶滅危惧I類	VU：絶滅危惧IB類	NT：準絶滅危惧	DD：情報不足
(環境省自然環境局野生生物課 2002)				
絶滅：絶滅確実 危急：絶滅危惧				

杞風：杞微風。《周易》六四：杞微風，利女貞。

沖大東島産を亞種カツオドリ *platensis* に分類 / A2
 南大東島産を亞種カツオドリに分類 / B6

沖大東島で多分繁殖 / B1

1989年北大東島西港で1羽観察 / E1

1903.6.19に北大東島で「ヲサドリ」の群れと卵を観察 / D5 (p.934)

開拓初期に北大東島で「カツオ鳥」の卵を採取 / D5 (p.1193)

1909.4.-6に南大東島を訪れた者が山中で「カツオドリ」を観察 / D5 (p.1117)

1916年以前に南大東島で「カツオドリ」の卵を探取 / D5 (p.140)

1903.6.17に沖大東島で「カツオドリ」の群れと卵を観察 / D5 (p.935)

1912年頭沖大東島に「オサ鳥」が群れで飛来 / D2 (p.638)

南大東島産を亞種カワウ *handae* に分類 / B5

1936年南大東島産の標本は記録月に誤りあり ([31.XI.1936])

折居は「ウ」と記述 / O2

012. カワウ *Phalacrocorax carbo*

1936 S O2
1930 N S D9, F4

1991 S E4

1996 S F1, 大沢

1997 S S F1, 大沢

2001 S PS

N E5

G6

1996 S F5

1998 S 襲土

2000 S S F9

S 文

PS A7

2002.7.10(台風通過後)に南大東島海軍棒で若鳥1羽が鳥民に保護され、給餌ののち19日に放鳥 / PS

014. オオシソカンドリ *Fregata minor* *

2002 S S PS

1931 年 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 C4

1974 S . S . S . D7

1989 N . S . S . D9, F4

1990 S . S . E4

1991 S . S . E4

1992 S . S . E4

1994 S . S . BA, F9

1995 S . S . S . E7, F1, 大沢

1996 S . S . 大沢

1997 S . S . P9

1999 S . S . S . F9

2000 S . S . S . PS, 宇佐見, 土方

2001 S . S . S . F9

2002 S N S S S ○ ○ PS, 宇佐見, 土方

S A2

1922 S S A2

1923 S S A2

1928 S S D7

1936 S S D7

1972 ○ C2

1974 ○ C4

1988 S D7

1989 S S D7

1990 S N S D9, F4

1991 ○ S D9, F4

1992 S E4

1993 S E4

1994 S E4

1995 S BA, F9

1996 S E7, 大沢

1997 S S F1, 大沢

1999 F9

2000 S F9

2001 S S PS, 宇佐見

2002 S S PS, 中川

015. コダンカンドリ *F. ariel*

コウノトリ目

1928 S S B6

1974 S S C4

1989 N S D7

1990 S S D9, F4

1991 S S E4

1992 S S E4

1993 S S BA, F9

1994 S S S E7

1995 S S F1, 大沢

1996 S S 大沢

1997 S S P9

1998 S S S .

1999 S S S .

2000 S S S .

2001 S S S .

2002 S S S .

1922 S S A2

1923 S S A2

1928 S S D7

1936 S S D7

1972 ○ C2

1974 ○ C4

1988 S D7

1989 S S D7

1990 S N S D9, F4

1991 ○ S D9, F4

1992 S E4

1993 S E4

1994 S E4

1995 S BA, F9

1996 S E7, 大沢

1997 S S F1, 大沢

1999 F9

2000 S F9

2001 S S PS, 宇佐見

2002 S S PS, 中川

016. ヨシゴイ *Izobrychus sinensis*

1928 S S B6

1974 S S C4

1989 N S D7

1990 S S D9, F4

1991 S S E4

1992 S S E4

1993 S S BA, F9

1994 S S S E7

1995 S S F1, 大沢

1996 S S 大沢

1997 S S P9

1998 S S S .

1999 S S S .

2000 S S S .

2001 S S S .

2002 S S S .

1922 S S A2

1923 S S A2

1928 S S D7

1936 S S D7

1972 ○ C2

1974 ○ C4

1988 S D7

1989 S S D7

1990 S N S D9, F4

1991 ○ S D9, F4

1992 S E4

1993 S E4

1994 S E4

1995 S BA, F9

1996 S E7, 大沢

1997 S S F1, 大沢

1999 F9

2000 S F9

2001 S S PS, 宇佐見

2002 S S PS, 中川

017. オオヨシゴイ *I. eurhythmus [EN]*

1922 S S A2

1923 S S A2

1928 S S D7

1936 S S D7

1972 ○ C2

1974 ○ C4

1988 S D7

1989 S S D7

1990 S N S D9, F4

1991 ○ S D9, F4

1992 S E4

1993 S E4

1994 S E4

1995 S BA, F9

1996 S E7, 大沢

1997 S S F1, 大沢

1999 F9

2000 S F9

2001 S S PS, 宇佐見

2002 S S PS, 中川

018. リエウキヌウヨシゴイ *I. cinnamomeus* [希少]

1922 S S A2

1923 S S A2

1928 S S D7

1936 S S D7

1972 ○ C2

1974 ○ C4

1988 S D7

1989 S S D7

1990 S N S D9, F4

1991 ○ S D9, F4

1992 S E4

1993 S E4

1994 S E4

1995 S BA, F9

1996 S E7, 大沢

1997 S S F1, 大沢

1999 F9

2000 S F9

2001 S S PS, 宇佐見

2002 S S PS, 中川

折居は「大東小ヨシゴエ」と記述 / O1

1923.5に南大東大池で巣立ち間もない幼鳥を複数確認 / 中川

1932年に北大東島でオス成鳥1羽を採取 / A7

南大東島で四季を通じて観察 / F7

019. ゴイサギ <i>Nycticorax nycticorax</i>	1988	S	D7		
	1989	S	D7		
	1990	S	N	S	D9 E4
	1991	S	S	E4	
	1992	S	S	E4	
	1993	S		E4	
	1994	S		S	E4
	1995	S	S	E4 F9	
	1996	S		S	E4 F9
	1997	S	S	S	F1 大沢
	1998	S	S	F9	
	1999	S	S		
	2000	S	S	S	F9
	2001	S	S	N	S PS 土方
	2002	N	S	N	S PS
020. ササゴイ <i>Butorides striatus</i>	1922	S	S	A2	南大東島で亜種ササゴイ <i>amurensis</i> を確認／A2
	1928	S	S	B6	1986年以前に北大東島で記録あり／D2
	1936	S	S	B6	1988～92年に北大東島で記録あり／E1
	1939	S	S	D7	南大東島で四季を通して観察／F7
	1940	S	S	S	
	1991	S	S	E4	
	1992	S	S	E4	
	1997	S			大沢
	1999	S			F9
	2000	S	S		F9
	2001	S	S	N	PS. 宇佐見
	2002	S	S	S	PS
021. アカガシラサギ <i>Ardeola bacchus</i> *	1988	S	S	S	F5 奥土
	1989	S	N	S	PS
	2002	S	N	S	PS
022. アマサギ <i>Bubulcus ibis</i>	1923	S	A2		
	1936	S	B6		
	1974	S			
	1986	N	C4		
	1989	S	S	D7	南大東島で秋期～春期に観察／F7
	1990	S	N	S D9 F4	
	1991	◎	S	D9 E4	
	1992	S	S	B4	
	1993	S	S	B4	
	1994	S		S E4	
	1995	S		B4	
	1996	S	S	S E7 大沢 蓬鳴	
	1997	N	S	F1 F9	
	1999	S	S	F9	
	2000	S	S		
	2001	N	S	S	PS. 宇佐見
	2002	N	S	S	PS
023. ダイサギ <i>Egretta alba</i> *	1988	S	D7		
	1989	S	D7		
	1990	N	N	S D9 E4	
	1991	S		E4	
	1992	S		E4	
	1993	S		E4	
	1994	S		S B4	
	1995	S	S	E4 F9	
	1996	S		S F1 大沢	
	1997	S	N	F1 F9 大沢	
	1999	S	S	F9	
	2000	S	S	F9	
	2001	S	N	PS. 宇佐見, 土方	
	2002	S	N	PS. 宇佐見, 土方	

024. チュウサギ <i>E. intermedia</i>	1936	S	B6	南大東島を垂穂チユウサギ <i>Intermediate</i> に分類あり/B4
	1974	N	C4	南大東島で秋期～春期に観察/H7
	1984	N	E5 (修正)	
	1988	S	D7	
	1989	S	D7	
	1990	S	D9, E4, 大沢	
	1991	S	B4	
	1992	S	F4	
	1993	S	B4	
	1994	S	S, B4	
	1995	S	B4, F9	
	1996	S	S, F1, 大沢	
	1997	S, S, N	S, F1, F9, 大沢	
	1999	S, S	F9	
	2000	S	F9	
	2001	S	S, N, S, PS	
025. コサギ <i>E. garzetta</i>	1989	S, S, S, S	○ ○ ○ S, PS, 土方	1988～92年に北大東島で記録あり/E1
	1990	S, S, S, S	S, E4	南大東島で四季を通じて観察/H7
	1991	S	E4	
	1992	S	N, B4, 大沢	
	1993	S	F4	
	1994	S	S, F4	
	1995	S	F4, F9	
	1996	S	S, 大沢, 鷺嶼	
	1997	S, S, S	S, F1, F9, 大沢	
	1999	S, S	F9	
	2000	S, S	F9	
	2001	S, S	S, N, S, PS, 佐見王方	
	2002	S, S, S	S, S, ○ S, S, S, PS, 土方	
026. カラシラサギ <i>E. eulophotes</i> *	[DD] 1996	S	E9	
027. クロサギ <i>E. sacra</i> *	1991	S	F2, 土方	1997年以前に北大東島で記録あり/F1
	2002	S	E5	2002.2.1に亀池港で黒色型を確認/土方
028. アオサギ <i>Ardea cinerea</i>	1988	N	S, D7	1936.10.31に南大東島で確認/O2
	1990	S	S, D9, E4	1975年以前に北大東諸島で記録あり/C5
	1991	○	D9, E4	南大東島で秋期～春期に観察/H7
	1992	S	N, E4, 大沢	
	1993	S	E4	
	1994	S	S, F4	
	1995	S	F4, F9	
	1996	S	S, F1, 大沢	
	1997	S	F1, F9	
	1999	S	F9	
	2000	S	F9	
	2001	S	S, PS	
	2002	S, S, N, S	○ ○ ○ S, PS, 土方	
029. ムラサキサギ <i>A. purpurea</i> [危急]	1974	○	C4	1988～92年に北大東島で記録あり/E1
	1998	S	F5	
030. ヘラサギ <i>Piatalea leucorodia</i> [DD]	1995	S	S, F6	
	2001	N	S, PS	
	2002	N	PS	
031. クロツラヘラサギ <i>P. minor</i>	1997	S, S, S	S, F5	
[CR, 希少]	1998	S, S, S	F5	
	1999	S, S, S	F5	
	2000	S, S, S	F5	
	2001	S, S, S	F5	
	2002	S, S, S	F5	
032. コクガシ <i>Brania bernicia</i> [VU]	1998	S	F5	1997年冬～1998年春に南大東島で5羽観察/H7
033. サカツラガシ <i>Anser cygnoides</i> * [DD]	1997	S, S	F1, 大沢	
034. コハクチョウ <i>Cygnus columbianus</i>				1986年以前に北大東島で記録あり/D3
035. オシドリ <i>Aix galericulata</i> [危急]	1936	S	B7	

036.	<i>Anas platyrhynchos</i>	1999	S	F5	A5	A2	南大東島で亜種マガモ <i>platyrhynchos</i> を確認/A2
		1922	S		B6		北大東島でヒナを確認/C4
		1923	S			A2	北大東島で卵・ヒナを確認/A2A4
		1928	S	S	F9,山階標本		南大東島は羽色が地味な傾向にある/C6
		936		S	C2		繁殖するオスの終羽は羽色が地味な傾向にある/C6
		1972	N		C4		北大東島で四季を通じて観察/F7
		1974	N		D1,F5		南大東島新東貯水池で2002.4.11に3羽、13日に4羽、次種との中間的羽色の個体を観察/PS
		1984	N	N			
		1988	N	S	N	N	
		1989	N	N	N	S	
		1990	N	N	N	D9,E1,E4,大沢	
		1991	○	S	N		D9,E1,E4
		1992	N	S	N		N, E1,B4,大沢
		1993	S		E4		
		1994	S		E4		
		1995	S		E4		
		1996	S		E4,F9		
		1997	S	N	E4,F9		
		1999	S	S	F9		
		2000	S	S	F9		
		2001	S	S	F9		
		2002	S	N	PS,土方		
037.	<i>A. poecilorhyncha</i>	1928	S	B6			
		1936		S	F9		2002.4.24に南大東島大東神社沿いの湿地でヒナを確認(16日にも種不明のヒナの雛死体確認) /PS
		1988		S	D7		2002.4.24以前に北大東島で記録あり/D2
		1989		S	D7		1986年以前に北大東島で記録あり/F7
		1992			N		南大東島で冬期～春期に観察/F7
		1994			S		南大東島新東貯水池で2002.4.11に3羽、13日に4羽、前種との中間的羽色の個体を観察/PS
		1995	S		E4		
		1996			S		
		1997	S		F1		
		1999			F1,大沢		
		2000	S	S	F9		
		2001	S	N	F9		
		2002	S	N	PS,土方		
038.	<i>A. crecca</i>	1928	S	B6			
		1936		S	B6		南大東島で秋期～春期に観察/F7
		1990		N	D9		
		1993	S		B4		
		1996			S		
		1997	S		F1		
		2000	S		F1,大沢		
		2001	S		F9		
		2002	S	N	PS,土方		
039.	<i>A. strepera</i>	1992		N			
		1993	S		E4		1990～92年に北大東島で記録あり/E4
		1996			S		
		1997	S		F1		
		2000	S		F9		
040.	<i>A. penelope</i>	1996			S		
		1997	S		F1,F2		1988～92年に北大東島で記録あり/E1
		1998			S		南大東島で秋期～春期に観察/F7
		2000			S		
		2002	S		PS		
041.	<i>A. acuta</i>	1936			S		南大東島を亞種オナガガモ <i>acutai</i> に分類/B5
		1988			B7		南大東島で秋期～春期に観察/F7
		1990			D7		
		1992			N		
		1994			D9		
					N		南大東島
					E4		

052.	ツミ <i>A. gularis</i>	1936	S N	F9 D9	山階鳥類研究所所蔵の南大東島産を亞種ツミ <i>gularis</i> に分類/E3
1992		1990	N N	D9	
1998	S S				大沢
2000	S S				奥土
2002	S S		S PS	F9	
053.	ハイタカ <i>A. nisus</i> [NT]	1936	S S	B6 S PS	南大東島産を亞種ハイタカ <i>nissostomus</i> に分類/B4
1994			S B4		
1995	S				PA
1997	S				大沢
054.	ノスリ <i>Buteo buteo</i> [ダイトウノスリ:CR,危惧]	1964	S N	C1 C2	1964年に南大東島で採集し胸育した個体をもとに亞種ダイトウノスリ <i>B.b.ostrioi</i> を記録/C1
1972		N N	D8 N		ダイトウノスリの模式標本は生体で、のちにカゴ抜けした/D8
1973		N N	N N		1972年北大東島でもダイトウノスリの特徴に多くの点で一致/C2
1992	S S				亜種の検討が必要/D8
1997	S S				北大東島で巢・卵・ヒナを確認/C1
1998	S S				南大東島で巢・卵・ヒナを確認/C1
1999	S				1990.11.1に北大東島で本種と思われる個体を観察/D9E1
055.	サシバ <i>Butastur indicus</i>	1936	S N	S B6	
1984		N N			折居は「稚子隼」と記述/O2
1988					B5(修正)
1990	N		N D9	S D7	
1996					
2000	S N				S F1
2002	N		S PS	F9	
056.	ハイイロチユウヒ <i>Circus cyaneus</i> *	1998	S 1996		
057.	チュウヒ <i>C. spilonotus</i> [VU]	1998	S 1990		
1990			S 1991		
1991	S				
058.	ハヤブサ <i>Falco peregrinus</i> [亜種:ヤフサ:VU,危急]	1923			
1989			S A2		
1996			S D7		
1997	S		S D7		
1998	S		S F5		
2001			S F5		
2002			S PS		
059.	チヨウゲンボウ <i>F. tinamoides</i>	1988			
1990		N	S D9,E4		
1991	S		S EA		
1992			N S EA		
1994			S EA		
1995	S				
1996			S EA		
1997	S		S EA		
1999		S			
2000	S		S F9		
2001	S		S F9		
2002	S		S PS,土方		
	ツル 目 年	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12	文 献	備 考	
060.	マガヅル <i>Grus vipio</i> [VU]	1922	S N	A2 C4	1983~84年の冬期に南大東島で若鳥の記録あり/D3E5
061.	ヒクイナ <i>Porzana fusca</i> [リュウキュウヒクイナ:希少]	1974	S N		南大東島で亜種リュウキュウヒクイナ <i>phaeopyga</i> を確認/A2
1989		S N			
1990		N	D7	南大東島でヒナを確認/F2	
1993	S		D9	1986.11.1に南大東島で観察/O2	
1996		S S			
1999		S S			
2000	S		F9 G6		
2001	S		F9		
2002	N	S S N N N N PS	PS PS		

062.	バン <i>Gallinula chloropus</i>	1922	S	S	A2	南大東島産を亜種バン <i>indicata</i> に分類／A8
		1928	S	S	B6	南大東島でヒナを確認／C4
		1936	S	S	B6	
		1972	◎	C2		
		1974	◎	C4	D1,E5 (修正)	
063.	ツルクイナ <i>Gallicrex cinerea</i> * [希少]	1928	S	S	B6	1997年以前に南大東島で記録あり／F2
064.	オオバン <i>Fulica atra</i> [希少]	1928	S	S	B6	南大東島産を亜種オオバン <i>atra</i> に分類／B6
		1988	S	S	D7	1936.11.16に南大東島で観察／O2
		1990	S	S	E4	南大東島で秋期～春期に観察／F7
		1991	S	S	E4	
		1992	N	S	N	
		1994	S	S	S	
		1995	S	S	E4,F9	
		1996	S	S	S	
		1997	S	S	E1,F1,鷺嶼	
		1999	S	S	F1,F9,大沢	
		2000	S	S	F9	
		2001	S	S	F9	
		2002	S	S	PS,宇佐見,土方	
065.	コチドリ <i>Charadrius dubius</i>	1936	S	S	B7	南大東島産を亜種コチドリ <i>cronicus</i> に分類／B9
		1984	N	S	E5	1936年南大東島産は亜種ミナミコチドリ <i>dubius</i> に分類されたこともある／B5,B7
		1989	S	N	D7	南大東島で春期と秋期に観察／F7
		1990	S	N	D9,大沢	
		1997	S	S	F1	
		1998	S	S	奥土	
		2000	S	S	F9	
		2002	N	◎	PS	
066.	シロチドリ <i>Ch. alexandrinus</i> [希少]	1995	S	S	文獻	参考
		2001	S	S	B7	
		2002	N	N	E5	
		2002	S	N	D7	
		2002	S	N	D9,大沢	
		2002	S	N	F1	
		2002	S	N	奥土	
		2002	S	N	F9	
		2002	S	◎	PS	
		2002	S	S	PS	1936.10.30に南大東島で1羽観察／O2
067.	メダイチドリ <i>Ch. mongolus</i>	1923	S	S		
		2002	S	S		
068.	オオメダイチドリ <i>Ch. leschenaultii</i>	1974	N	S	A2	大東諸島産を亜種メダイチドリ <i>stegmanni</i> に分類／B5
		1992	S	S	C4	
		2000	S	S	F4	
		2000	S	S	F9	
069.	ムナグロ <i>Pluvialis fulva</i>	1922	◎	S	A2	1911年頃に沖大東で成鳥2羽を採集／A2
		1928	◎	S	B6	南大東島で秋期～春期に観察／F7
		1936	S	S	C4	折居は「黒」、「アイグロ」等と記述／O1
		1974	N	S	E5	
		1984	N	S	D7	
		1988	S	S	D7	
		1989	S	S	D7	
		1990	N	N	D9,大沢	

1991	S	S		P4	
1992	S	S		N	E1, 大沢
1993	S	S			P4
1994	S	S		S	
1995	S	S		P4, F9	
1996	S	S			鹿鳴
1997	S	S		F9	大沢
1998	S	S		F9	
1999	S	S			PS, 土方
2000	S	S			
2001	S	S		N	
2002	S	N	S	S	
2003	S	N	S	S	
2004	S	N	S	S	
2005	S			S	
2006	S			S	
2007	S			S	
2008	S			S	
2009	S			S	
2010	S			S	
2011	S			S	
2012	S			S	
2013	S			S	
2014	S			S	
2015	S			S	
2016	S			S	
2017	S			S	
2018	S			S	
2019	S			S	
2020	S			S	
2021	S			S	
2022	S			S	
2023	S			S	
2024	S			S	
2025	S			S	
2026	S			S	
2027	S			S	
2028	S			S	
2029	S			S	
2030	S			S	
2031	S			S	
2032	S			S	
2033	S			S	
2034	S			S	
2035	S			S	
2036	S			S	
2037	S			S	
2038	S			S	
2039	S			S	
2040	S			S	
2041	S			S	
2042	S			S	
2043	S			S	
2044	S			S	
2045	S			S	
2046	S			S	
2047	S			S	
2048	S			S	
2049	S			S	
2050	S			S	
2051	S			S	
2052	S			S	
2053	S			S	
2054	S			S	
2055	S			S	
2056	S			S	
2057	S			S	
2058	S			S	
2059	S			S	
2060	S			S	
2061	S			S	
2062	S			S	
2063	S			S	
2064	S			S	
2065	S			S	
2066	S			S	
2067	S			S	
2068	S			S	
2069	S			S	
2070	S			S	
2071	S			S	
2072	S			S	
2073	S			S	
2074	S			S	
2075	S			S	
2076	S			S	
2077	S			S	
2078	S			S	
2079	S			S	
2080	S			S	
2081	S			S	
2082	S			S	
2083	S			S	
2084	S			S	
2085	S			S	
2086	S			S	
2087	S			S	
2088	S			S	
2089	S			S	
2090	S			S	
2091	S			S	
2092	S			S	
2093	S			S	
2094	S			S	
2095	S			S	
2096	S			S	
2097	S			S	
2098	S			S	
2099	S			S	
2100	S			S	
2101	S			S	
2102	S			S	
2103	S			S	
2104	S			S	
2105	S			S	
2106	S			S	
2107	S			S	
2108	S			S	
2109	S			S	
2110	S			S	
2111	S			S	
2112	S			S	
2113	S			S	
2114	S			S	
2115	S			S	
2116	S			S	
2117	S			S	
2118	S			S	
2119	S			S	
2120	S			S	
2121	S			S	
2122	S			S	
2123	S			S	
2124	S			S	
2125	S			S	
2126	S			S	
2127	S			S	
2128	S			S	
2129	S			S	
2130	S			S	
2131	S			S	
2132	S			S	
2133	S			S	
2134	S			S	
2135	S			S	
2136	S			S	
2137	S			S	
2138	S			S	
2139	S			S	
2140	S			S	
2141	S			S	
2142	S			S	
2143	S			S	
2144	S			S	
2145	S			S	
2146	S			S	
2147	S			S	
2148	S			S	
2149	S			S	
2150	S			S	
2151	S			S	
2152	S			S	
2153	S			S	
2154	S			S	
2155	S			S	
2156	S			S	
2157	S			S	
2158	S			S	
2159	S			S	
2160	S			S	
2161	S			S	
2162	S			S	
2163	S			S	
2164	S			S	
2165	S			S	
2166	S			S	
2167	S			S	
2168	S			S	
2169	S			S	
2170	S			S	
2171	S			S	
2172	S			S	
2173	S			S	
2174	S			S	
2175	S			S	
2176	S			S	
2177	S			S	
2178	S			S	
2179	S			S	
2180	S			S	
2181	S			S	
2182	S			S	
2183	S			S	
2184	S			S	
2185	S			S	
2186	S			S	
2187	S			S	
2188	S			S	
2189	S			S	
2190	S			S	
2191	S			S	
2192	S			S	
2193	S			S	
2194	S			S	
2195	S			S	
2196	S			S	
2197	S			S	
2198	S			S	
2199	S			S	
2200	S			S	
2201	S			S	
2202	S			S	
2203	S			S	
2204	S			S	
2205	S			S	
2206	S			S	
2207	S			S	
2208	S			S	
2209	S			S	
2210	S			S	
2211	S			S	
2212	S			S	
2213	S			S	
2214	S			S	
2215	S			S	
2216	S			S	
2217	S			S	
2218	S			S	
2219	S			S	
2220	S			S	
2221	S			S	
2222	S			S	
2223	S			S	
2224	S			S	
2225	S			S	
2226	S			S	
2227	S			S	
2228	S			S	
2229	S			S	
2230	S			S	
2231	S			S	
2232	S			S	
2233	S			S	
2234	S			S	
2235	S			S	
2236	S			S	
2237	S			S	
2238	S			S	
2239	S			S	
2240	S			S	
2241	S			S	
2242	S			S	
2243	S			S	
2244	S			S	
2245	S			S	
2246	S			S	
2247	S			S	
2248	S			S	
2249	S			S	
2250	S			S	
2251	S			S	
2252	S			S	
2253	S			S	
2254	S			S	
2255	S			S	
2256	S			S	
2257	S			S	
2258	S			S	
2259	S			S	
2260	S			S	
2261	S			S	
2262	S			S	
2263	S			S	
2264	S			S	
2265	S			S	
2266	S			S	
2267	S			S	
2268	S			S	
2269	S			S	
2270	S			S	
2271	S			S	
2272	S			S	
2273	S			S	
2274	S			S	
2275	S			S	
2276	S			S	
2277	S			S	
2278	S			S	
2279	S			S	
2280	S			S	
2281	S			S	
2282	S			S	
2283	S			S	
2284	S			S	
2285	S			S	
2286	S			S	
2287	S			S	
2288	S			S	
2289	S			S	
2290	S			S	
2291	S			S	
2292	S			S	
2293	S			S	
2294	S			S	
2295	S			S	
2296	S			S	
2297	S			S	
2298	S			S	
2299	S			S	
2300	S			S	
2301	S			S	
2302	S			S	
2303	S			S	
2304	S			S	
2305	S			S	
2306	S			S	
2307	S			S	
2308	S			S	
2309	S			S	
2310	S			S	
2311	S			S	
2312	S			S	
2313	S			S	
2314	S			S	
2315	S			S	
2316	S			S	
2317	S			S	
2318	S			S	
2319	S			S	
2320	S			S	
2321	S			S	
2322	S			S	
2323	S			S	
2324	S			S	
2325	S			S	
2326	S			S	
2327	S			S	
2328	S			S	
2329	S			S	
2330	S			S	
2331	S			S	
2332	S			S	
2333	S			S	
2334	S			S	
2335	S			S	
2336	S</td				

		S	D7	南大東島で春期と秋期に観察／F7
1988 1990 1991 1996 1998 2000 2001 2002	S S S S S S S S	S S S S S N N N	S D4 E4 鷺 奥土 F9 PS PS	南大東島で春期と秋期に観察／F7
085. タカブシギ <i>T. ochropus</i>	1972 1998 2000 2002	N S S S	大沢 奥土 F9 PS	1988~92年に北大東島で記録あり／E1 南大東島で冬期に観察／F7
086. タカブシギ <i>T. glareola</i>	1928 1936 1972 1989 1990 1997 1998 2001 2002	S S S S N S S N S	S B7 C2 D7 D9 大沢 F1 奥土 PS PS	南大東島で秋期～春期に観察／F7
087. メリケンキアシギ <i>Heteroscelus incanus</i>	1974 1928 1974 1989 1990 1991 1992 1993 1996 1998 2000 2002	S S S S S S S S S S S S	C4 B6 C4 D7 大沢 E4 E4 E4 E4 E4 F9 PS	1911年頃に沖大東島で1羽採集記録あり／A2 1974年以前にも南大東島で記録あり／C3 1936.11.23に南大東島で観察／O2 1986年以前に北大東島で記録あり／D2
088. キアシギ <i>H. brevipes</i>	1974 1989 1990 1991 1992 1993 1996 1998 2000 2002	S S S S S S S S S S	N N N E4 E4 E4 E4 E4 F9 PS	1936.11.23に南大東島で観察／O2 1986年以前に北大東島で記録あり／D2
089. イソシギ <i>Actitis hypoleucos</i>	1996 1972 1974 1990 1991 1993 1996 1997 1999 2000 2001 2002	S S S N S S S S S S S S	N S S S S S S S S S S S	1990~1992年に北大東島で記録あり／E4 南大東島で秋期～春期に記録／F7
090. ソリハシシギ <i>Xenus cinereus</i> *	1998 2000 2001	S S S	S S S	1990~1992年に北大東島で記録あり／E4 南大東島で秋期～春期に記録／F7
091. オグロシギ <i>Limosa limosa</i> *	2000 2001	S S	S S	F9 F9 F9 PS PS
092. オオソリハシシギ <i>L. lapponica</i>	1997 1998 2000 2001	S S S S	○ S S S	F5 G6 F9 PS
093. ダイシャクシギ <i>Numenius arquata</i>	1988 1989	S S	○ S	S D7
094. ホウロクシギ <i>N. madagascariensis</i> [VU]	1939 1936 1938	S S SO	○ S S	1991.5に南大東島で本種ないし次種と思われる個体を観察／E4 1998年の個体はバニアニアニア神から沖・南大東を経由後吉野川河口へ北上／G3 G3

095. チェウシャクシギ <i>N. phaeopus</i>	1992 1986 1989 1998	N S S S	S B5 D7 奥土	A2 南大東島で亜種チエウシャクシギを確認/A2 1988~92年に北大東島で記録あり/E1
096. ヤマシギ <i>Scolopax rusticola</i>	1936 1990 1994 1995 1997 1998 1999 2000 2001	S N S S S S S S	S B6 D9 E4 E4 F1 S S S F9 PS,土方	1911年頃に沖大東島で1羽採集/A2 1911年頃に沖大東島で1羽採集/A2 4~5月に沖大東島に20~30羽が常と情報あり/A2
097. タシギ <i>Gallinago gallinago</i>	1928 1936 1984 1989 1990 1991 1997 2000 2001	S N S S N S S S S	S S S N D9 E4 F9, 大沢 F9 PS,中川,土方	南大東島産を亜種タシギ <i>gallinago</i> に分類/B5 南大東島で秋期~冬期に観察/F7
098. ハリオシギ <i>G. stenura</i>	1928 2002	S S	S S	B6 PS
099. チュウワジシギ <i>G. megala</i>	1922 1928 2002	S S S	S A2 山階標本 N N PS	1986年以前に北大東島で記録あり/D2 折居は「大地シギ」と記述/O1
100. オオジシギ <i>G. hardwickii</i> [NT]	1928 1936 2002	S S S	S B6 B7 PS	1986年以前に北大東島で撮影された亜種セイタカシギ <i>himantopus</i> の写真あり/F7 南大東島で記録あり/E1 南大東島で秋期~冬期に観察/F7
101. セイタカシギ科	1972 1990 1991 1996 1998 2000 2001 2002	年 1 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12	文 獻 C2 S E4 E4 B6 F5 F9 PS PS PS	備 考 南大東島で撮影された亜種セイタカシギ <i>himantopus</i> の写真あり/F7 1988~92年に北大東島で記録あり/E1 南大東島で秋期~冬期に観察/F7
102. アカエリヒレアシシギ <i>Phalaropus lobatus</i> *	2002	年 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12	文 獻 S PS PS	2002.11.20に南大東島空港北側の貯水池で冬羽羽を確認/PS
103. ツバメチドリ科 [VU, 危急] <i>Glareola maldivarum</i>	1997	S	F5	備 考 南大東島で春期に観察/F7
104. コリカモメ <i>Larus ridibundus</i> *	1998	S	S F3,F5	備 考
105. ゼグロカモメ <i>L. argentatus</i>	1936 2001 2002	S S S	S B7 PS,土方 土方	南大東島産を亜種ゼグロカモメ <i>vegae</i> に分類/B5 2001.2.1に南大東島の西港で1羽、電池港で11羽を確認/土方
106. ヴミネコ <i>L. crassirostris</i> *	1991 2001 2002	◎ S S	D9,F2 PS,土方 土方	2001.2.1に南大東島の西港で8羽、電池港で48羽を確認/土方
107. ミツユビカモメ <i>Rissa tridactyla</i> *	2001	S	土方	2001.2.1に南大東島の西港で1羽を確認/土方
108. ハジロクロハラアジサシ	1928	S	PS	土方氏撮影の写真から亜種ミツユビカモメ <i>policaris</i> と確認

122. アオハクダ <i>Ninox scutulata</i>	1922	○	A2	1922年北大東島産を亞種チヨウセンアオハクダ <i>macroptera</i> に分類／B8											
	1936	○	B6	1922年南大東島産は亞種不明／B8											
	1990	N	D9	1936年南大東島産を亞種アオハクダ <i>japonica</i> に分類／B8											
	1998	S	F5	チヨウセンアオハクダが南大東島にも分布／B9											
	2000	S	F9												
123. ヨタカ <i>Caprimulgus indicus</i>	2002	N	N	備考											
	年	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	文獻	
	1928														南大東島産を亞種ヨタカ <i>jotaka</i> に分類／B5
	1936														
	1990														
	2002														
124. ハリオアマツバメ <i>Hirundapus caudacutus</i>	年	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	文獻	備考
	1989														
	2002														
125. ヒメアマツバメ <i>Apus affinis</i> [希少]	年	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	文獻	備考
	1929														
	1999														
126. アマツバメ <i>A. pacificus</i>	1974	N													
	年	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	文獻	備考
	1998														
127. アカショウビン <i>Halcyon coromanda</i> *	1924														
	1936														
	1990														
	1991	S													
	1996	S													
	1997	S													
	1999	S													
	2000	S													
	2001	S													
	2002														
128. カワセミ <i>Alcedo atthis</i> [希少]	1924														
	1936														
	1990														
	1991	S													
	1996	S													
	1997	S													
	1999	S													
	2000	S													
	2001	S													
	2002														
129. ヤツガシラ <i>Upupa epops</i> [希少]	1998														
	1998														
	2002														
130. ヒバリ <i>Alauda arvensis</i> *	1998	S													
	年	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	文獻	備考
	1998														
131. ショウドウツバメ <i>Riparia riparia</i> *	2000	S													
	2002														
132. ツバメ <i>Hirundo rustica</i>	1922														
	1936														
	1972														
	1974	○													
	1989	S													
	1990	S													
	1991	S													
	1992	S													
	1993	S													
	1994	S													
	1995	S													
	1996	S													
	1997	S													
	1999	S													
	2000	S													
	2001	N	S	S	S	S	S	S	S	S	S	S	S	PS	
	2002	N	S	S	S	S	S	S	S	S	S	S	S	PS	
133. リエウキユウツバメ <i>H. tahitica</i>	1996														
	2002														
134. コシアカツバメ <i>H. daurica</i> *	2002														

1922年北大東島産を亞種チヨウセンアオハクダ *macroptera* に分類／B8
1922年南大東島産は亞種不明／B8
1936年南大東島産を亞種アオハクダ *japonica* に分類／B9
チヨウセンアオハクダが南大東島にも分布／B9

1922年北大東島産を亞種チヨウセンアオハクダ *macroptera* に分類／B8
1922年南大東島産は亞種不明／B8
1936年南大東島産を亞種アオハクダ *japonica* に分類／B9
チヨウセンアオハクダが南大東島にも分布／B9

1922年北大東島で記録あり／F6
2000年以前にも北大東島で記録あり／F6
1988～92年に北大東島で記録あり／E1

日本初記録
南大東島で夏期で巣穴を確認／PS
1988～92年に北大東島で記録あり／E1

南大東島で夏季～秋期に観察／F7
冬期に渡来するも希／O2
南大東島で冬期に観察／F7

1998.9に落鳥した亞種カシモウビン *major* と思われる南大東島産の写真あり／F7 (修正)
南大東島で夏季～秋期に観察／F7

南大東島で春期で記録あり／E1
1988～92年に北大東島で記録あり／E1

1989年以前にも南大東島で記録あり／D5
1988～92年に北大東島で記録あり／E1

スズメ目
PS, 土方
PS, 土方
PS, 土方
PS, 土方

1989年以前にも北大東島で記録あり／D5
1988～92年に北大東島で記録あり／E1

南大東島で春期で記録あり／F7
折居は「琉球燕」と記述／O1O2

南大東島で春期～秋期に観察燕と記述／F7

1974年以前にも南大東島で記録あり／C3
1980年代に大東諸島で記録あり／D4
2002.11.2に南大東島大池上空をイツバメ43羽、ショウドウツバメ1羽とともに飛翔する1羽を確認／

1991	○	S		D9, E4
1992		S		N, B4, 大足
1993		S		B4
1994				B4
1995	S	S	S	E4, F9 センター標本
1996		S	S	S, E7, F1, 鹿鳴
1997	S	S	S	F1, F9, 大足
1999		S	S	F9
2000	S	S	S	F9
2001	S	S	S	PS, 宇佐見, 土方
2002	S	S	S	PS, 宇佐見, 土方
145. モズ科 <i>Lanius bucephalus</i>				
1973	年	1	2	3
1973		S	4	5
1973		○	6	7
1973		S	8	9
1973		N	10	11
1973			12	
				D6
				C4
1974		S		E1
1977				D1
1984	N			S, D7
1988		S	N	S
1989		N	N	D7, E1
1990	○	S	N	N, S, D9, B4, 大足
1991		S		D9, B4
1992		S		N, E4, 大足
1993		S		B4
1994		S		S, E4, F9
1995	S	S		S, E7, F1, G6, 鹿鳴
1996		S		F1, F9, 大足
1997	S	S		F8, F9
1999		S	S	F8, F9
2000	S	S	S	PS, 宇佐見, 土方
2001	S	S	S	PS, 宇佐見, 土方
2002	S	N	S	PS, 宇佐見, 土方
				PS, 宇佐見, 土方
146. アカモズ科 <i>L. cristatus</i>				
1922			N	A2
1929			S	A6
1972			○	C2
1974		○		C4
2001		S		PS
2002	S			PS
147. レンジャク科 <i>Bombycilla japonica</i> *				
1969	S			F9
1999				2003年2月10日南大東／PS
2003	S			
2003				
2003				
148. ミソサザイ科 <i>Trochocercus trochocercus</i>				
1938	ミソサザイ	ミソサザイ		
1938			G5	備考
1938				南大東島産をもとに亞種ダイトウミソサザイ <i>oriu</i> を記載／B3
1938	ミソサザイ	ミソサザイ		
1938			G5	大東諸島の記録は1標本のみ／G5
1938	ミソサザイ	ミソサザイ		
1938				別亜種が迷行した可能性あり／E5G5
149. ノコマツタケ科 <i>Luscinia calliope</i>				
1937	ノコマツタケ	ノコマツタケ		
1938			B7	
1938	ノコマツタケ	ノコマツタケ		1986年以前に北大東島で記録あり／D2
1938			B7	
150. ルリビタキ科 <i>Tarsiger cyanurus</i> *				
1996	ルリビタキ	ルリビタキ		
1996			S, F2	
2002			PS	
1984	N		B5	1980年代に北大東諸島で記録あり／D4
1990		N	D9, E4	南大東島で秋期～冬期に観察／F7
1991	S		B4	
1999	S			
2001		S	PS	
2002		○	PS	
1984	ルリビタキ	ルリビタキ		
1990			F9	
2001	S		PS	
2002		○	PS	
151. シヨウヒタキ科 <i>Phoenicurus auroreus</i>				
1984	シヨウヒタキ	シヨウヒタキ		
1990				
1990				
1991				
1999				
2001				
2002				
1984	シヨウヒタキ	シヨウヒタキ		
1990				
1990				
1991				
1999				
2001				
2002				
1984	シヨウヒタキ	シヨウヒタキ		
1990				
1990				
1991				
1999				
2001				
2002				
1984	シヨウヒタキ	シヨウヒタキ		
1990				
1990				
1991				
1999				
2001				
2002				
1984	シヨウヒタキ	シヨウヒタキ		
1990				
1990				
1991				
1999				
2001				
2002				
1984	シヨウヒタキ	シヨウヒタキ		
1990				
1990				
1991				
1999				
2001				
2002				
1984	シヨウヒタキ	シヨウヒタキ		
1990				
1990				
1991				
1999				
2001				
2002				
1984	シヨウヒタキ	シヨウヒタキ		
1990				
1990				
1991				
1999				
2001				
2002				
1984	シヨウヒタキ	シヨウヒタキ		
1990				
1990				
1991				
1999				
2001				
2002				
1984	シヨウヒタキ	シヨウヒタキ		
1990				
1990				
1991				
1999				
2001				
2002				
1984	シヨウヒタキ	シヨウヒタキ		
1990				
1990				
1991				
1999				
2001				
2002				
1984	シヨウヒタキ	シヨウヒタキ		
1990				
1990				
1991				
1999				
2001				
2002				
1984	シヨウヒタキ	シヨウヒタキ		
1990				
1990				
1991				
1999				
2001				
2002				
1984	シヨウヒタキ	シヨウヒタキ		
1990				
1990				
1991				
1999				
2001				
2002				
1984	シヨウヒタキ	シヨウヒタキ		
1990				
1990				
1991				
1999				
2001				
2002				
1984	シヨウヒタキ	シヨウヒタキ		
1990				
1990				
1991				
1999				
2001				
2002				
1984	シヨウヒタキ	シヨウヒタキ		
1990				
1990				
1991				
1999				
2001				
2002				
1984	シヨウヒタキ	シヨウヒタキ		
1990				
1990				
1991				
1999				
2001				
2002				
1984	シヨウヒタキ	シヨウヒタキ		
1990				
1990				
1991				
1999				
2001				
2002				
1984	シヨウヒタキ	シヨウヒタキ		
1990				
1990				
1991				
1999				
2001				
2002				
1984	シヨウヒタキ	シヨウヒタキ		
1990				
1990				
1991				
1999				
2001				
2002				
1984	シヨウヒタキ	シヨウヒタキ		
1990				
1990				
1991				
1999				
2001				
2002				
1984	シヨウヒタキ	シヨウヒタキ		
1990				
1990				
1991				
1999				
2001				
2002				
1984	シヨウヒタキ	シヨウヒタキ		
1990				
1990				
1991				
1999				
2001				
2002				
1984	シヨウヒタキ	シヨウヒタキ		
1990				
1990				
1991				
1999				
2001				
2002				
1984	シヨウヒタキ	シヨウヒタキ		
1990				
1990				
1991				
1999				
2001				
2002				
1984	シヨウヒタキ	シヨウヒタキ		
1990				
1990				
1991				
1999				
2001				
2002				
1984	シヨウヒタキ	シヨウヒタキ		
1990				
1990				
1991				
1999				
2001				
2002				
1984	シヨウヒタキ	シヨウヒタキ		
1990				
1990				
1991				
1999				
2001				
2002				
1984	シヨウヒタキ	シヨウヒタキ		
1990				
1990				
1991				
1999				
2001				
2002				
1984	シヨウヒタキ	シヨウヒタキ		
1990				
1990				
1991				
1999				
2001				
2002				
1984	シヨウヒタキ	シヨウヒタキ		
1990				
1990				
1991				
1999				
2001				
2002				
1984	シヨウヒタキ	シヨウヒタキ		
1990				
1990				
1991				
1999				
2001				
2002				
1984	シヨウヒタキ	シヨウヒタキ		
1990				
1990				
1991				
1999				
2001				
2002				
1984	シヨウヒタキ	シヨウヒタキ		
1990				
1990				
1991				
1999				
2001				
2002				
1984	シヨウヒタキ	シヨウヒタキ		
1990				
1990				
1991				
1999				
2				

1889	S	S	S	D7	
1890	○	S	N	N	D9,E4,大沢
1991	S	S	N	N	D9,E4
1992	S	S	N	E4	大沢
1993	S	S	S	E4	
1994	S	S	S	E4	
1995	S	S	S	E4,F9	
1996	S	S	S	E4,鷹嶋	
1997	S	S	S	F9,大沢	
1998	S	S	S	F9	
1999	S	S	S	F9	
2000	S	S	S	F9	
2001	S	S	S	F9	宇佐見
2002	S	S	S	PS	土方
154. トラッダミ <i>Zoothera dauma</i>	1991	S	S	F2	
	1999	S	S	F5	
	2002	S	PS		
155. クロツグミ <i>Turdus cardis</i>	1990	S	N	G6	
156. アカハラ <i>T. chrysolaus</i> *	1998	S	F5		
	2002	S	PS		
157. シロハラ <i>T. pallidus</i> *	1984	N	N	D1,E5	1980年代に大東諸島で記録あり／D4
	1988	S	S	D7	
	1990	S	N	D9,E4	
	1991	○	S	D9,E4	
	1992	S	N	大沢	
	1994	S	S	E4	
	1995	S	E4		
	2000	S	F9		
	2001	S	土方		
	2002	S	PS		
158. ツグミ <i>T. naumannii</i> *	1984	N	N	D1,E5	南大東島で亞種ツグミ <i>eunomus</i> を確認／F9
	1988	S	S	D7	1980年代に大東諸島で記録あり／D4
	1991	S	E4		南大東島で秋期～冬期に観察／F7
	1993	S	B4		
	1995	S	F9		
	1999	S	奥土		
	2002	N	○	PS	
159. ヤフサメ <i>Uropsalena squameiceps</i> *	1990	N	N	D9	
	1991	N	N	D9	
	1992	S	S	A1,O1	
160. ウグイス <i>Cettia diphone</i> [ダイトイウグイス:EX,絶滅]	1937	S	S	B6	1922年南大東島産をもとに亞種ダイトイウグイス <i>restricta</i> を記載／A1
	1938	S	S	B6	ダイトイウグイスの大東諸島での記録は1922年南大東島産2標本(焼失)のみ／G5
	1972	○	C2	B701	1922年に南大東島で卵を確認／B701
	1984	N	N	D1,E5	南大東島では亞種リエウキユウグイス <i>riukiuensis</i> も確認／B4
	1988	S	S	D7	南大東島に移入されたことはないとの島民情報あり／B4
	1989	S	E4	D7	1984.3.31にチャセンツバシタイプ (<i>borealis</i> or <i>canturiensis</i>) のさえずりを確認／池長
	1990	○	E4	D7	開拓以前、初期の南大東島に分布／D5 (p912,923,933,948,1109,1112)
	1991	○	D9,E4	E4	1936.11.4に南大東島で地鳴きを確認／O2
	1992	N	大沢		
	1999	S	F9		
	2000	N	S	F9	
	2002	S	PS	中川	1974年以前にも南大東島で記録あり／C3
161. オオヨシキリ <i>Acrocephalus arundinaceus</i>	2002	S	S	F9	
162. ムジセッカ <i>Phylloscopus fuscatus</i>	1991	S	S	F5	
	2002	N	N	PS	
163. キマユムシカイ <i>Ph. Inornatus</i> *	1998	S	N	F5	
	2000	S	F9		
	2002	N	N	F9	
164. メボソムシカイ <i>Ph. borealis</i>	1922	○	A2		南大東島で亞種メボソムシカイ <i>xanthodryas</i> とコメボソムシカイ <i>borealis</i> を確認／A2

178.	マヒワ <i>C. spinus</i> *	2002	N ○	PS		
179.	イカル <i>Bophona personata</i>	1986	N	E5	南大東島では2002.11.2に大東神社で6羽を初認、12日には大東島で30羽以上を確認／PS	
		1990	N	D9		
		1994	S	F2		
		2002	S	PS		
180.	シメ <i>Coccothraustes coccothraustes</i>	1989	S	D7		
		1990	N	G6 (修正)	南大東島で亞種スズメ <i>saturatus</i> を確認／A2	
		1998	S	S 奥土	北大東島で営巣の情報あり／D4	
		2001	S	PS	北大東島で車・ヒナを確認／F9	
		2002	S	PS	開拓初期には南大東島に分布していなかつた／D5 (p.990)	
181.	スズメ <i>Passer montanus</i>	年 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 文 獻	A2		人為分布とされる／A2	
		1922	S		開拓以降、若鳥の分散により定着と推察／D4	
		1928	S		南大東島で四季を通じて観察／F7	
		1936	S	B6 山階標本	南大東島で車・ヒナを確認／F9	
		1972	○	C2	南大東島で車・ヒナを確認／F9	
		1974	○	C4	開拓初期には南大東島に分布していなかつた／D5 (p.990)	
		1981	S	S D4	人為分布とされる／A2	
		1982	S	D4	開拓以降、若鳥の分散により定着と推察／D4	
		1984	N	D1	南大東島で四季を通じて観察／F7	
		1986	S	D4		
		1988	N	S D4, D7		
		1989	S	S S S		
		1990	N N N	N S D9, D4, 大沢		
		1991	○	S D9, E4		
		1992	S	N E4, 大沢		
		1993	S	B4		
		1994	S	S E4		
		1995	S	E4, F9		
		1996	S	S E7, 鹿嶋		
		1997	S	S F1, F9		
		1999	S	S S F9		
		2000	S	S S F9		
		2001	S	S N S S PS, 宇佐見, 土方		
		2002	S	S ○ ○ ○ PS, 土方		
182.	ムクドリ科 <i>Muscicapidae</i>	年 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 文 獻	A2		備 考	
		1922	S	A2	10月初旬に南大東島に渡来／A201	
		1989	S	D7	1986年以前に北大東島で記録あり／D2	
		1991	S	D4	1988～92年に北大東島で記録あり／E1	
		1997	S	F9	南大東島で春期と秋期に観察／F7	
		1998	S	土方		
		2002	S	PS		
		1991	S	F5	2001.1.31にムナグロの群れ (83羽) に混ざる1羽を確認／土方	
		2001	S	土方		
		2002	N	PS		
183.	ホシムクドリ <i>S. vulgaris</i>					
		1936	S	B6		
		1994	S	E4	1988～92年に北大東島で記録あり／E1	
		1995	S	E4	2001.1.31にムナグロの群れ (83羽) に混ざる1羽を確認／土方	
		1998	S	奥土	折居は「大ムク」「大椋」と記述／O2	
		2001	S	土方		
		2002	N	PS		
184.	ムクドリ <i>S. cineraceus</i>					
		1936	S	B6		
		1994	S	E4	1988～92年に北大東島で記録あり／E1	
		1995	S	E4	2001.1.31にムナグロの群れ (83羽) に混ざる1羽を確認／土方	
		1998	S	奥土		
		2001	S	土方		
		2002	N	PS		
185.	カラス科 <i>Corvus frugilegus</i>	年 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 文 獻	A2		備 考	
		1932	S	S S B1	大東諸島産を亜種ミヤマガラス <i>pastinator</i> に分類／B5	
		2002	S	PS		
186.	ハシブトガラス <i>C. macrorhynchos</i>	1924	S A3		1924年南大東島標本を亜種ハシブトガラス <i>calonotum</i> に分類されたこともある／A3	
					同標本は亞種タイワンハシブトガラスに最も近いとされた／B1	
					同標本は戦災で消失／B7	
					開拓以前、初期の南大東島にカラス類に分布／D5 (p.912, 920, 933, 948, 1008, 1109, 1112)	
					多かったが有害駆除で激減したとの情報あり／A3	

時期不明のメスの標本あり／センター標本

	N	22	38	24	16	29	25	54	64	25	計	93
S	68	55	46	49	55	29	34	16	62	66	97	173
O	0	1										1
計	70	55	59	49	58	31	34	36	63	81	105	177

大正時代における沖縄県の文化財指定関連の行政文書について

* 園 原 謙

A Note on the Okinawa's Administrative Documents Regarding the Designation of Cultural Properties in Taisho Era

Ken SONOHARA*

セレクション

1900年11月1日、琉球王国時代の歴史を雄弁に語る文化遺産であるグスクや関連する遺産が「琉球王国のグスク及び関連遺産群」として世界遺産に登録された。この世界遺産は、九つの文化遺産すなわち、首里城跡、中城城跡、座喜味城跡、勝連城跡、今帰仁城跡の五つの史跡、いわゆる「グスク」に加え、園比屋武御嶽、玉陵、斎場御嶽の三つの史跡、墓陵や拝所、あるいは名園・識名園によつて構成されるものである。

これら九つの文化遺産の一ひとつは、現在すべてが文化財保護法や県の文化財保護条例に規定される国指定史跡や特別名勝、県指定史跡として指定されているものである。

戦前の文化財指定の経歴と照合してみると、これら遺産の中に、昭和四年に制定された文化財保護に関する法律・國寶保存法に基づいて指定された国宝がひとつ含まれる。昭和八年一月二三日に指定された園比屋

武御嶽である。戦争（沖縄戦）による破壊がなければ、琉球王国の遺産を語る歴史的遺産は、グスクや主要な拝所のみだけでなく、首里城正殿

や城内の関連する門、田覚寺各殿・門、崇元寺関連の門や堂など大正十四年から昭和十三年にかけて古社寺保存法（明治三十一年制定）や國寶保存法に基づいて指定された二二件の国宝の建造物も当然含まれていたと思われ残念である。しかし、何より歴史の悲劇を憂うより、戦後五十七年の間沖縄の文化財の修復、復興に努めてきた国の文化財保護委員会（後の文化庁）をはじめ県内外の文化財を愛した関係者の努力の結晶として、栄えある世界遺産登録の快挙を、文化財保護史の輝かしい一頁として捉えるべきであろう。今日の世界遺産や指定文化財という到達点にいたるまでには、その保存・保護について多くの関係者の労苦があったと推察される。筆者が関心を持つ文化財保護史研究の大きなテーマはそこにある。つまり、地域の人々や行政機関が、当該地域に所在する歴史的文化的遺物（遺産）を生活の中でどのように捉えてきたのかどうか」とである。

本稿では、大正十一年当時の沖縄県の行政文書綴である「名所旧蹟」関スル書類に綴られる十九件の行政文書（受理文、起案・決裁文書）

* 〒901-0111 那覇市首里大中町1-1 沖縄県立博物館
Okinawa Prefectural Museum, 1-1, Onaka-cho, Shuri, Naha,
Okinawa 903-0823, Japan

を翻刻し、紹介する。当館は歴史資料として平成十四年五月三十日にこの書類の寄贈を受けた。

この資料を通し、大正年間当時の沖縄県内（一市一区三郡二島）における名所、旧蹟、天然記念物の存在、また、その管理や現状等について知ることができよう。

これら行政記録は、沖縄県が独自に調査したものではない。国からの調査依頼に基づき、県は市区郡長、島司に依頼し、その回答が県に集約され、国に回答されたものである。個々の文化財のデータは、国に提出され、その後の国宝指定の基礎的データになったものと思われる。それぞの調査資料から、県内各村にあつた文化財の当時の状況や評価などが浮き上がってくる。このデータと今日の状況とを比較して、当該文化財を取り巻く社会状況などの歴史的推移を考える必要がある。

本県における国宝指定は、大正十四年の首里城正殿（沖縄神社拝殿）が嚆矢となり、昭和十三年までに二二件の建造物が指定された。当然ながら、これらが当時の沖縄の文化財のすべてではなかつたことを確認したい。意外なのは、この中にグスクが一つも指定されていないことである。世界遺産が九つの文化財によって構成されたのと同様に、いくつかの基準によつて、国宝は数ある地域の文化財の中から厳選されたのである。その背景には、たくさんの文化財がノミネートされていた。指定に当たつての基準は、文化財の客観的価値であつただろうし、また、保存状態であつただろうと推測される。なぜなら、文化財を保護する法律の趣旨は、一義的にその文化財の保存を図ることであるからである。緊急修理の必要性の多少によつて指定の優先順位が決められることは現在も過去も同様であろう。

明治初年、廢仏毀釈の政策による仏教排斥という価値観の転換で貴重な社寺仏閣の保存が危ぶまれる社会状況が生じた。そんな中で、古社寺

を保存するために明治三十年に古社寺保存法が制定され、大正八年には、史蹟名勝天然紀念物法が制定され、さらに指定物件の枠を拡大した國寶保存法が昭和四年に制定され、文化財の保存が図られてきた。大正十年から十一年にかけて県内市区郡長らによって回答されたこれらの文書は、史蹟名勝天然紀念物法の下で実施された一連の全国的な悉皆調査と関わりがある。

大正時代の国指定に係わる内務省や沖縄県学務課、さらに各市区郡島の文化財に対する状況や認識について、この関係書類を通して知ることができます。その意味でこの資料は、本県の戦前の文化財保護を考える極めて重要な資料といえる。

「名所旧蹟二闋スル書類」について

本年五月に那覇市在の仲座巖氏から資料寄贈のお話を伺つた。早速、同氏の事務所を訪ねたところ戦前に国宝指定された建造物のガラス乾板一八枚（一二、〇×一六、五cm）をご寄贈いただくことになつた。このガラス乾板は、同氏のご尊父で、戦前から戦後にかけて沖縄を代表する建築家として著名であり、また琉球政府の文化財保護委員会委員を務めた故仲座久雄氏の遺品のひとつであることがわかつた。そのとき、「名所旧蹟二闋スル書類」の存在が判明し、ご寄贈資料に加えていただけのことになつたのである。

この資料がどのよう経路で仲座久雄氏の手元にあつたかについては不明である。ひとつの手がかりは、同氏が昭和十二年から終戦にかけて沖縄県職員として在職していたことである。しかし、県職員として他部局の公文書を閲覧することは難儀に思える。それでも、民間人に比べると、県庁内文書を閲覧することの可能性は高いといえよう。仲座氏が所属していた経済部土木課（技手）と、この文書が保管されていた内務部学務

課との接点は何であつただろうか。経済部と内務部との共通項は一体何かと考えてみた。また、大正十年と昭和十二年では、十七年の開きがある。この資料が庁舎外に出ることがない公文書である以上、これと係わることはできるのは庁舎内の人々に限られることになる。

当時の行政文書の保管期間についての知見はなく、その扱いについては知らないが、経済部土木課仲座氏と内務部学務課の接点をあえて考えてみると、文化財の修理技術が両者の接点としてみえてきた。昭和八年に指定された国宝・守禮門の昭和十一年の修理の際、仲座氏は首里市の工事主任として関わった実績がある。この実績が買われて県に入ったものと推察される。以来、仲座氏は文化財の建造物に関心をもち、昭和十六年から十七年にかけて大阪朝日新聞や琉球新報に「琉球の国宝建築」を連載している。同氏が文化財に興味を抱き、国宝指定に係る資料のひとつとして、同氏の手に、この書類があつたのではないかと推察される。この資料は、あの戦禍をくぐってきたものである。沖縄の文化財に対する深い洞察によって、この資料が今日まで保存されたことに心から感謝を申し上げたい。

この資料は、たて二七cm、幅二〇cm、綴じ代幅三・五cm、枚数では一〇二丁。紙質は和紙、右閉じで綴られ、冊子として編冊されたものである。資料の状況は、水損やその一部に欠失があり、部分的に固着があつたため、修理を施した。資料内容は、十九件の文書で構成されている。その中で最も古いものが、大正十年二月二十四日付けの山田内務大臣官房地理課長から川越沖縄県知事へ送付された文書である。行政文書は文書收受に始まり、その回答文書で完結するのは今日と同様である。この書類（綴）には、知事あてに送付された依頼文書に起因し、大正十一年四月二九日付けの首里市長高嶺朝教から沖縄県内務部長あての文書の回答文を受け、大正十一年十月二八日の沖縄県知事から内務省大臣官

房地理課長への文書十八件で一連の文書が完結している。またもう一件の文書は大正十一年六月二十九日付けの同課長から沖縄県知事への依命通牒で、史蹟名勝天然記念物の保存に関する八項目からなる命令通達の内容になっており、一連文書とは異なる文書になっている。

この文書（綴）の内容を表一のとおり一覧としてまとめてみた。文書の綴り方の順序のとおり、資料一から資料一九まで便宜上の番号をふつた。その綴りの順序は、時系列ではなく、文書内容は既述のとおりである。

表二は、個々の市区郡島から報告（回答）された当該地域に在する個別の文化財を一覧したものである。一市、一区、一町、二七村から合せて六二件の史蹟、名勝、天然記念物がリストアップされている。ただ、ここに紹介される文化財は、当時の沖縄にある文化財のすべてではない。資料十一には、それを裏付けることが記されている。その部分を引用してみると、「貴管下ニ於ケル史蹟名勝天然紀念物ニシテ指定ノ急ヲ要スヘキモノニ付テハ大正八年八月當者照会ニ対シ御回答ノ次第有之候処……」とある。また、資料十二の八重山島司から県内務部長への回答文の中にも、追加の文化財が無い旨を次のように回答している。「……御照会相成候史蹟名勝天然紀念物ニ関スル□・右ハ大正七年二月二七日付□・五二七ノ二号ヲ以テ御回答致次第モ有之該當ノモノ無之□・此段及御回答候也」と。以上のように大正八年時点での指定の緊急度の高い文化財がすでに国に報告されていた。大正十一年時点の首里市から報告された文化財のリストに首里城正殿や首里城跡が含まれていなければ、すでに大正八年調査時点で緊急に指定を要する文化財としてすでにリストアップされていたと考える方が妥当であろう。個々の文化財の詳細は、資料一から一九までの翻刻したものを参照いただきたい。文字の不明な部分は「■」で表示し、紙面の欠落箇所にお

いては、「□・・・」で表示した。また、表一、表二に対応するように

文書資料を一から一九まで、個別の文化財を①から⑯まで番号をふつて整理した。翻刻上の表記にあたっては、部分的に新漢字を使用した。沖

縄戦で貴重な文化財の多くが破壊されてしまった今日、戦前の文化財がおかれた状況について知る資料も同様に消失してしまった。本稿が戦前の沖縄の文化財の存在や状況についての知見の一助になれば幸いである。

謝辞

貴重な資料をご寄贈いただいた故仲座久雄氏のご子息仲座巖氏に改めて心から感謝申し上げるとともに同氏から内部資料としてご提供いただいた仲座巖編「仲座久雄記録」(B四版七枚綴)を活用させていただいたことを記して謝辞に代えたい。また、限られた時間内で貴重な資料の

保存修復に当たってくれた修復士当間博氏のご尽力に感謝申し上げる。翻刻にあたっては、小野まさ子氏に助言をいただいた。感謝申し上げる。

注一・六二件の個別文化財は、県が国へ回答する文書の起案文にも記載され重複しているが、ここでは資料十三からの各郡区長等からの

送付文(県の受理文)に番号を付している。

参考資料

『世界遺産 琉球王国のグスク及び関連遺産群』

二〇〇一年 沖縄県教育庁文化課編
「平成十三年度文化財行政講座資料」(配布資料) 二〇〇二年 文化庁

表一 収錄資料內容一覽

表二 各市区郡島調査の文化財一覧（大正十年～十一年）

番号	市郡島名	町村名	種類	名称	所在地	地目地積	所有者住所氏名	保存状況等
⑯	宮古島	平良村	史蹟	犬川	字西里 (水産組合事務所西側)	山林内に約四坪	伊良部村	雑木鬱蒼
⑰	鶴尻郡	糸溝町	史蹟	比屋地御嶽	通池	四反四畝一二歩	伊良部村	阿旦樹生茂り破壊憂なし
⑯	具志頭村	玉城村	史蹟	白銀堂	字佐和田下地	池二つ 周囲七八〇尺	伊良部村	（普通）
⑰	具志頭村	具志頭村	天然記念物	二、二五七番地 (俗称イビヌメー)	道路	四反四畝二二歩	糸溝町	（普通）
⑯	具志頭村	具志頭村	天然記念物	安里平松	溝五〇坪	拝所 四反五畝一八歩	伊良部村	
⑰	具志頭村	具志頭村	天然記念物	ハナンダ橋	二四坪	拝所 五三歩	伊良部村	
⑯	名勝旧蹟	名勝旧蹟	天然記念物	字具志頭前原	雜木林一五〇坪	拝所 九九四坪	糸溝町	
⑰	名勝旧蹟	名勝旧蹟	天然記念物	字具志頭白水川	原野一、二〇〇坪	原野 二、〇〇〇坪	伊良部村	
⑯	多棚城	多棚城	天然記念物	字具志頭須武座	五段一畝一七歩	原野 二、〇〇〇坪	伊良部村	
⑰	上城	上城	天然記念物	字喜屋武小字西原	二町七段三畝二六歩	原野 二、〇〇〇坪	伊良部村	
⑯	大里村	大里城址	史蹟	字喜屋武小字具志川原	原野一、二〇〇坪	原野 二、〇〇〇坪	伊良部村	
⑰	喜屋武村	喜屋武村	史蹟	字與座前原	五〇坪	原野 二、〇〇〇坪	伊良部村	
⑯	南風原村	南風原村	史蹟	字與座前原	雜木林一五〇坪	拝所 九九四坪	糸溝町	
⑰	具志川城	具志川城	史蹟	字具志頭前原	二四坪	拝所 五三歩	伊良部村	
⑯	大里村	大里村	史蹟	字具志頭前原	雜木林一五〇坪	拝所 九九四坪	糸溝町	
⑰	喜屋武村	喜屋武村	史蹟	字具志頭前原	原野一、二〇〇坪	原野 二、〇〇〇坪	伊良部村	
⑯	豊見城村	豊見城村	史蹟	字具志頭前原	五段一畝一七歩	原野 二、〇〇〇坪	伊良部村	
⑰	具志川村	具志川村	史蹟	字具志頭前原	二町七段三畝二六歩	原野 二、〇〇〇坪	伊良部村	
⑯	瀬長島	瀬長島	史蹟	字具志頭前原	原野一、二〇〇坪	原野 二、〇〇〇坪	伊良部村	
⑰	伊敷素城址	伊敷素城址	史蹟	字具志頭前原	五〇坪	原野 二、〇〇〇坪	伊良部村	
⑯	字具志川	字具志川	史蹟	字具志頭前原	雜木林一五〇坪	拝所 九九四坪	糸溝町	
⑰	字嘉手丸西新田原	字嘉手丸西新田原	史蹟	字具志頭前原	二四坪	拝所 五三歩	伊良部村	
⑯	煙、池沼、安林、宅地面積一五町二反	煙、池沼、安林、宅地面積一五町二反	史蹟	字具志頭前原	二四坪	拝所 五三歩	糸溝町	
⑰	三畝二二歩	三畝二二歩	史蹟	字具志頭前原	二二六坪	拝所 二二六坪	糸溝町	
⑯	山林 一、二〇〇坪	山林 一、二〇〇坪	史蹟	字具志頭前原	二二六坪	拝所 二二六坪	糸溝町	
⑰	拜所 一、五〇〇坪	拜所 一、五〇〇坪	史蹟	字具志頭前原	二二六坪	拝所 二二六坪	糸溝町	
⑯	首里区当藏三二豊見城朝熙	首里区当藏三二豊見城朝熙	史蹟	字具志頭前原	二二六坪	拝所 二二六坪	糸溝町	
⑰	首里区当藏三二豊見城朝熙	首里区当藏三二豊見城朝熙	史蹟	字具志頭前原	二二六坪	拝所 二二六坪	糸溝町	
⑯	新垣九〇、上原ナ〇	新垣九〇、上原ナ〇	史蹟	字具志頭前原	二二六坪	拝所 二二六坪	糸溝町	
⑰	具志川村有	具志川村有	史蹟	字具志頭前原	二二六坪	拝所 二二六坪	糸溝町	
⑯	八三	八三	史蹟	字具志頭前原	二二六坪	拝所 二二六坪	糸溝町	
⑰	宮里明孝	宮里明孝	史蹟	字具志頭前原	二二六坪	拝所 二二六坪	糸溝町	
⑯	村有	村有	史蹟	字具志頭前原	二二六坪	拝所 二二六坪	糸溝町	
⑰	堅カマダ	堅カマダ	史蹟	字具志頭前原	二二六坪	拝所 二二六坪	糸溝町	
⑯	管理者	管理者	史蹟	字具志頭前原	二二六坪	拝所 二二六坪	糸溝町	
⑰	字嘉手丸一	字嘉手丸一	史蹟	字具志頭前原	二二六坪	拝所 二二六坪	糸溝町	
⑯	久手	久手	史蹟	字具志頭前原	二二六坪	拝所 二二六坪	糸溝町	
⑰	認できる。	認できる。	史蹟	字具志頭前原	二二六坪	拝所 二二六坪	糸溝町	

資料一 受理文

受理番号 大正十一年六月二十九日
學第二二四三
内務省發理第二五號
大正十一年六月二十二日

堀内内務大臣官房地理課長 印

史蹟名勝天然紀念物ノ保存ニ関スル件依命通牒

史蹟名勝天然紀念物ノ保存ニ関シテ左記ノ事項ニ御注意相成度候

記

- 一 史蹟名勝天然紀念物保存法第一□・・・ニ依リ假指定ヲ為サムトスル場合□・・・種別、名称、所在地、地籍、物□・・・籍図ヲ具シ当省へ打合ハス□・・・
- 二 史蹟名勝天然紀念物保存法第□・・・ニ依ル承認ヲ為サムトスル場合□・・・ト認メラルモノニ就テハ當省へ打合ハス
- 三 史蹟名勝天然紀念物保存法施行令第□條第一項ノ規定ニ依ル通知ハ書面ヲ以テ之ヲ為シ其ノ日時、立入ルヘキ土地ノ区域及行為ノ種類ヲ明記スルコト

- 四 史蹟名勝天然紀念物ヲ指定セラレタルトキハ左記各号ニ依ル処理ヲ為シ保存上遺莫ナキヲ期スルコト
い 指定物件ノ所有者、管理者若ハ占有者其ノ利害者並所轄警察官署ニ対シ直チニ指定ノ事実及保存法違反者制裁ノ要領ヲ通知スルコト
- 標識、注意札ヲ建設スルコト
- 地域ヲ表示スル必要アル場合ハ境界標ヲ建設スルコト
- 保存上必要アル場合ハ圍柵若ハ覆屋ヲ建設スルコト
- 標識ノ大サハ八寸乃至一尺角トシ其□・・・上ノ高サハ五尺乃至八尺トスルコト
- ヘ 標識ノ記載ハ左ノ例ニ依ルコト

史蹟 —— 名勝

史蹟 —— 天然紀念物

側面

史蹟名勝天然紀念物保存法□・・・
ちこ 同・・・年・・・月内務大臣指定
注意札ノ文辞ハ成ルヘク平易ニ且啓發のナラシムルコト
標識、注意札ノ其他ノ設備ノ為國費ノ支出ヲ要スル場合ハ詳細ナル設計図、設計図、位置図、工費見積書ヲ具工予算ノ配布ヲ當省ニ申請スルコト

史蹟名勝天然紀念物保存法第四條第一項ノ規定ニ依ル地域ノ指定ヲ

資料二 起案・決裁文

起案 大正十一年十月二一日 學務課
決裁日 大正十一年十月二十五日
発送 大正十一年十月二八日
文書番号 學第四七五ノ一六号

宛名 内務大臣官房地理課長

件名 史蹟名勝追送ノ件

内容 三月三十一日付回報史蹟名勝□・・・

紙首里市ノ分追送候也

首里市

一、種類

二、名称

三、所在地

四、地目地積

五、所有者ノ住所氏名

六、形狀寸尺

七、現状

八、由來徵証伝説

史蹟名勝天然紀念物保存法□・・・
同・・・年・・・月内務大臣指定
代ノ香華場タリ□・・・
十六年明應元年壬子□・・・
創建シタルモノニシテ同□・・・
慶門ノ北ニ相シテエヲ□・・・
告ヶ芥穂禪師ヲ以テ開山□・・・
シ寺領一百石ヲ給ス大殿大室寢室堂、山門、兩廊、鐘樓、鼓閣及僧房、庫、浴室等悉ク備ル大門ノ樓城モト木像仏ヲ安置セシモ後破損シタルヲ以テ元禄九年際外和尚福建ヨリ

觀世音菩薩並十六羅漢ノ木像ヲ

将来シテ安置ス今日存在スルモノ是レナリ

仏殿七間壇上、釈迦、文殊、普賢ノ木像三体ヲ

安置シ背面ノ壁間、芥穂和尚ノ畫像ヲ掛ク像ハ

尚貞王十九年貞享四年住持石峰和尚ノ

題請ニ由ル仏殿ノ西ニ大殿アリ龍淵殿ト名

ヅク尚円王以下歴代ノ神主ヲ祀ル殿ハ享保

六年正月一日火ヲ失シテ炎上シ尚清王神主並

尚豊尚賢ニ王ノ絵像此ノ時焼失仏殿□堂山門幸

ニ免ル事ヲ得タリ住持□・・・ヲ以テ八重山島

ニ流罪□・・・ニ方木アリ右ニ客室ア□・・・

空藏菩薩ノ木像ヲ□・・・東昭堂ヲ建テ元龜□・・・

照堂内獅子□・・・尚貞命ジテ修補□・・・

王之御守正徳十六年□・・・于祖廟云爾」ノ

銘出デ□・・・柿葺ナリシヲ承応元□・・・北

ニ慎経堂アリ是レ先□・・・主ヲ遷シテ祭祀ヲ

修スル處トス□・・・市役所ノ地ハ其跡ナリ壇

上モト薬師、勢至、弥勒、三像ヲ安置ス像後破

損シ元禄六年住持際外福建ヨリ新像ヲ将来シテ

是レニ代フ所掛ノ梵鐘凡テ三個中二個ハ大明弘

治八年乙卯ノ鑄ニ係リ一ハ康熙三十四年乙亥ノ

鑄造ニ成ル銘云

康熙三十四年乙亥夏住山蘭田、為使僧赴鹿兒島

府之次載便船、遣山城、重鑄之也。三年而到

來也。時當忍之秀夏、修旧樓而掛着之。住僧

蘭田為之銘。云々

凡ソ本県諸寺所掛ノ洪鐘凡テ大工藤原某ト曰ヒ

小工ハ琉匠ナリ此鐘銘ニ由リテ見レバ山城辺ニ

テ大工ノ監督ノ下ニ鑄セシモノナル事知ルヘ

シ仏殿ヨリ□・・・至ル間池ヲ造り石橋□・・・

刻精緻古雅愛スヘシ□・・・橋安里櫛等ノ橋□・・・

・方丈ノ左、香積厨□・・・神像ヲ安ス後堂□・・・

・移リシガ後破壞□・・・福建ヨリ新像□・・・

莞勒ハ尚真王ノ□・・・ヲ祀ル一山ノ鎮守タル

□・・・住職ヲシテ一般ノ管理□・・・修繕ヲ行ヒ旧態

ヲ維持スルニ努□・・・

寺ハ県下第一ノ巨刹ニシテ善男善女ノ參詣者四

時絶エルコトナク又他府県ヨリ來遊スルモノ必

ズ足ヲ茲ニ向ケサルモノナシ

九、管理保存ノ方法

十、其他必要ナル事項

二、名称
三、所在地
四、地目地積
五、所有者住所氏名

辨財天堂
首里市当蔵町
池沼四十坪
首里市大中町 尚昌
建坪十二坪

六、形状寸尺

七、現状

八、由来徵証伝説

円覺寺山門外円鑑池ノ中ニ在ル古雅優麗本
堂ニ於テ稀ニ見ル堂祠タリ
惹クモノアレド周囲ハ稍々荒廢セリ
堂モト經堂ニシテ尚徳王三年□・・・
ヲ朝鮮ニ遣シ國好ヲ修□・・・
朝鮮世祖李琢亦方冊藏□・・・
托シ是レニ報ズ文龜二年□・・・
前ニ堀リ堂ヲ池中ニ□・・・
卷ヲ蔵ス慶長□・・・
ラレ經散ゼシヲ以テ□・・・
寺住持恩叔長老ニ命□・・・
円覺寺方丈内ノ辨財天□・・・
安置セシム其後□・・・
ヨリ新像ヲ将来ス今□・・・
円覺寺住職ヲシテ一般□・・・ヲ為□

九、管理保存方法
十、其他必要ナル事項

円覺寺住職ヲ行ヒ旧態ヲ維持スルニ努ム
時々修繕ヲ行ヒ前石垣ヲ立テ前二石
堂ハ円覺寺ト共ニ其名海外ニ著シク善
男善女ノ參詣者四時常ニ絶ユルコトナシ

一、種類

二、名称

三、所在地

四、地目地積

五、所有者住所氏名

六、形状寸尺

七、現状

八、由來徵証伝説

学校建ツ周囲稍々荒廃□・・・
背面ハ龍潭ニ臨ム丘上樹木繁衍丘前石垣ヲ
廻ラシ中央ニ一石門アリ板扉ヲ立テ前二石
香炉ヲ安シ四民香火ノ靈場拝所トス
嶽ノ大部分ハ今拓カレテ本市女子尋常高等
現レテ是ヲ警メタリ□・・・
号シ首里王城附屬□・・・
嶽内一古碑アリ□・・・

十、其他必要ナル事項

ノ増進ヲ図ル計画ナリ
高燥景勝ノ地ヲ占メ觀望開豁、風光絶佳ナルヲ
以テ詩人騒客ノ杖ヲ曳クモノ多シ

一、種類
二、名称

神社
社壇
首里市字末吉

三、所在地
四、地目地積
五、所有者住所氏名

百六十坪 社地
首里市

六、形状寸尺

普通ノ神社風ニ造リタル古雅優麗ノ建物ニシテ
社殿間数二アリ一ハ幅三間横二間アリ他ハ幅四
間半横三間間アリ
目下社殿荒廢腐敗朽亦昔日ノ□・
按フニ正、五、九月國王巡遊ノ場所ニ□・
尚賢ニ始マリシトゾ舊記ニ云□・・・申正月、
尚賢王始□・・・年乙酉九月始幸□・・・二十
日、尚貞王始幸□・・・爾社ハ尚泰久代□・
ト云フ野神ヲ祀ル

七、現状
由來徵証傳説

時々巡視ヲナシ修繕ヲ行ヒ保存ノ□・・・
社ハ眺望開豁、南ハ首里城ニ對□・・・良間焉
歯山ヲ控エ眼下ニ那霸港並那霸市街ヲ望シ雅人
墨客ノ杖ヲ曳クモノ常ニ絶ユルコトナシ

九、管理保存ノ方法
其他必要ナル事項

内務部長 金澤正雄 殿
客年三月九日付学四七五ノ一号ヲ以テ御照会相成候本市内ニ於ケル史績
名勝天然紀念物調査ニ関スル件了承然ル處本件ハ調査上不謬困難ヲ感ジ
為メニ今迄遅延致候処漸ク別紙ノ通り調査致候条此段及回答候也

資料四 受理文

受理番号 学四七五一四
受理日 大正十一年四月二十日

大正十一年四月十七日

首里市長 高嶺朝教 印

内務部長 金澤正雄 殿
客年三月九日付学四七五ノ一号ヲ以テ御照会相成候本市内ニ於ケル史績

名勝天然紀念物調査ニ関スル件了承然ル處本件ハ調査上不謬困難ヲ感ジ
為メニ今迄遅延致候処漸ク別紙ノ通り調査致候条此段及回答候也

資料五 起案・決裁文

起案 大正十一年三月二十三日 学務課

決裁 大正十一年三月三十一日

發送 大正十一年十月二八日

文書番号 学第四七五ノ一三号

送信者 知事

宛先 内務大臣官房地理課長宛
件名 史蹟名勝調査回答ノ件

内容 客年二月二十四日發第三一号史蹟名勝調□・・・報候也
追テ首里市ノ分調査出来次第□・・・可教候（送付ノ件別途）

一、種類
二、名称
三、所在地
四、地目地積
五、所有者住所氏名

辨嶺 保安林
首里市鳥堀町
保安林 四町七反七畝二十二歩
首里市 摺鉢形ノ山林
首里市鳥堀町
目下荒廃シ樹林稀疎昔日ノ壯觀ナシ
嶽頂一祠在リ久高島ノ遙拝所トス尚清王代
祠ヲ修シ松ヲ裁エ國王祐願ノ所ト為ス
目下荒廃セルモ他日植樹ヲナシ風致並水源
涵養ノ増進ヲ講スル計画ナリ
高燥開豁風光明媚ヲ以テ世ニ聞ユ

九、管理保存ノ方法

目下荒廃セルモ他日植樹ヲナシ風致並水源
涵養ノ増進ヲ講スル計画ナリ

十、其他必要ナル事項

高燥開豁風光明媚ヲ以テ世ニ聞ユ

資料六 受理文

学二二三ノ二〇号
受理日 大正十一年三月二二日

受理番号 学四七五ノ一二

大正十一年三月二十日

国頭郡長 長谷部順治 印

内務部長 金澤正雄 殿

史蹟名勝調査二関スル件

三月四日付学第四七五ノ一一号ヲ以テ御照□相成候表記ノ件左記ノ通り

資料三 起案・決裁文
起案 大正十一年四月二十日
決裁 大正十一年四月二一日
発送 大正十一年四月二二日
部長代決

記

文書番号 学第四七五ノ一五号
送信者 内務部長
宛先 首里市長宛
件名 史蹟名勝調査ノ件
内容 本日十七日付御回報ノ標記ノ件□・・・ナガウ客年照会ノ際送
付候□・・・ニ依リ至急御回報相煩シ度書類一応御戻候

一、恩納村萬座毛
(原野) 地積(面積二町九反□畝二十八歩)

1 地目

字恩納ノ西岸大裾礁ノ上ニアリ名護湾頭ニ突出シ全野芝生

ヲ以テ蔽ハル地形稍々平坦ニシテ東北ヨリ西南ニ延ヒルニ

従ヒ漸次傾斜シ東南ハ恩納嶽ニ面シ西北ハ海ニ接ス

広漠タル芝生ニシテ芝密生シ遊覧ニ絶佳ノ地ナリ

字恩納有ニシテ村長之レヲ管理ス

2 形状

字恩納ノ西岸大裾礁ノ上ニアリ名護湾頭ニ突出シ全野芝生

ヲ以テ蔽ハル地形稍々平坦ニシテ東北ヨリ西南ニ延ヒルニ

従ヒ漸次傾斜シ東南ハ恩納嶽ニ面シ西北ハ海ニ接ス

広漠タル芝生ニシテ芝密生シ遊覧ニ絶佳ノ地ナリ

字恩納有ニシテ村長之レヲ管理ス

3 現状

字恩納有ニシテ村長之レヲ管理ス

4 所有者

一、伊江村照太寺

(寺地)、地積(一段一畝九歩)

1 地目

瓦屋根ニシテ奥行、三間、間口三間半ノ寺祠アリテ祠後一

帶丘陵ヲナシ松樹及雜木林立ス岩角ニ權現堂アリテ古鏡ヲ

安置セリ、照太寺ハ即チ權現堂管護ノタメニ建立□シタル

モノナリ本尊ハ觀音菩薩□・・妙心寺派ニ属セリ

現今首里安國寺派遣□・・在リ

照太寺

2 形状寸尺

瓦屋根ニシテ奥行、三間、間口三間半ノ寺祠アリテ祠後一

帶丘陵ヲナシ松樹及雜木林立ス岩角ニ權現堂アリテ古鏡ヲ

安置セリ、照太寺ハ即チ權現堂管護ノタメニ建立□シタル

モノナリ本尊ハ觀音菩薩□・・妙心寺派ニ属セリ

現今首里安國寺派遣□・・在リ

照太寺

3 現状

現今首里安國寺派遣□・・在リ

照太寺

4 所有者

資料七 起案・決裁文

起案 大正十一年三月三日 学務課

決裁

大正十一年三月三日

文書番号

学第四七五ノ一〇号

发送

大正十一年三月四日

資料八 起案・決裁文

起案 大正十年九月十五日 学務課

決裁

大正十年九月十六日

文書番号

学第四七五ノ八号

发送

大正十年九月十六日

資料九 起案・決裁文

起案 大正十年六月二十九日 学務課

決裁

大正十年六月二八日

文書番号

学第四七五ノ二号

文書番号

史蹟名勝調査ノ件再照会

发送

大正十年六月二九日

文書番号

学第四七五ノ二号

发送

大正十年六月二八日

資料十 起案・決裁文

起案 大正十年三月四日 学務課

決裁

大正十年三月八日

文書番号

学第四七五ノ一号

文書番号

史蹟名勝調査ノ件照会

发送

大正十年三月九日

文書番号

学第四七一ノ一号

文書番号

史蹟名勝調査ノ件照会

发送

大正十年三月九日

文書番号

学第四七一ノ一号

文書番号

史蹟名勝調査ノ件照会

发送

大正十年三月九日

文書番号

学第四七一ノ一号

文書番号

史蹟名勝調査ノ件照会

发送

大正十年三月九日

資料十 起案・決裁文

起案 大正十年三月四日 学務課

決裁

大正十年三月八日

文書番号

学第四七五ノ一号

文書番号

史蹟名勝調査ノ件照会

发送

大正十年三月八日

文書番号

史蹟名勝調査ノ件照会

发送

資料十一 受理文

受理月日 大正十年三月三日
受理番号 学第四七五号

大正十年二月二十四日
川越沖縄県知事殿 照会

貴管下ニ於ケル史蹟名勝天然紀念物ニシテ指定ノ急ヲ要スヘキモノニ付テハ大正八年八月当省照会ニ対シ御回答ノ次第有之候處一般ノ調査モ亦必要ニ付史蹟（古墳ヲ除ク）名勝ノ全部ニ亘リ別記事項御取調御回報相成度候

山田内務大臣官房地理課長 印

内務部長 和田潤 殿
史蹟名勝調査ニ関スル件

本年三月九日付学第四七五号ヲ以テ御照会相成候標題之件別紙之通り及回答候也

宮古島司 松方太次郎 印

資料十三 受理文
受理日 大正十年五月十三日
受理番号 学四七五号
大正十年五月十日

史蹟名勝調査事項（平良村）

史蹟（犬川（インガー））

犬川（インガー）
平良村字西里（水産組合事務所西側）
山林内ニアリテ約四坪
平良村有

①種類
現状
由來徵証伝説
地目地積
所有者住所氏名

木円形ニシテ凹メリ
円形ニシテ中央凹シ周囲ハ雜木鬱蒼タリ
今ヨリ四百年前ニ目黒盛ト戰ヲ交ヘシガ目黒盛ハ
偉人アリキ平素ヨリ一疋ノ犬ヲ愛育セシガ其犬キ
何處ニ逃走セシヤ三ヶ年ヲ経ルモ見エズ其時與
那霸原（平良村字東仲宗根東加根辺）トテ勢力
強キ團体アリテ目黒盛ト戰ヲ交ヘシガ目黒盛ハ
唯一人ニテ敵ハ多數ナレバ衆寡敵セズ遂ニ漲水
港ノ波止場迄攻メ立テラレ危機一髪ノ秋トナレ
リ然ルニ三年前行衛不明トナリシ愛友突如トシ
テ現レ出デ獅子吼シテ敵ヲ噙シ殺シ犬ニ勝利ヲ
得テ旧主ノ命ヲ助ケタリト云フコレニ依リ犬ノ
現シ出デタル処ヲ千今犬川ト称ス
ナシ

（用紙美濃紙）
史蹟（古墳ヲ除ク）名勝調査事項
一、種類
二、名称
三、所在地 公称地名ニアラサル小字名ヲモ併セ記スコト
四、地目、地積
五、所有者ノ住所氏名
所有者ノ外管理者若ハ占有者アラハ其ノ住所氏名
六、形状、寸尺等
七、現状
位置、区域内及周囲ノ状況並破壊ノ程度等
八、由來、徵証、傳説
九、管理保存ノ方法
将来ノ管理保存ニ關スル意見アラバ□・・・
十、其他必要ナル事項

資料十二 受理文

受理日 大正十年四月九日
受理番号 学四七五号

第九八五ノ一号
大正十年三月十九日

八重山島司 瀬戸秀光 印

内務部長 和田潤 殿
本年三月九日学第四七五ノ一号ヲ以テ御照会相成候史蹟名勝天然紀念物ニ關スル右ハ大正七年二月二七日付□□五二七ノ二号ヲ以テ御回答致
□・・・次第モ有之該當ノモノ無之□・・・此段及御回答候也

七、六、五、四、三、二、一、②種類
名称
所在地
地目地積
形状寸尺
所有者住所氏名
史蹟
比屋地御嶽（ピヤーヴオタケ）
伊良部村字池間添
四反四畝十二歩、福樹森林
伊良部村
伊良部島ノ東端、区域内ハ大ナル福樹林、周囲
ハ阿旦樹生茂リ破壊ノ憂ナシ

八、由来徵証伝説

往昔「アカラトモガネ」ト申ス神 太和ヨリ久
米島ヲ経テ此所ニ來リ島民ヲ教直シ豊作ノ方法
礼儀作法等ヲ知ラシメタリ島民崇敬ノ念深ク今
ニ至ルモ毎年例祭ヲ怠ルコトナシ
現在ニ於テハ他ニ管理保存方法ノ施設ナキモ將
來郷社ニ改ムル方針ナリ

九、管理保存ノ方法

米島ヲ經テ此所ニ來リ島民ヲ教直シ豊作ノ方法
礼儀作法等ヲ知ラシメタリ島民崇敬ノ念深ク今
ニ至ルモ毎年例祭ヲ怠ルコトナシ
現在ニ於テハ他ニ管理保存方法ノ施設ナキモ將
來郷社ニ改ムル方針ナリ

③

二、種類
名称
所在地
四、地目地積
五、所有者住所氏名
六、形状寸尺
七、現状

伊良部村ノ二

一、種類
名称
所在地
四、地目地積
五、所有者住所氏名

史蹟
白銀堂
糸満町二、二五七番地（俗称イビヌメー）
糸満町
押所 五二歩
糸満町
管理者 糸満町長 上原次郎
略四角形、東西十三間、南北十二間
糸満町北端那覇街道入口ニ位シ周囲磚立セル岩
石ヲ以テ圓マレ構内ノ後部ハ樹木繁茂シ稍々前
面アタル所ニ東向ノ堂宇アリ
本国兼城郡糸満村此有一岩名□・・・往昔幸地
村人有美殿□・・・倭人之銀數次違限不償□・・・
而美殿不在家倭人怒而偏□・・・千岩下便要拔
刀殺之美殿哀求日我□・・・長隱而騙汝目下無力可
償迄今失信深慚而隱耳懇求寬恩免死來年決不敢
再違也因引古人之言日心怒則勿動手手動則當戒
心請其忍之倭人問之甚為有理乃寬限而去其後倭
人返棹之時臨夜入港半夜到家暗開門戸而入只見
其妻與奸夫同寢之情狀即怒拔刀在忍手思美殿之
戒忍怒剣手拳大照視方知母之伴寢也從來其母每
子遠行恐奸人逼瀆其妻暗地扮作男粧相伴而寢倭
人因聞美殿之戒相善母妻之命感激不已嗣後特到
琉球携酒謝恩此時美殿預備銀子償遂相瓦感恩而
倭人不肯受其銀美殿固請倭人頻行推辭竟其銀無
所歸乃埋之於岩下各表其志後人曰名白銀岩遂為
威部而尊焉

八、由来徵証伝説

名勝
通池（トホリイケ）
伊良部村字佐和田下地
池二ツ 周囲各々七百八十尺
伊良部村
円形
区域内ハ崖ノ高サ三十九尺水深不知上下スル不
能周囲ハ岩石破壊ノ憂ナシ
イ、富豪ノ宅地跡ナリ云云
往昔其富豪ガ海神ノ使者「ユナイナマ」ト
云フ魚ヲ捕ヘテ俎上ニ切りシニ海神怒リテ
海嘯ヲ起シテ陥落セシメタリト云フ
口、繼子ノ寝台アリ
繼母ガ繼子ヲ殺サントシテ却テ実子ヲ押落
シ已モ此池二入水シタリト云云
自然ニ任セルモ将来ハ公園ノ一部ニ編入スル予
定ナリ

九、管理保存ノ方法

他ノ三ヶ村ニハナシ

九、管理保存ノ方法
十、其他必要ナル事項

史蹟
浮溝走溝（ウケンズハイインズ）
玉城村字百名浦原ト濱川トノ間ニ
押所、四反五畝十八歩
玉城村字百名
全村字百名一、七二七番地 屋比久龜
西北ナル山中ヨリ清水湧出東南ナル水田ニ流レ
込ム溝ノ形ヲナセリ
本村ノ東南海岸ヨリ凡ソ一町位ノ北方ニアリテ

資料十四 受理文

受理日 大正十年五月十六日
受理番号 学四七五ノ四
五六〇ノ五号
大正十年五月十二日

嶋尻郡長 印

内務部長 殿

史蹟名勝天然記念物調査ニ関スル件
学第四七五ノ一号ニテ御照会ノ標記ノ件別紙ノ通り及回答候也

八、由来徵証伝説

西北ハ山ヲナシ東南ハ水田ヲ隔テ海ニ面ス
伝説ニ依レハ米ガ初メテ本県ニ伝エラレシ所ト
聞ク字百名山下原ニ米地原（メージバラ）ト云
所アリ往古此ノ所ニ一羽ノ鶴ガ暴風雨ノ為メニ
吹キ落サレテ死シ其ノ跡ニ一本ノ稻發生シ居ル
ヲ「アマス」ト云ウ人ガ発見シ之ヲ浮溝走溝ニ
移植シタリトノコトナリ 拝所ノ南方ニ俗ニ根
田ト称スル田アリ旧藩時代ハ一般ノ田ヨリ此ノ
田ハ先ニ植エルヲ例トシテ地頭之ヲ監督シテ植
エシム初メテ此ノ田ニ稻苗四株ヲ植ヘ付此ノ日
ヲ「ソレイ」ト云フ 次ニ三株ヲ植ヘ付此ノ日
ヲ「ミシチマ」ト云フ二回共村民業ヲ業ヲ休ミ
御神酒其ノ他ノ物ヲ供ヘテ祭拜スルヲ例トセリ
又御穗上トテ此ノ田ニ出来タル稻ノ穗ヲ国王ニ
奉ル式モアリタリ今尚県民ノ參拜スルモノ尠カ

五、所有者住所氏名
ナシ

天然自然ノ岩石橋ニシテ幅三間長サ八間高サ二丈
字ノ南方ニ位シ橋上ハ道路トナリ下方ハ数多ク
稍乳石垂下シ橋下ハ川流トナレリ
ハナケレドモ橋下ハ川流□□・水ノ為メ岩石
裂落シ自然ニ橋ニナ□□・察セラル

従来村ヨリ管理シ保存上別ニ故障等ナシ

六、形状

ナシ

七、現状

ナシ

八、由来徵証傳説

ナシ

九、管理保存ノ方法
十、其他必要ナル事項

ナシ

五、所有者住所氏名
ナシ

天然記念物
白水川

六、形状

ナシ

七、現状

ナシ

八、由来徵証傳説

ナケレドモ溝下ノ岩石水流ニヨリ崩落シタルガ
為自然ニ瀧ニナリタルモノト察セラル
従来村ヨリ管理シ保存シ別ニ故障ナシ

九、管理保存ノ方法
十、其他必要ナル事項

ナシ

五、所有者住所氏名
ナシ

天然記念物
具志頭村字具志頭白水川

六、形状

ナシ

七、現状

ナシ

八、由来徵証傳説

ナケレドモ溝下ノ岩石水流ニヨリ崩落シタルガ
為自然ニ瀧ニナリタルモノト察セラル
従来村ヨリ管理シ保存シ別ニ故障ナシ

九、管理保存ノ方法
十、其他必要ナル事項

ナシ

五、所有者住所氏名
ナシ

天然記念物
具志頭村字與座前原

六、形状

ナシ

七、現状

ナシ

八、由来徵証傳説

ナケレドモ元、上城按司ノ居城ナラシト伝ヘラ

九、管理保存ノ方法
十、其他必要ナル事項

ナシ

五、所有者住所氏名
ナシ

天然記念物
具志頭村字具志頭前原

六、形状

ナシ

七、現状

ナシ

八、由来徵証傳説

ナシ

九、管理保存ノ方法
十、其他必要ナル事項

ナシ

五、所有者住所氏名
ナシ

天然記念物
具志頭村字具志頭前原

六、形状

ナシ

七、現状

ナシ

八、由来徵証傳説

ナシ

九、管理保存ノ方法
十、其他必要ナル事項

ナシ

五、所有者住所氏名
ナシ

天然記念物
具志頭村字具志頭前原

六、形状

ナシ

七、現状

ナシ

八、由来徵証傳説

ナシ

九、管理保存ノ方法
十、其他必要ナル事項

ナシ

五、所有者住所氏名
ナシ

天然記念物
具志頭村字具志頭前原

六、形状

ナシ

七、現状

ナシ

八、由来徵証傳説

ナシ

九、管理保存ノ方法
十、其他必要ナル事項

ナシ

五、所有者住所氏名
ナシ

天然記念物
具志頭村字具志頭前原

六、形状

ナシ

七、現状

ナシ

八、由来徵証傳説

ナシ

九、管理保存ノ方法
十、其他必要ナル事項

ナシ

五、所有者住所氏名
ナシ

天然記念物
具志頭村字具志頭前原

六、形状

ナシ

七、現状

ナシ

八、由来徵証傳説

ナシ

九、管理保存ノ方法
十、其他必要ナル事項

ナシ

五、所有者住所氏名
ナシ

天然記念物
具志頭村字具志頭前原

六、形状

ナシ

七、現状

ナシ

八、由来徵証傳説

ナシ

九、管理保存ノ方法
十、其他必要ナル事項

ナシ

五、所有者住所氏名
ナシ

天然記念物
具志頭村字具志頭前原

六、形状

ナシ

七、現状

ナシ

八、由来徵証傳説

ナシ

九、管理保存ノ方法
十、其他必要ナル事項

ナシ

五、所有者住所氏名
ナシ

天然記念物
具志頭村字具志頭前原

六、形状

ナシ

七、現状

ナシ

八、由来徵証傳説

ナシ

九、管理保存ノ方法
十、其他必要ナル事項

ナシ

五、所有者住所氏名
ナシ

天然記念物
具志頭村字具志頭前原

六、形状

ナシ

七、現状

ナシ

八、由来徵証傳説

ナシ

九、管理保存ノ方法
十、其他必要ナル事項

ナシ

五、所有者住所氏名
ナシ

天然記念物
具志頭村字具志頭前原

六、形状

ナシ

七、現状

ナシ

八、由来徵証傳説

ナシ

九、管理保存ノ方法
十、其他必要ナル事項

ナシ

五、所有者住所氏名
ナシ

天然記念物
具志頭村字具志頭前原

六、形状

ナシ

七、現状

ナシ

八、由来徵証傳説

ナシ

九、管理保存ノ方法
十、其他必要ナル事項

ナシ

五、所有者住所氏名
ナシ

天然記念物
具志頭村字具志頭前原

六、形状

ナシ

七、現状

ナシ

八、由来徵証傳説

ナシ

九、管理保存ノ方法
十、其他必要ナル事項

ナシ

五、所有者住所氏名
ナシ

天然記念物
具志頭村字具志頭前原

六、形状

ナシ

七、現状

ナシ

八、由来徵証傳説

ナシ

九、管理保存ノ方法
十、其他必要ナル事項

ナシ

五、所有者住所氏名
ナシ

天然記念物
具志頭村字具志頭前原

六、形状

ナシ

七、現状

ナシ

八、由来徵証傳説

ナシ

九、管理保存ノ方法
十、其他必要ナル事項

ナシ

五、所有者住所氏名
ナシ

天然記念物
具志頭村字具志頭前原

六、形状

ナシ

七、現状

ナシ

八、由来徵証傳説

ナシ

九、管理保存ノ方法
十、其他必要ナル事項

ナシ

五、所有者住所氏名
ナシ

天然記念物
具志頭村字具志頭前原

六、形状

ナシ

七、現状

ナシ

八、由来徵証傳説

ナシ

九、管理保存ノ方法
十、其他必要ナル事項

ナシ

五、所有者住所氏名
ナシ

天然記念物
具志頭村字具志頭前原

六、形状

ナシ

七、現状

ナシ

八、由来徵証傳説

ナシ

九、管理保存ノ方法
十、其他必要ナル事項

ナシ

五、所有者住所氏名
ナシ

天然記念物
具志頭村字具志頭前原

六、形状

ナシ

七、現状

ナシ

八、由来徵証傳説

ナシ

九、管理保存ノ方法
十、其他必要ナル事項

ナシ

五、所有者住所氏名
ナシ

天然記念物
具志頭村字具志頭前原

六、形状

ナシ

七、現状

ナシ

八、由来徵証傳説

ナシ

九、管理保存ノ方法
十、其他必要ナル事項

ナシ

五、所有者住所氏名
ナシ

天然記念物
具志頭村字具志頭前原

六、形状

ナシ

七、現状

ナシ

八、由来徵証傳説

ナシ

九、管理保存ノ方法
十、其他必要ナル事項

ナシ

五、所有者住所氏名
ナシ

天然記念物
具志頭村字具志頭前原

六、形状

八、由來徵証傳説

本城趾ハ元久米島具志川村ヨリ傳居シタモノナリト其ノ子孫ハ字喜屋武ニアリテ久米姓ヲ有シ今尚其ノ城趾ヲ拝祭ス西部海岸ハ舟ノ出入ニ便ナル所アリテ築港ノ計画アリシモ果サザル模様ナリト

村有ニシテ且ツ保安林ナルニ付草木ノ□・ズルノミナリ

史蹟（嶽）
穩作根嶽

九、管理保存ノ方法
十、其他必要ナル事項

一、種類

二、名称
所在地

三、地目地積

四、所有者住所氏名

五、形状

六、現状

七、由來徵証傳説

八、由來徵証傳説

九、由來徵証傳説

十、由來徵証傳説

十一、由來徵証傳説

十二、由來徵証傳説

十三、由來徵証傳説

十四、由來徵証傳説

十五、由來徵証傳説

十六、由來徵証傳説

十七、由來徵証傳説

十八、由來徵証傳説

十九、由來徵証傳説

二十、由來徵証傳説

二十一、由來徵証傳説

二十二、由來徵証傳説

二十三、由來徵証傳説

二十四、由來徵証傳説

二十五、由來徵証傳説

二十六、由來徵証傳説

二十七、由來徵証傳説

二十八、由來徵証傳説

二十九、由來徵証傳説

三十、由來徵証傳説

三十一、由來徵証傳説

三十二、由來徵証傳説

三十三、由來徵証傳説

三十四、由來徵証傳説

三十五、由來徵証傳説

三十六、由來徵証傳説

三十七、由來徵証傳説

三十八、由來徵証傳説

三十九、由來徵証傳説

四十、由來徵証傳説

四十一、由來徵証傳説

四十二、由來徵証傳説

四十三、由來徵証傳説

四十四、由來徵証傳説

四十五、由來徵証傳説

四十六、由來徵証傳説

四十七、由來徵証傳説

四十八、由來徵証傳説

四十九、由來徵証傳説

五十、由來徵証傳説

五十一、由來徵証傳説

五十二、由來徵証傳説

五十三、由來徵証傳説

五十四、由來徵証傳説

五十五、由來徵証傳説

五十六、由來徵証傳説

五十七、由來徵証傳説

五十八、由來徵証傳説

五十九、由來徵証傳説

六十、由來徵証傳説

六十一、由來徵証傳説

六十二、由來徵証傳説

六十三、由來徵証傳説

六十四、由來徵証傳説

六十五、由來徵証傳説

六十六、由來徵証傳説

六十七、由來徵証傳説

六十八、由來徵証傳説

六十九、由來徵証傳説

七十、由來徵証傳説

七十一、由來徵証傳説

七十二、由來徵証傳説

七十三、由來徵証傳説

七十四、由來徵証傳説

七十五、由來徵証傳説

七十六、由來徵証傳説

七十七、由來徵証傳説

七十八、由來徵証傳説

七十九、由來徵証傳説

八十、由來徵証傳説

八十一、由來徵証傳説

八十二、由來徵証傳説

八十三、由來徵証傳説

八十四、由來徵証傳説

八十五、由來徵証傳説

八十六、由來徵証傳説

八十七、由來徵証傳説

八十八、由來徵証傳説

八十九、由來徵証傳説

九十、由來徵証傳説

九十一、由來徵証傳説

九十二、由來徵証傳説

九十三、由來徵証傳説

九十四、由來徵証傳説

九十五、由來徵証傳説

九十六、由來徵証傳説

九十七、由來徵証傳説

九十八、由來徵証傳説

九十九、由來徵証傳説

一百、由來徵証傳説

一百一、由來徵証傳説

一百二、由來徵証傳説

一百三、由來徵証傳説

一百四、由來徵証傳説

一百五、由來徵証傳説

一百六、由來徵証傳説

一百七、由來徵証傳説

一百八、由來徵証傳説

一百九、由來徵証傳説

一百十、由來徵証傳説

一百十一、由來徵証傳説

一百十二、由來徵証傳説

一百十三、由來徵証傳説

一百十四、由來徵証傳説

一百十五、由來徵証傳説

一百十六、由來徵証傳説

一百十七、由來徵証傳説

一百十八、由來徵証傳説

一百十九、由來徵証傳説

一百二十、由來徵証傳説

一百二十一、由來徵証傳説

一百二十二、由來徵証傳説

一百二十三、由來徵証傳説

一百二十四、由來徵証傳説

一百二十五、由來徵証傳説

一百二十六、由來徵証傳説

一百二十七、由來徵証傳説

一百二十八、由來徵証傳説

一百二十九、由來徵証傳説

一百三十、由來徵証傳説

一百三十一、由來徵証傳説

一百三十二、由來徵証傳説

一百三十三、由來徵証傳説

一百三十四、由來徵証傳説

一百三十五、由來徵証傳説

一百三十六、由來徵証傳説

一百三十七、由來徵証傳説

一百三十八、由來徵証傳説

一百三十九、由來徵証傳説

一百四十、由來徵証傳説

一百四十一、由來徵証傳説

一百四十二、由來徵証傳説

一百四十三、由來徵証傳説

一百四十四、由來徵証傳説

一百四十五、由來徵証傳説

一百四十六、由來徵証傳説

一百四十七、由來徵証傳説

一百四十八、由來徵証傳説

一百四十九、由來徵証傳説

一百五十、由來徵証傳説

一百五十一、由來徵証傳説

一百五十二、由來徵証傳説

一百五十三、由來徵証傳説

一百五十四、由來徵証傳説

一百五十五、由來徵証傳説

一百五十六、由來徵証傳説

一百五十七、由來徵証傳説

一百五十八、由來徵証傳説

一百五十九、由來徵証傳説

一百六十、由來徵証傳説

一百六十一、由來徵証傳説

一百六十二、由來徵証傳説

一百六十三、由來徵証傳説

一百六十四、由來徵証傳説

一百六十五、由來徵証傳説

一百六十六、由來徵証傳説

一百六十七、由來徵証傳説

一百六十八、由來徵証傳説

一百六十九、由來徵証傳説

一百七十、由來徵証傳説

一百七十一、由來徵証傳説

一百七十二、由來徵証傳説

一百七十三、由來徵証傳説

一百七十四、由來徵証傳説

一百七十五、由來徵証傳説

一百七十六、由來徵証傳説

一百七十七、由來徵証傳説

一百七十八、由來徵証傳説

一百七十九、由來徵証傳説

一百八十、由來徵証傳説

一百八十一、由來徵証傳説

一百八十二、由來徵証傳説

一百八十三、由來徵証傳説

一百八十四、由來徵証傳説

一百八十五、由來徵証傳説

一百八十六、由來徵証傳説

一百八十七、由來徵証傳説

一百八十八、由來徵証傳説

一百八十九、由來徵証傳説

一百九十、由來徵証傳説

一百九十一、由來徵証傳説

一百九十二、由來徵証傳説

一百九十三、由來徵証傳説

一百九十四、由來徵証傳説

一百九十五、由來徵証傳説

一百九十六、由來徵証傳説

一百九十七、由來徵証傳説

一百九十八、由來徵証傳説

一百九十九、由來徵証傳説

一百二十、由來徵証傳説

中ヨリ出シテ桑ヤ篠ニテ造レル「サン」ニテ生靈ハ墓中ヨリ出デヨ死靈ハ墓中ニ納マレト墓中ヲ拵ヒテ後ニ其ノ「サン」ハ墓軒ニ差シ娘ヲ連レ帰リ城内ニテハ外間崎ヨリ桑篠ヲ取り来リテ屋上又ハ軒々ニ差シテ妖氣ヲ拵ヒ赤飯ヲ造リ且ソ安平田ガ牽キシ牛ヲ殺シテ御祝ヲナシタリ是レ即毎年八月十日ニ行ハル赤飯柴差ノ起レル基ニシテ旧藩時代ハ中山城御用ノ柴ハ当兼城外間崎ヨリ奉納シタリト云フ
上好ム所下之レラ好ムデ下人民モ是レニ習ヒテ八月十日ニハ軒ニ柴ヲ差シ赤飯ヲ煮イテ祭祀ヲ行フ事トナレリ 当字兼城二字ハ今モ尚宮ノ下ニテ牛ヲ殺シテ祭祀ヲ行ヘリ
九、管理保存ノ方法 字共有ニシテ其ノ代表者タル区長之レヲ管理ナシ
十、其他必要ナル事項

五、所有者住所氏名 首里区字当藏三十二番地 豊見城朝熙
六、形状 周囲ハ石垣ヲ以テ繞ラレ東北部ノ如キハ丈餘ノ絶壁■ナセリ
七、現状 キモ畠ト変セリト雖モ内門ノ趾今尚存ス傳説ナラサレドモ旧藩時代護佐丸ノ子孫タルナシ
八、由來徵証傳説 豊見城按司ノ城タリ
九、管理保存ノ方法 饒波川ノ下流東部ヨリ流レ城趾ニ沿フテ北部ヲ過ギ遙カ西北部ノ奥武山公園及那霸ハ手ニ取ル如ク望ムヲ得テ山水風景ノ名勝地ナリ
十、其他必要ナル事項 ナシ

五、所有者住所氏名 首里区字当藏三十二番地 豊見城朝熙
六、形状 周囲ハ石垣ヲ以テ繞ラレ東北部ノ如キハ丈餘ノ絶壁■ナセリ
七、現状 キモ畠ト変セリト雖モ内門ノ趾今尚存ス傳説ナラサレドモ旧藩時代護佐丸ノ子孫タルナシ
八、由來徵証傳説 豊見城按司ノ城タリ
九、管理保存ノ方法 饒波川ノ下流東部ヨリ流レ城趾ニ沿フテ北部ヲ過ギ遙カ西北部ノ奥武山公園及那霸ハ手ニ取ル如ク望ムヲ得テ山水風景ノ名勝地ナリ
十、其他必要ナル事項 ナシ

七、現状

字嘉手丸ノ村ハズレニ在リテ北方ハ傾者極メテ
緩慢ナル畠地ヲ隔テテ鎮守森ト認ムベキ雜木林
アリ内部ハ一面平坦ニシテ種々ノ建物ト此ノ中
ニ設ケラレシコト疑ナケレド今ハ蕩然トシテ一
柱ヲモ認メス只久葉樹ヲ初メ雜□・・・茂シ晝
尚暗キ感ガス

昔伊敷索按司居城タリシモ中山王ノ為□・・・
サレテ其ノ趾ヲ絶ツト傳ク□・・・年一回諸ノ
口クモイ此処ニ集合シ祭祀ヲナシ

祝詞ヲ奏シテ尊信シ居バ此処ヲ神嶽ト
シテ濫リニ人民ハ出入セズ

特ニ保存ノ方法ナシ

九、管理保存ノ方法
十、其他必要ナル事項

八、由來徵証傳説

一、種類

二、名称

三、所在地

四、地目地積

五、所有者住所氏名

六、形状

七、現状

八、由來徵証傳説

城趾

具志川城

具志川村字具志川

山林 千二百坪

具志川村有

字具志川八三二 久手堅カマダ

円形

字仲村渠ノ西北海岸ニ在リ古城ニシテ三面ハ拾
数丈ノ断崖絶壁他ノ一面ハ坂路ニシテ本門ヲ茲
ニ建ツ古城トシテハ実ニ要害ノ所タリ今ヤ雜草
雜木ニ埋マルト雖モ正門両側石垣今尚在ス

往昔、久米島仲地村ニ仲地ト云フモノアリ一日
具志川嶽ニ登リ林木ヲ伐リ舟ヲ造ラントス□・・・
渤海按司ト云フモノ青名崎ニ城ヲ造ラン□・・・
往テ按司ニ告テ曰ク吾此地ヲ視ルニ山□・・・
シ具志川嶽ニ如カザルナリ具志川嶽ハ山□・・・
水明ニ地ハ甚ダ寛闊ニシテ三面陥岨ナリ鐘靈ト
云フベシ伏シテ請フ宜ク彼地ニ築カルベシト按
司之ヲ聞キ大ニ喜ビ共ニ彼地ニ往テ遍リ山川ヲ
巡リ遂ニ石匠ニ命ジテ大石ヲ運ビ城ヲ嶽ニ築カ
シメテ此ニ移居シ神歌ヲ作りテ落成ヲ奉頌ス嫡
長眞金声ノ按司既ニ父ノ業ヲ繼キ亦此城ニ居リ
以テ人民ヲ治ム後、眞仁古樽按司（伊敷索城按
司ノ次男）ノ滅ス所トナル按司ハ自ラ具志川按
司ト称シテ居城ス時ニ中山、大岳ヲ以テ久米島
ヲ討ツ按司之ヲ聞キ大ニ驚キ急ニ人民ニ命シ潜
ム池ヲ造リ城内ニ入ラシメズ其ノ城ヲ守リテ敢

テ出戦セザレバ官軍其ノ城ノ鞏固ニシテ攻メ
キヲ以テ己ニ軍馬ヲ収メテ退去セントス時ニ

司、養父世那節大比屋ト云ウモノ官軍ニ告ゲテ
曰ク吾レ城中ヲ見レバ一点ノ水ナシ密ニ城外ノ

水ヲ引イテ以テ口用ノ資ニ備フ若シ其ノ水溝ヲ見

塞ギ水ヲ城内ニ入ラシメザレバ按司安シグ出

セザランヤ其ノ出ル時ヲ保テ之ヲ殺サバ易キ

ト猶掌ヲ反スガ如キノモ官軍即チ其ノ溝ヲ埋メ

水ヲ城内ニ通セシメズ按司水溝ノ通ゼザルヲ見

テ鐵ノ盔甲ヲ穿ケ城門ニ出テ水溝ヲ監視ス時ニ

九、管理保存ノ方法

十、其他必要ナル事項

九、管理保存ノ方法

十、其他必要ナル事項

九、管理保存ノ方法

十、其他必要ナル事項

尚圓様御屋敷首見村北表午ノ方向式拾間角ノ内
東北みほそ所五間角長檀真中石三高コハ一本け
の御木一本有四方松木植廻申候屋敷ハ根所ニ成
并神何し屋け居往古ヨリ首見のく子孫代々居住
シテ奉崇候御公儀並島中ノ御願所ニテ御座候
管理者ヲシテ保存ノ任ニ当ラシム

九、管理保存ノ方法
十、其他必要ナル事項
ナシ

(22) 一、種類
二、名称
三、所在地
四、地目地積
五、所有者住所氏名
六、形状
七、現状

史蹟
南山城趾
高嶺村字大里為島原
拝所 三千四百五十坪
高嶺村有

岳上ニアリ
周囲石垣ヲ以テ開マレ所々破壊セシ所モアレド
城内ノ一隅ニ南山神社アリ
南山城趾ハ高嶺村字大里ノ西方一町バカリノ岳
□・・・南ハ国吉城趾北ハ大城之趾ヲ扣ヘ東ハ
□・・・及八重瀬岳ニ連リ西ハ糸満町ヲ眼下ニ
見下シ□・・・テ遙カ慶良間島ヲ眺メ眺望絶佳
ナリ此ノ城ハ元大里城ト称シテ昔天孫氏時代ヨ
リ封ヤラレシ大里按司ノ居城タリシ地ナリ
永萬元年（二條天皇ノ御代今ヨリ七百五十七年
前）源為朝大里按司ノ妹ヲ娶リテ妻ニセリト云
ヘル大里按司トハ此ノ城主ナリ
其レヨリ百六十二年後、即嘉曆元年ニ至リ中山
ノ勢力稍々衰へ諸按司叛スルニ至ルヤ當時ノ城
主タリシ承察度ハ兵ヲ起シテ大里、佐敷、知念、
玉城、具志頭、東風平、喜屋武、摩文仁、裏壁、
兼城、豊見城ノ十一ヶ間切ノ城主ヲ從ヘナセ此
ノ城ヲ改築シ永徳三年明ノ冊封ヲ受ケテ山南王
承察度ト号シ駄紐鉱金銀印ヲ受ケ傳ヘテ二世汪
慶祖三世他魯每ニ至リ永享元年遂ニ中山王尚巴
志ノ為メニ滅サル
ナシ
村有ナレバ高嶺村ニ於テ管理ス

(23) 一、種類
二、名称
三、所在地
四、地目地積
五、所有者住所氏名
六、形状寸尺等
七、現状

拝所
八幡宮
真和志村字安里小字後原五百十番地

八、由來徵証傳説
九、管理保存ノ方法
十、其他必要ナル事項
ナシ

五、所有者住所氏名
六、形状
七、現状

国王第六代天正年中尚徳王ノ徳鬼界島征伐ノ途
次大道松原ニ於テ水鳥羽ヲ動カシテ上空ヲ飛居
ルヲ国王自ラ弓ヲ以テ射タルニ矢ハ命中シタル
モ鳥ハ落下セズ矢ハ地ニ落テ立チタリト依テ鬼
界島ハ難ナリ征伐シテノ帰途小鐘浮上リ王ノ船
ニ從ヒ来リシヲ以テ諸人不思議ニ思ヒ之ヲ引揚
ゲントセシモ動カズ遂ニ自ラ引揚ゲシニ容易ニ
手ニ持揚グルコトヲ得タリ依リテ以上ノ瑞ニ基
キ以前矢ノ立チタル場所ニ宮ヲ建テ應神天皇、
神功皇后、玉依姫ラ安置シ靈鏡ヲ全所ニ秘藏シ
タリト以來護國ノ神トシテ尊信スルモノ多カレ
シト
廢藩置県シ後ハ廢頽ノ俗ニ委シ修繕ヲ加工タル
コトナシ尚保存方法ニツキ特ニ意見ナシ

八幡神社
社寺ノ本堂ノ形状ヲ備フ奥行三間□・・・
字安里ノ東方背後小高キ丘ノ所□・・・
团ハ廢頽甚シク雜木繁茂シ建物□・・・
シ回廊及壁等ハ既ニ腐朽甚ダシ

八、由來徵証傳説
一、祭神 應神天皇 神功皇后
玉依姫

(24) 一、種類
二、名称
三、所在地
四、地目地積
五、所有者住所氏名
六、形状寸尺等
七、現状

資料十五 受理文
九、管理保存ノ方法
十、其他必要ナル事項
ナシ

受理日 大正十年五月十九日
受理番号 学四七五ノ五
第五五〇ノ一号
大正十年五月十八日
以上

沖縄県内務部長 和田潤 殿
学第四七五ノ一号ヲ以テ御照会相成候史蹟調査別紙ノ通り小条此段及
御回報付也

沖縄県那覇区長 山城正訓 印
那覇区久米町
孔子廟
那覇区久米町
別紙ノ通り
廟ニシテ孔子、孟子、顏子、思子、曾子ノ像ヲ

八、由來徵証傳説

九、管理保存方法

四、地目地積

奉安ス
那霸区泉崎橋頭ニ在リ建物全部支那風ニシテ木
材凡テ丹泥ヲ塗ル境内福木深緑濃カニシテ幽遂
ノ趣キアリ廟内ニ孔子及顏孟思曾四賢ノ像ヲ安
置シ春秋ノ祭典今尚廢セズ
旧久米村人ノ管理保存ニ属シ仝人等ハ從来ノ維
持費及其他ノ寄附金ヲ以テ春秋二期ノ丁祭ヲ執
行シツツアリ

五、所有者ノ住所氏名

六、形状寸尺等

官幣小社波上宮
別紙ノ通り

速國男命ヲ奉安セリ
護国寺附属ノ小社ニ過ギサルシガ今ハ官幣小社
ニ列シ毎年五月十七日例祭ヲ行フ社内國寶ノ朝
鮮式梵鏡（「鏡」は「鐘」のまちがいか）一個

七、現状

波上宮ハ那霸区若狭町北海岸ノ筈巖上ニ建ツ古
刹ノ本尊也

九、管理保存方法

沖縄縣ノ直轄ニ属シ縣ニ於テ管理ヲナシ居レリ

二、種類
三、所在地
四、地目地積
五、所有者ノ住所氏名

六、形状寸尺等

七、現状
八、由來徵証傳説

名勝及旧蹟
住吉

那霸区住吉
拝所及山林

一、種類
二、種類
三、所在地
四、地目地積
五、所有者ノ住所氏名

六、形状寸尺等

七、現状
八、由來徵証傳説

名勝及旧蹟
住吉

那霸区住吉
拝所及山林

九、管理保存方法
十、由來徵証傳説
十一、種類
十二、種類
十三、所在地
十四、地目地積
十五、所有者ノ住所氏名

十六、形状寸尺等

十七、現状
十八、由來徵証傳説

名勝及旧蹟
住吉

那霸区住吉
拝所及山林

十九、管理保存方法
二十、由來徵証傳説
二十一、種類
二十二、種類
二十三、所在地
二十四、地目地積
二十五、所有者ノ住所氏名

二十六、形状寸尺等

二十七、現状
二十八、由來徵証傳説

名勝及旧蹟
住吉

那霸区住吉
拝所及山林

二十九、管理保存方法
三十、由來徵証傳説
三十一、種類
三十二、種類
三十三、所在地
三十四、地目地積
三十五、所有者ノ住所氏名

三十六、形状寸尺等

三十七、現状
三十八、由來徵証傳説

名勝及旧蹟
住吉

那霸区住吉
拝所及山林

三十九、管理保存方法
四十、由來徵証傳説
四十一、種類
四十二、種類
四十三、所在地
四十四、地目地積
四十五、所有者ノ住所氏名

四十六、形状寸尺等

四十七、現状
四十八、由來徵証傳説

名勝及旧蹟
住吉

那霸区住吉
拝所及山林

四十九、管理保存方法
五十、由來徵証傳説
五十一、種類
五十二、種類
五十三、所在地
五十四、地目地積
五十五、所有者ノ住所氏名

五十六、形状寸尺等

五十七、現状
五十八、由來徵証傳説

名勝及旧蹟
住吉

那霸区住吉
拝所及山林

五十九、管理保存方法
六十、由來徵証傳説
六十一、種類
六十二、種類
六十三、所在地
六十四、地目地積
六十五、所有者ノ住所氏名

六十六、形状寸尺等

六十七、現状
六十八、由來徵証傳説

名勝及旧蹟
住吉

那霸区住吉
拝所及山林

六十九、管理保存方法
七十、由來徵証傳説
七十一、種類
七十二、種類
七十三、所在地
七十四、地目地積
七十五、所有者ノ住所氏名

七十六、形状寸尺等

七十七、現状
七十八、由來徵証傳説

名勝及旧蹟
住吉

那霸区住吉
拝所及山林

七十九、管理保存方法
八十、由來徵証傳説
八十一、種類
八十二、種類
八十三、所在地
八十四、地目地積
八十五、所有者ノ住所氏名

八十六、形状寸尺等

八十七、現状
八十八、由來徵証傳説

名勝及旧蹟
住吉

那霸区住吉
拝所及山林

八十九、管理保存方法
九十、由來徵証傳説
九十一、種類
九十二、種類
九十三、所在地
九十四、地目地積
九十五、所有者ノ住所氏名

九十六、形状寸尺等

九十七、現状
九十八、由來徵証傳説

名勝及旧蹟
住吉

那霸区住吉
拝所及山林

九十九、管理保存方法
一百、由來徵証傳説
一百一、種類
一百二、種類
一百三、所在地
一百四、地目地積
一百五、所有者ノ住所氏名

一百六、形状寸尺等

一百七、現状
一百八、由來徵証傳説

名勝及旧蹟
住吉

那霸区住吉
拝所及山林

一百九、管理保存方法
二百、由來徵証傳説
二百一、種類
二百二、種類
二百三、所在地
二百四、地目地積
二百五、所有者ノ住所氏名

二百六、形状寸尺等

二百七、現状
二百八、由來徵証傳説

名勝及旧蹟
住吉

那霸区住吉
拝所及山林

二百九、管理保存方法
三百、由來徵証傳説
三百一、種類
三百二、種類
三百三、所在地
三百四、地目地積
三百五、所有者ノ住所氏名

三百六、形状寸尺等

三百七、現状
三百八、由來徵証傳説

名勝及旧蹟
住吉

那霸区住吉
拝所及山林

三百九、管理保存方法
四百、由來徵証傳説
四百一、種類
四百二、種類
四百三、所在地
四百四、地目地積
四百五、所有者ノ住所氏名

四百六、形状寸尺等

四百七、現状
四百八、由來徵証傳説

名勝及旧蹟
住吉

那霸区住吉
拝所及山林

四百九、管理保存方法
五百、由來徵証傳説
五百一、種類
五百二、種類
五百三、所在地
五百四、地目地積
五百五、所有者ノ住所氏名

五百六、形状寸尺等

五百七、現状
五百八、由來徵証傳説

名勝及旧蹟
住吉

那霸区住吉
拝所及山林

五百九、管理保存方法
六百、由來徵証傳説
六百一、種類
六百二、種類
六百三、所在地
六百四、地目地積
六百五、所有者ノ住所氏名

六百六、形状寸尺等

六百七、現状
六百八、由來徵証傳説

名勝及旧蹟
住吉

那霸区住吉
拝所及山林

六百九、管理保存方法
七百、由來徵証傳説
七百一、種類
七百二、種類
七百三、所在地
七百四、地目地積
七百五、所有者ノ住所氏名

七百六、形状寸尺等

七百七、現状
七百八、由來徵証傳説

名勝及旧蹟
住吉

那霸区住吉
拝所及山林

七百九、管理保存方法
八百、由來徵証傳説
八百一、種類
八百二、種類
八百三、所在地
八百四、地目地積
八百五、所有者ノ住所氏名

八百六、形状寸尺等

八百七、現状
八百八、由來徵証傳説

名勝及旧蹟
住吉

那霸区住吉
拝所及山林

八百九、管理保存方法
九百、由來徵証傳説
九百一、種類
九百二、種類
九百三、所在地
九百四、地目地積
九百五、所有者ノ住所氏名

九百六、形状寸尺等

九百七、現状
九百八、由來徵証傳説

名勝及旧蹟
住吉

那霸区住吉
拝所及山林

九百九、管理保存方法
一千、由來徵証傳説
一千一、種類
一千二、種類
一千三、所在地
一千四、地目地積
一千五、所有者ノ住所氏名

一千六、形状寸尺等

一千七、現状
一千八、由來徵証傳説

名勝及旧蹟
住吉

那霸区住吉
拝所及山林

一千九、管理保存方法
二千、由來徵証傳説
二千一、種類
二千二、種類
二千三、所在地
二千四、地目地積
二千五、所有者ノ住所氏名

二千六、形状寸尺等

二千七、現状
二千八、由來徵証傳説

名勝及旧蹟
住吉

那霸区住吉
拝所及山林

二千九、管理保存方法
三千、由來徵証傳説
三千一、種類
三千二、種類
三千三、所在地
三千四、地目地積
三千五、所有者ノ住所氏名

三千六、形状寸尺等

三千七、現状
三千八、由來徵証傳説

名勝及旧蹟
住吉

那霸区住吉
拝所及山林

三千九、管理保存方法
四千、由來徵証傳説
四千一、種類
四千二、種類
四千三、所在地
四千四、地目地積
四千五、所有者ノ住所氏名

四千六、形状寸尺等

四千七、現状
四千八、由來徵証傳説

名勝及旧蹟
住吉

那霸区住吉
拝所及山林

四千九、管理保存方法
五千、由來徵証傳説
五千一、種類
五千二、種類
五千三、所在地
五千四、地目地積
五千五、所有者ノ住所氏名

五千六、形状寸尺等

五千七、現状
五千八、由來徵証傳説

名勝及旧蹟
住吉

那霸区住吉
拝所及山林

五千九、管理保存方法
六千、由來徵証傳説
六千一、種類
六千二、種類
六千三、所在地
六千四、地目地積
六千五、所有者ノ住所氏名

六千六、形状寸尺等

六千七、現状
六千八、由來徵証傳説

名勝及旧蹟
住吉

那霸区住吉
拝所及山林

六千九、管理保存方法
七千、由來徵証傳説
七千一、種類
七千二、種類
七千三、所在地
七千四、地目地積
七千五、所有者ノ住所氏名

七千六、形状寸尺等

七千七、現状
七千八、由來徵証傳説

名勝及旧蹟
住吉

那霸区住吉
拝所及山林

七千九、管理保存方法
八千、由來徵証傳説
八千一、種類
八千二、種類
八千三、所在地
八千四、地目地積
八千五、所有者ノ住所氏名

八千六、形状寸尺等

八千七、現状
八千八、由來徵証傳説

名勝及旧蹟
住吉

那霸区住吉
拝所及山林

八千九、管理保存方法
九千、由來徵証傳説
九千一、種類
九千二、種類
九千三、所在地
九千四、地目地積
九千五、所有者ノ住所氏名

九千六、形状寸尺等

九千七、現状
九千八、由來徵証傳説

名勝及旧蹟
住吉

那霸区住吉
拝所及山林

九千九、管理保存方法
一万、由來徵証傳説
一万一、種類
一万二、種類
一万三、所在地
一万四、地目地積
一万五、所有者ノ住所氏名

一万六、形状寸尺等

一万七、現状
一万八、由來徵証傳説

名勝及旧蹟
住吉

那霸区住吉
拝所及山林

一万九、管理保存方法
二万、由來徵証傳説
二万一、種類
二万二、種類
二万三、所在地
二万四、地目地積
二万五、所有者ノ住所氏名

二万六、形状寸尺等

二万七、現状
二万八、由來徵証傳説

名勝及旧蹟
住吉

那霸区住吉
拝所及山林

二万九、管理保存方法
三万、由來徵証傳説
三万一、種類
三万二、種類
三万三、所在地
三万四、地目地積
三万五、所有者ノ住所氏名

三万六、形状寸尺等

三万七、現状
三万八、由來徵証傳説

名勝及旧蹟
住吉

那霸区住吉
拝所及山林

三万九、管理保存方法
四万、由來徵証傳説
四万一、種類
四万二、種類
四万三、所在地
四万四、地目地積
四万五、所有者ノ住所氏名

四万六、形状寸尺等

四万七、現状
四万八、由來徵証傳説

名勝及旧蹟
住吉

那霸区住吉
拝所及山林

四万九、管理保存方法
五万、由來徵証傳説
五万一、種類
五万二、種類
五万三、所在地
五万四、地目地積
五万五、所有者ノ住所氏名

五万六、形状寸尺等

五万七、現状
五万八、由來徵証傳説

名勝及旧蹟
住吉

那霸区住吉
拝所及山林

五万九、管理保存方法
六万、由來徵証傳説
六万一、種類
六万二、種類
六万三、所在地
六万四、地目地積
六万五、所有者ノ住所氏名

六万六、形状寸尺等

六万七、現状
六万八、由來徵証傳説

名勝及旧蹟
住吉

那霸区住吉
拝所及山林

六万九、管理保存方法
七万、由來徵証傳説
七万一、種類
七万二、種類
七万三、所在地
七万四、地目地積
七万五、所有者ノ住所氏名

七万六、形状寸尺等

七万七、現状
七万八、由來徵証傳説

名勝及旧蹟
住吉

那霸区住吉
拝所及山林

七万九、管理保存方法
八万、由來徵証傳説
八万一、種類
八万二、種類
八万三、所在地
八万四、地目地積
八万五、所有者ノ住所氏名

八万六、形状寸尺等

八万七、現状
八万八、由來徵証傳説

名勝及旧蹟
住吉

那霸区住吉
拝所及山林

八万

九、管理保存方法	八、由來徵証傳說	七、現狀	六、形状寸尺等	五、所有者ノ住所氏名	四、地積	三、所在地	二、種類	一、(32)名稱
----------	----------	------	---------	------------	------	-------	------	----------

三重城
那覇区西新町
燈明台敷地
官有
別紙ノ通り
三重城内ニ不動晝夜燈明台ノ設置アリ
那覇港口ニ在リ謂ユル南北砲台中ノ北砲台ニシテ古ヘ海賊防禦ノ為築クト云フ城内ニ不動晝夜燈明台ノ設置アリ當時小公園トナシタル為メ遊人絶ヘズ
崎原燈明台ノ管理ナリ

九、管理保存方法

八、由來徵証傳說

七、現狀

六、形狀寸尺等

五、所有者ノ住所氏名

四、地積

三、地地地

二、種類

一、(31)名称

那霸区住吉町
寺地
臨海寺
別紙ノ通り
真言宗ノ寺ニシテ藥師如來ヲ本尊トセリ
那霸港ノ南方ニアル沖ノ寺ノ別称ニシテ藥師如
來ヲ本尊トス當寺ハ元全港ノ北方ニアリシガ明
治四十一年築港ノ為メ現在ノ所ニ移転セリ
住職ニ於テ公債証書ノ利子其他信徒參詣者ノ醸
金ニ依ル

九、	管理保存方法	九、	管理保存方法
八、	由來徵証傳說	八、	由來徵証傳說
七、	現狀	七、	現狀
六、	形狀寸尺等	六、	形狀寸尺等
五、	所有者ノ住所氏名	五、	所有者ノ住所氏名
四、	地目地積	四、	地目地積
三、	所在	三、	所在
二、	種類	二、	種類

旧蹟
護国寺
那覇区若狭町
寺地
護国寺 若狭町一丁目四番地
別紙ノ通り
真言宗ノ寺ニシテ不動尊ヲ安置セリ
僧賴重開基察渡創建往時ハ国王ノ祈願所ニシテ
旧名安禪寺ト号シ海山寺三老院トモ云フ大小ノ
二鏡アリ景泰七年ノ鋸造ナリ此寺ハ觀潮ノ名所
トシテ名高シ本堂ニハ不動尊ヲ安置セリ
住職ニ於テ公債証書ノ利子其他信徒參詣者ノ醸
金ニ依ル

種類	名稱	所在地	地目	所有者	現状	形状	由來	微証	傳說
史蹟名勝地	浦添城趾	浦添村字仲間	原野、拝所、約三千坪	大部分個人有 部落有	浦添村中央丘山ヲ占メ東西北二約半里長ク連ル	石廊処々ニアリ雜木繁茂シ其平坦ナル処ハ渾テ茅其他雜草生	茂リ風景絶佳ナリ	ナシ	為朝ノ子舜天ノ居城タリシ処ニシテ當時舜天ハ人望甚ダ高ク十五才ニシテ浦添按司ニ推サレ長ジテ文治三年□琉球ノ王位ニノボリ爾後三代（舜天、舜馬、義本）七十□・・・間其朝廷ノ統治ナリシカバ當時勢力アリシモノハ浦添□□人ナリシ

資料十六	受理文
受理日	大正十年六月二十七日
受理番号	学四七五ノ六
庶第七三三二号	
大正十年六月廿四日	
冲縄縣内務部長 殿	中頭郡長 粕谷哲三郎 印
史蹟名勝地調ノ件回答	
三月九日学第四七五ノ一号ヲ以テ御照会相成候史蹟名勝地調ノ件、件別紙ノ通り取調及御回報候也	

九、管理保存方法	沖繩縣ノ直轄ニ屬シ縣ニ於テ管理ヲナシ居レリ	勝ト為ス	那霸區通堂町及垣花町	明治橋	名勝
八、七、六、五、四、三、二、一、	沖繩縣有 別紙ノ通り	渡地垣花ノ聯絡ナリ明治初年架工ス古クハ橋座ヲ海中ニ置キ御物城ノ西方ヲ通過シタリシガ水流激シクシテ橋水ク保タズ今ハ東ニ轉ジテ奥武山ニ擁リ南北二橋ニ別ツ明治三十六年ノ改案ナリ全長二丁十九間縣下第一ノ長橋ナリ觀月ノ名	那霸區及島尻郡ノ通路	那霸區及島尻郡ノ通路	那霸區及島尻郡ノ通路
地積	沖繩縣有 別紙ノ通り	沖繩縣有 別紙ノ通り	沖繩縣有 別紙ノ通り	沖繩縣有 別紙ノ通り	沖繩縣有 別紙ノ通り
所有者ノ住所氏名	沖繩縣有 別紙ノ通り	沖繩縣有 別紙ノ通り	沖繩縣有 別紙ノ通り	沖繩縣有 別紙ノ通り	沖繩縣有 別紙ノ通り
寸尺等	沖繩縣有 別紙ノ通り	沖繩縣有 別紙ノ通り	沖繩縣有 別紙ノ通り	沖繩縣有 別紙ノ通り	沖繩縣有 別紙ノ通り
現狀	沖繩縣有 別紙ノ通り	沖繩縣有 別紙ノ通り	沖繩縣有 別紙ノ通り	沖繩縣有 別紙ノ通り	沖繩縣有 別紙ノ通り
由來徵証傳説	沖繩縣有 別紙ノ通り	沖繩縣有 別紙ノ通り	沖繩縣有 別紙ノ通り	沖繩縣有 別紙ノ通り	沖繩縣有 別紙ノ通り
所在地	沖繩縣有 別紙ノ通り	沖繩縣有 別紙ノ通り	沖繩縣有 別紙ノ通り	沖繩縣有 別紙ノ通り	沖繩縣有 別紙ノ通り
種類	沖繩縣有 別紙ノ通り	沖繩縣有 別紙ノ通り	沖繩縣有 別紙ノ通り	沖繩縣有 別紙ノ通り	沖繩縣有 別紙ノ通り

ト往古浦添ハ沖縄ノ中心タリシト傳ヘラ

種類	所在地
史蹟名勝地	寺ノ洞
地目	浦添村字牧港
所有者	保安林
形状	地積約十二三坪
現状	部落有 管理者 浦添村長 棚原正秀
其他	洞窟内ニシテ天井七八尺位 卵田形
由來徵証傳説	宇牧港後北方岸壁上ニアリ周囲雜木繁茂シ一見洞穴ノ如シ

文治年間（七百三十有余年）源為朝今帰仁運天港ニ上陸シ以來威武ヲ揮シ忽ニ琉球全土ヲ征服シ全島ノ要鎮浦添城ニ拠リ茲ニ渠加快心ノ一天地ヲ築城シ大里按司□ヲ娶リ四兒ヲ挙ヶ統治數年ヲ經ルニ至リタリ□・・・為朝ハ力ノ偉大タルト共ニ一面情ノ偉人ナリシト見エ□・・・朝月ノ夕遙都ノ方恋シサニ悶々ノ情ヲ抱キ心ナラ□・・・數年ヲ送リシ遂ニ奮然トシテ意ヲ決シ牧港ヨリ帰帆ヲ挙ケタリト為ニ妻子為朝ノ再来ヲト傳ヘラル 待チシ處ニシテハジメハ待港ナリシヲ遂ニ牧港ニ転化シタリ

史蹟名勝調査事項（宜野湾村）

種類	名称
一、種類	宮
二、名称	普天間宮
三、所在地	沖縄縣中頭郡宜野湾字普天間
四、地目地積	社地並ニ山林
五、所有者ノ住所氏名	管理者字普天間六五四番地 與儀達忠
六、形状寸尺等	形狀平屋瓦葺縱横共壹間
七、現状	位置字普天間ノ東北端、区域内字普天間内周囲ノ状況雜木林、松及雜木及竹等ヨリナレル混諧林ニシテ大凡二百四五十年ノ松五分ノ一ト其他ハ數□・・・ナリ

八、由來徵証傳説

■男命也 普天間山熊野大權現本宮、伊弉諾ノ命右事知為勸諸自是近里之人奉信仰為祈願成時安谷屋村有夫婦不傳其姓名勤刀為作毛雖然每年不熟而畓貢納剩家貧苦惱無術因婦謂夫云妾壳身未進貢物納于公庫矣盡夜主人之日課之暇勤紡夫者出精力致耕作若得天惠互渡世安全時又為夫婦不朽之契紅淚而相別後婦切髮賣于市以其価壳香花參詣于件之名像三四箇年也 九月參詣之夜當于今之鳥居邊忽然遇一老翁

若疑變化者驚汗而不能遺步欲退去勿驚異行遇而可致社參且片時可預汝此物云々答云妾為人之奴婢速々故不得已而守之老人去不來移時無為奈何先遂參詣歸路再不見老人故彼預物于首里持來翌夜又雖參詣不遇前夜之老人及二三次故祈願遇哉■矣得此金身代者餘然今遠乞■主■奴有■乎茲■勤仕■年後達念願出之■趣切身代■・・・身代回夫之家因為結願不異於前夕而夢之吉明白也於之解疑開見出正黃金地祥夢大造厨子安置■・・・權現之靈爾是也可秘々々其後家富安堵

九、管理保存方法 管理内務者神祇局ノ元ニ社掌ヲシテ管理ス

史蹟名勝調査
史蹟

種類	名称
一、種類	喜味城跡
二、名称	讀谷山村字座喜味城原四、一〇八番
三、所在地	讀谷山村字座喜味三、五三一番地 與久田蒲
四、地目地積	大円形ニシテ其周囲百七十一間アリ
五、所有者ノ住所氏名	村ノ中央ナル字座喜味ノ後方最モ高キ所ニアリ
六、形状寸尺等	テ区域内ニハ七、八十年以上ノ松ノ老木生立チ
七、現状	周囲ハ高サニ丈位ノ石垣ヲ以テ周囲之眺望絶佳ナリ破壊ノ程度ハ約二割位ナリ
八、由來徵証傳説	今ヲ去ル四百年前保（「護」のあやまりか）佐丸按司ノ築キシ城ナリト
九、管理保存方法	所有者ニ於テ管理ス

○、其他必要ナル事項

種類	名称
一、種類	名勝地
二、名称	暫波岬
三、所在地	保安林 四町六反七畝十九歩
四、地目地積	讀谷山村字宇座岬原二、二〇五番
五、所有者ノ住所氏名	讀谷山村字渡慶次外一ヶ字有
六、形状	海中ニ長ク突出シタル高サニ丈位ノ断崖絶壁ニシテ東西四百間モ相連リタル平原ナリ
七、現状	シテ全面芝生ヲ以テ覆ワレ一見青毛布ヲ敷タ 村ノ西北端ナル字宇座ノ後方広漠タル原野ニ連続シテ全面芝生ヲ以テ覆ワレ一見青毛布ヲ敷タ ルガ如ク風景頗ル佳ナリ

八、由來傳説
九、管理ノ方法

天然自然ノ風景ニシテ他ニ傳説由來ナシ
所有者ニ於テ管理ス

③ 史蹟名勝調査事項
史蹟
越來城趾（越來グスク）

越來村字越來小字前原七百五番地
保安林、地積七反一畝二十六歩

一、種類
二、名称
三、所在地
四、地目
五、所有者ノ住所氏名
六、形状寸尺等

円形ノ高地ニシテ週囲八百間位アリテ城壁ノ内
二個人有畠地アリ
越來村字越來ヲ距ル約一町余ノ東南ニ位置シ区
域内雜木生ヒ茂リ東南ハ凹地ニシテ田圃ニ面シ
□・・・上流ナリ西北ハ越來村字越來美里村字
西□・・・週囲ノ城壁ヲ見ルニ幾百年ノ歲月ヲ
経タル為□・・・如キモ大部崩壊シ居ルモ今尚
古城趾タル

此城趾ハ今ヲ去ル四百年前越來按司ノ築キシモノナルモ勝連按司亞麻和利ガ首里城襲撃ノ野心アルヲ聞キ美里村字知花ニ居リシ鬼大城途中ニ於テ亞麻和利ノ勢力ヲ挫カソ為メ越來城趾ヲ借り受ケタルモノナリト傳ヘラル今美里村字宮里屋号石垣家ニ鬼大城ノ衣裳アリ

樹根ガ石垣ニ巻キ付クヲ以テ崩壊ヲ防止スルニハ最上ノ方法ナリト思惟ス 尚ホ斯クノ如キ史蹟ハ永久ニ保存致シ度シ

九、管理保存方法

十、ナシ

史蹟名勝調査 其ノ一

史蹟

越來城趾

保安林

約一段歩

美里村字伊波七三番地

伊波政宜

一、種類
二、名称
三、所在地
四、地目
五、地積
六、現状
七、現状

八、由來
九、管理保存ノ方法

古昔伊波按司ノ居城ナリシト傳フ
按司ノ五世ノ孫伊波親雲上仲賢弘治六年□移居
首里王府ヨリ伊波村ノ地頭職ニ任ゼラレシ嘉靖二十二年癸卯七月八日不祿八十八、ト傳フ
地主之ヲ管理シ保安林トナリ居ンヲ以テ造林スルコトトナレリ

④ 史蹟名勝調査 其ノ二

史蹟

貝塚

史蹟

美里村字伊波小字角石一〇四八番地

原野

史蹟

三尺位ノ土ヲ以テ蔽ハル

丘陵ニアリ數度、学者、研究者ニ□・・・掘セ

ラル

トイク

種々ノ遺物ヲ發掘シ有益ナル研究ノ資料□・・・

ト

地主ガ管理ス

九、管理保存方法

史蹟（古墳ヲ除ク）名勝調査事項

史蹟

勝連城跡

史蹟

勝連村字南風原三千七百五十九番地

小字名ハ

赤吹ト称ス

保安林二反八畝十八歩

天馬船形ニシテ三十尺以上アリ

位置ハ勝連村字南風原

区域内及周囲ノ状況並破壊ノ程度

勝連村字南風原区域ニシテ突兀タル丘上ニアリ

リ周囲ハ石垣ヲ以テ築キ城壁ハ破壊セシモ今共

名□・・・ヘタリ

今ヲ去ル四百年前琉球千古ノ英雄勝連按□・・・

ノ築キタル所ナリ

史称傳續ノ為保存ノ必要アリ

九、管理保存方法

一〇、ナシ

五、所有者住所氏名

六、形状寸尺
七、現状

八、由来徵証伝説

字恩納ノ西岩大裾礁ノ上ニアリテ名護湾頭ニ突
出シ全芝生ヲ以テ蔽ハレ前方遠ク伊江、水無、
瀬底ノ島々ヲ望ミ右ニ名護左ニ残波岬ヲ控工風
景絶景ノ所ナリ。今日ヨリ百數十年前ノ或年尚敬王國頭□・・・此
ノ地ニ遊バレ事アリ。恩納ニテハウスダイ□・・・
以テ歓迎ヲナセリ。踊人ノ中ニ恩納ナヒト云□・・・

・詩ヲ詠ジテウスダイコ節ニ唱和セシメ而シテ
泰平□・・・代ヲ謳歌セリ王御感斜メラズ其詩
オラ嘆賞セリナリ

◎波の声もとまれ、風の声もとまれ、首里天加那
志美殿機拝ま□・・・此ノ時王ハ女詩人ヲ讚美
ナサルト共ニ此ノ地ノ風景絶景ニシテ広野タル
ニ御心喜バサレテ「萬人ヲ座セシムベキ（勝）
地ナル哉」ト仰セラレシニヨリ此地ヲ得ラリト
伝ヘラル

一説ニ曰ク尚敬王ニアラズシテ其御子尚穆王ナ
リトノ説アリ

九、管理保存ノ方法

金武村

一、種類
二、名称
三、所在地
四、地目地積
五、所有者住所氏名
六、形状寸尺

史蹟

觀音寺

金武村字金武後村渠

字金武後村渠二二二番、一一〇八歩

堂宇間数梁行二間半 桁行二間半
庫裏間数梁行三間半 桁行五間 屋根ハ瓦屋根
ナリ

金峰山觀音寺ハ字金武ノ西北端ニアリテ字金武
区域ニ属ス境内ニ八庭園及畑等アリテ周囲ノ丘
陵ヲ金峰山ト称シ樹木繁茂セリ、建物ハ稍腐朽
ノ状態ニアリ境内ニ洞窟アリ、深サニ町山背ニ
通ズ洞内ニ千手觀音□・・・現今奉安スルモノ
本尊厨子共ニ陶製シテ扉ニ・・・癸酉十二月
十三日現在瀬源ノ文字ヲ刻ス（我文久三□・・・
洞内鍾乳石及石筍相接シテ希観ヲ呈ス□・・・
昔時此ノ洞窟ニ大蛇棲息シ人民其災禍ニ罹ル□

七、現状

八、由来徵証伝説

□タリシガ日秀上人呪文ヲ唱エシ之ヲ除ケ初メ
テ安堵セリトイウガ今ハ斯ル事ナシ

海シテ富蔵港ニ來リ寺ヲ金武村ニ剏メ自ラ弥陀
藥師正觀音三像ヲ彫刻シテ安置ス是レ同寺ノ起

源ナリ其後漸ク衰ツルニ至リテ遂ニ此ノ寺ヲ禪

宗ニ属セシメタリシカ靈山此ヨリ衰エ神明亦現

ハレズ、此処ニ於テ寛文二年（二百三十四年前）
尚質王具志川王子ニ命シテ再ビ真言宗ニ復セシ

メ元禄十二年（十七年後）尚貞王代ニ至リ住持

慧郎新ニ紫磨金三尊仏ヲ請ジ且ツ初メテ屋根瓦

ヲ用ヒ旧

觀ニ更メタリトイフ

從來ハ寺錄ヲ賜ヒ且建物等ハ國庫ニ於テ修理シ

来リシガ明治四十三年法律第五十九号沖縄縣社

祿処分法發布ノ結果土地建物ヲ其ノ寺ニ無償下

渡セラル

九、管理保存方法

久志村

一、種類
二、名称
三、所在地
四、地目地積
五、所有者住所氏名
六、形状寸尺

久志村

久志村字久志

觀音寺

久志村字久志

史蹟

久志村字久志保安林内ニ九尺四方ノ□・・・

堂内石像ノ觀音菩薩ヲ祀ル是尚貞王十九年貞享

四年久志間切領主向経（豊見城王子朝良）創建

ニ係ルモノナリト

管理者無之為別ニ方法無シ

不明

ナシ

高サ五尺ノ石像ナリ

久志村

國頭村

國頭君（俗ニトーチーク）

土帝君

國頭村字奥間ノ後方保安林ノ内

免租地

共有拝所（四ヶ字共有）

高サ一尺五寸ノ陶像

字奥間ノ後方丘上ニ約十坪位ノ平坦地ノ約二坪

位ノ瓦葺ノ家ニ右陶像ヲ設立セリ

奥間田圃ヲ開拓シタル農業ノ神トシテ祀ラル

九、管理保存方法

古代ニアリテハ字奥間ノ字費ニテ毎年旧二月二日全字民ガ札祭ヲセシガ現今ニアリテハ桃原、比地、濱四ヶ字ノ人民デ其費用ヲ負担シ永遠ノ保存ヲ維持ス

三、所在地
四、地目地積
五、所有者住所氏名

今帰仁村字今泊アタイ原
山林、三町七反四畝九歩
今帰仁村字今泊百二十二番地 玉城精五郎
全 村全字二、二六四番地 仲本吉次郎
上二一六番地 玉城精五郎
那覇区久米町二ノ一番地 具志川マカト
今帰仁村字玉城二十一番地 崎山朝陸
名護村字安和百六拾九番地 大城保元

大宜味村

種類

史蹟

左馬ノ岬
大宜味村字渡野喜屋左場原
大部分ハ砂丘 一部原野
官有

所在地

左馬ノ岬
大宜味村字渡野喜屋左場原
大部分ハ砂丘 一部原野
官有

地目地積

左馬ノ岬
大宜味村字渡野喜屋左場原
大部分ハ砂丘 一部原野
官有

所有者住所氏名

左馬ノ岬
大宜味村字渡野喜屋左場原
大部分ハ砂丘 一部原野
官有

形状寸尺

左馬ノ岬
大宜味村字渡野喜屋左場原
大部分ハ砂丘 一部原野
官有

現状

左馬ノ岬
大宜味村字渡野喜屋左場原
大部分ハ砂丘 一部原野
官有

種類

左馬ノ岬
大宜味村字渡野喜屋左場原
大部分ハ砂丘 一部原野
官有

地目地積

左馬ノ岬
大宜味村字渡野喜屋左場原
大部分ハ砂丘 一部原野
官有

所有者住所氏名

左馬ノ岬
大宜味村字渡野喜屋左場原
大部分ハ砂丘 一部原野
官有

形状寸尺

左馬ノ岬
大宜味村字渡野喜屋左場原
大部分ハ砂丘 一部原野
官有

現状

左馬ノ岬
大宜味村字渡野喜屋左場原
大部分ハ砂丘 一部原野
官有

種類

左馬ノ岬
大宜味村字渡野喜屋左場原
大部分ハ砂丘 一部原野
官有

地目地積

左馬ノ岬
大宜味村字渡野喜屋左場原
大部分ハ砂丘 一部原野
官有

所有者住所氏名

左馬ノ岬
大宜味村字渡野喜屋左場原
大部分ハ砂丘 一部原野
官有

形状寸尺

左馬ノ岬
大宜味村字渡野喜屋左場原
大部分ハ砂丘 一部原野
官有

現状

左馬ノ岬
大宜味村字渡野喜屋左場原
大部分ハ砂丘 一部原野
官有

種類

左馬ノ岬
大宜味村字渡野喜屋左場原
大部分ハ砂丘 一部原野
官有

名称

左馬ノ岬
大宜味村字渡野喜屋左場原
大部分ハ砂丘 一部原野
官有

名称

左馬ノ岬
大宜味村字渡野喜屋左場原
大部分ハ砂丘 一部原野
官有

史蹟
塩屋校ニ突出シ北方ニ面シタル岬ナリ
昔時國頭按司薩摩ニ趣キ島津家ニ仕ヘ勲功アリ
テ左馬頭ヲ賜リ帰村ノ際此處ヨリ馬ヲ飛ビ越エ
サセルニ因リ此名アリトイウ
別ニナシ

八、由來徵証伝説

今帰仁城址ハ今泊ノ南丘ニアリ清水タタル
親川ヨリ松並木ニ沿ヒ大理石散在セシ石径ヲ曲
折レ挙登スルコト數町ニシテ 城域ニ入ル
内ハ竹木繁茂ス本門ヨリ進ミ行ケハ本丸ノ中央
ニ小祠アリテ石碑並石灯籠數基アリ
ハ數個ノ無格社アリ面二百尺ノ高地ニアリテ伊
平屋島及辺戸岬ニ相対シ後ニ公方ノ嶽ヲ負ヒ東
ハ數十丈ノ絶壁ニシテニ崎嶇要害ノ地ニシテ
且風光明媚ニシテ石垣ヲ以テ三重ニ囲ヒ高サ
数十セリト雖今尚昔ノ面影ヲ在ス
今ヲ去ル五百九十年前後醍醐天皇ノ御代我
□・・・ニ於テハ第三王朝ノ四世ニ当レル王城
王酒色ニ耽リ田ヲ好ミ政網日ニ荒廃シ諸按司皆
会同ノ礼ヲ怠リ國中漸ク四分五裂リ此ニ於テ大
里按司承察度先ツ叛シテ南山王ト称セリ時ニ今
帰仁按司怕尼芝ハ今帰仁、羽地、名護、金武、
国頭ノ五郡ト伊江其他ノ諸島ヲ占有シ今帰仁城
ニ居リテ山北諸郡ヲ統括シタリ 而シテ南山中
山ガ明ニ通シテ冊封ヲ受ケシ後怕尼芝モ亦之ニ
倣ヒテ貢ヲ明ニ輸シ其ノ冊封ヲ受ケテ琉球國山
北王ノ称号ヲ得ルニ至レリ怕尼芝没シテ其ノ子
珉ヲ経テ其ノ子樊安知繼キテ山北方トナル安知
資性剛毅ニシテ武勇絶倫夙ニ中山ヲ討ツノ志ア
リ、名護羽地國頭ノ諸按司安知ト隙アリ早馬ヲ
以テ急ヲ中山王ニ訴フ時佐敷按司尚巴志ハ中山
ヲ攻落シ其父思紹王位ニアリ、思紹猛虎ノ丘ヲ
駆リ山南ヲ討チテ山北ヲ襲ヒ一渦千里ノ勢ヲ以
テ国内ヲ統一セントノ方策ヲ樹立センガ事急ナ
ルオ以テ直チニ子巴志ヲ遣ハシテ之ヲ討タシム
巴志諸按司ヲ部署トシテ兵ヲ率ヒ大挙シテ今帰
仁ヲ攻メタリ□□□北ノ地嶮岨ニシテ城兵勇猛

標榜ニシテ防備嚴シ□数回会戦スルモ容易ニ抜ク能ハサリンガ□・・・二内応シ城中ニ火ヲ放チシガバ王大イニ□・・・斬レリ彼護國ノ神トシテ一靈□・・・怠タラザルシモソノ靈験ナキヲ憤リ□・・・シ己モ自刃シテ三世ニシテ滅亡セリ徵証受劍石、屋敷跡伝説ナシ将来ノ管理保存ニ関スル意見トシテハ特ニナキモ今通字今泊ニ管理セシムルコト可ナラン

九、管理保存方法

二、種類
名称
所在地
四、地目地積
五、所有者住所氏名
六、形状寸尺
七、現状

史蹟名勝

運天港
今帰仁村字運天
東西十六町四十間 南北十町
ナシ

運天港ハ今帰仁ノ東北端字下運天ニアリ前面屋我地島ニ対シ風景佳麗夏時最毛納涼ニ適ス

内水深ク静穏ニシテ天然ノ良港ナリ海軍省ノ貯水庫ノ設備アリ近来港内淨田ニ台南製糖会社

ガ棧橋ヲ架設セリ茲ヨリ会社迄一里余鉄路ニヨリ貨物運搬ラナス

慶長十四年島津家久公琉球ガ貢賦ヲ怠シ為メ問罪ノ師ヲ派セシトキノ上陸ノ地ナリ□・・・運天ハ永萬元年(七百五十二年前)源為朝□・・・所ナルヲ以テ名高シ沖縄誌ニ云□・・・「為朝ノ琉球ニ到ルヤ、洋中風ニ遭ヒ船□・・・皆懽ル為朝運ハ天ニアリ何ゾ□・・・港ヲ名ツケテ運天トイウ、今ノ今帰□・・・ナリ」

九、管理法

伊江村
照太寺(郡志ヨリ)

照太寺ハ字西江前ノ西方一里ニアリ浮龜山ト号ス弘治元年皇紀二千二百十五年(明ノ嘉靖三十三年ニシテ三百六十二年前)此地毎夜奇光ヲ放ツ王府人ヲ遣シテ視セシメシニ古鏡ヲ獲タリ、依ツテ老僧輩ヲ召シテ之ヲ問フ諸僧対ヘテ曰ク「是天照大神ノ垂跡ナリト尚清王即チ祠ヲ建テ鏡ヲ奉安シ老僧ヲシテ監護セシメシト云ウ、後寛永十五年(二百七八十年前)尚豊王之ヲ修復セシメタルコト旧記ニ見ユ、尚貞王三十五

八、由來徵証伝説

資料十九
受理日 大正十一年五月一日
受理番号 学四七五ノ六
大正十一年四月二十九日

首里市長 高嶺朝教 印

内務部長 金澤正雄 殿
客年三月九日附学第四七五ノ一号ヲ以テ御照会相成候本市内ニ於ケル史蹟名勝天然紀念物調査二閑スル件了承然ル処本件ハ調査上□□困難ヲ感じジ為メニ今迄遲延致候処漸ク別紙ノ通り□・・・致候条此段及回答候也

史蹟(古墳ヲ除ク)名勝調査事項

圓覺寺
一、寺院

圓覺寺
二、寺院

圓覺寺
三、首里市當藏町

圓覺寺
四、寺域

圓覺寺
五、首里市當藏町

圓覺寺
六、首里市大中町尚侯爵家

圓覺寺
七、寺八今猶古色蒼然トシテ県下第一ノ巨刹ナル面影ヲ存シ□・・・

年ノ條ニ照太寺住僧五年輪流(交替)云々ノ記事アリ祠後一帯丘陵ヲナシ松樹及雜木林立ス□・・・権現堂アリテ古鏡ヲ安置セリ。照太寺□・・・堂管護ノ為メニ建立セラレタル□・・・音菩薩禪宗臨濟妙心寺派ニ属ス□・・・派遣ノ一僧此ニ住リ、同寺ノ由来□・・・嘉靖年間伊江山毎夜放大光射斗牛間居民□・・・且怪遂將此事奏之王。由是尚清王差使往伊江山視之使臣往到伊江山、其夜放光愈々熾、自暮達旦不敢滅焉翌日使臣徘徊于草野間、以為尋拾焉、果有拾得一古鏡、遂取袖之、意置千洞中選朝、復食于比尚清王乃召老僧輩問之、諸僧皆答曰、乃是天照大神之所垂迹者也速建靈社、奉安之于其中、可以崇信焉、故王食輔民構茆社並草庵、令僧一人而監焉、名其寺日照太山号淨龜萬歷三十九年辛亥、尚寧王流薩州回駕到本国、此時王多建修神社仏閣、而功力不能及之、萬歷四十八年庚申、忽然龍体染病而薨、乃崇禎十一年戊寅尚豐王繼尚寧王之志、令重修寺並社、而令月江□堂而守焉、月江僧名井在西堂

シ徐口ニ昔時ノ壯觀ヲ偲バシムルモノアリ
八、寺ハ禪宗ノ惣本山、旧藩主尚侯爵家歴代ノ香菴□・・・

真王十六年我ガ明應元年壬子先□・・・
地ヲ首里城久慶門ノ北ニ相シテ工ヲ□・・・

五、首里市大中町尚侯爵家

圓覺寺山門外圓鑑池ノ中ニ在ル古雅優麗本縣ニ於テ稀ニ見ル堂祠タ

堂ハ今猶亦古色蒼然人目ヲ惹クモノアレド周囲ハ稍々荒敗セリ

リ

堂モト經堂ニシテ尚德王三年我ガ寛正四年、王使ヲ朝鮮ニ遣シ、國

好ヲ修シ鸚鵡孔雀等ヲ贈ル、朝鮮世祖李祿亦方冊藏經一部ヲ以テ使

ジ堂宇ヲ修セシ、圓覺寺方丈内ノ辨財天像ヲ移シテ堂内ニ安置セシ

ム其後像又□・・・薩州ヨリ新像ヲ将来ス今祀ル所ノモノ是也

池中ニ建テ石橋ヲ架シ中ニ經卷ヲ藏ス、慶長十四年薩軍ノ為メニ堂

破ラレ、經散ゼシヲ以テ元和七年尚豊王、圓覺寺住持恩叔長老ニ命

者ニ託シ是レニ報ズ、文龜二年、尚眞池ヲ圓覺寺門前ニ堀リ、堂ヲ

リ

芥穏和尚ノ畫像ヲ掛け、像ハ尚眞王十九年我ガ貞亨□・・・住持石峰

和尚ノ題請ニ由ル、佛殿ノ西ニ大殿アリ龍淵殿ト名ヅク、尚圓王以

下歴代ノ神主ヲ祀ル殿ハ享保六年正月一日火ヲ失シテ炎上シ尚清王

神主、並尚豊、尚賢二王ノ絵像此ノ時焼失、佛殿照堂山門幸ニ免ル

ノ事ヲ得タリ、住持覺王罪ヲ以テ八重山島ニ流罪セラル、龍淵殿ノ

左ニ方丈アリ右ニ客室アリ方丈ノ壇上、虛空藏菩薩ノ木像ヲ安置ス、

明應三年東照堂ヲ建テ元龜二年西照堂ヲ建ツ、照堂内獅子塑像アリ

元禄六年國王尚貞命ジテ脩補ヲ加ヘシメシニ腹中一尚眞王之御宇、

正徳十六年辛巳、彫造之、而安置于祖廟云爾」ノ銘出デタリト曰フ、

照堂モト柿葺ナリシヲ承應元年瓦ニ改ム、佛殿ノ北ニ慎終堂アリ、

是レ先王回忌ニ當リ木主ヲ遷シテ祭祀ヲ脩スル處トス、今首里市役

所ノ地ハ其跡ナリ、壇上モト藥師、勢至、弥勒ノ三像ヲ安置ス、像

後破損シ元禄六年、住持除外福建ヨリ新像ヲ将来シテ是レニ代フ、

所掛ノ梵鐘凡テ三中二個ハ大明弘治八年乙卯ノ鋸ニ係リ一ハ康熙三

十四年乙亥ノ鋸造ニ成ル、□云康熙三十四年乙亥夏、住山蘭田、為使

僧、赴鹿□・・・載□船、遣山城、重鋸之也。三年而到来也。時當

丁丑之□・・・而掛着之。住僧蘭田為之銘。云々凡ソ本縣諸寺所掛

ノ洪鐘、凡テ大工藤原其□曰ヒ小工□・・・鐘銘ニ由リテ見レバ山

城辺ニテ大□□監督ノ□ニ□・・・沸殿ヨリ山門ニ至ル間、方池ヲ

迄□・・・愛スベシ、手法ハ天女橋、世持橋、□・・・ノ左ニ香積

厨アリ、厨内韋馱天□・・・像ヲ安ズ□・・・ニ移リシガ後破壞シ元禄

六年、際外和尚福建ヨリ新像ヲ□・・・荒神堂ハ尚眞王ノ創建三寶

大荒神ヲ祀ル、一山ノ鎮守タリ□・・・

住職ヲシテ一般ノ管理ヲナサシメ時々修繕ヲ行ヒ旧態□・・・

寺ハ県下第一ノ巨刹ニシテ善男善女ノ參詣者四時□・・・他府縣ヨ

リ來遊スルモノ必ズ足ラ茲ニ向ケザルモノナシ

六、首里市大中町尚侯爵家

圓覺寺山門外圓鑑池ノ中ニ在ル古雅優麗本縣ニ於テ稀ニ見ル堂祠タ

リ

堂モト經堂ニシテ尚德王三年我ガ寛正四年、王使ヲ朝鮮ニ遣シ、國

好ヲ修シ鸚鵡孔雀等ヲ贈ル、朝鮮世祖李祿亦方冊藏經一部ヲ以テ使

ジ堂宇ヲ修セシ、圓覺寺方丈内ノ辨財天像ヲ移シテ堂内ニ安置セシ

ム其後像又□・・・薩州ヨリ新像ヲ将来ス今祀ル所ノモノ是也

池中ニ建テ石橋ヲ架シ中ニ經卷ヲ藏ス、慶長十四年薩軍ノ為メニ堂

破ラレ、經散ゼシヲ以テ元和七年尚豊王、圓覺寺住持恩叔長老ニ命

者ニ託シ是レニ報ズ、文龜二年、尚眞池ヲ圓覺寺門前ニ堀リ、堂ヲ

リ

芥穏和尚ノ畫像ヲ掛け、像ハ尚眞王十九年我ガ貞亨□・・・住持石峰

和尚ノ題請ニ由ル、佛殿ノ西ニ大殿アリ龍淵殿ト名ヅク、尚圓王以

下歴代ノ神主ヲ祀ル殿ハ享保六年正月一日火ヲ失シテ炎上シ尚清王

神主、並尚豊、尚賢二王ノ絵像此ノ時焼失、佛殿照堂山門幸ニ免ル

ノ事ヲ得タリ、住持覺王罪ヲ以テ八重山島ニ流罪セラル、龍淵殿ノ

左ニ方丈アリ右ニ客室アリ方丈ノ壇上、虛空藏菩薩ノ木像ヲ安置ス、

明應三年東照堂ヲ建テ元龜二年西照堂ヲ建ツ、照堂内獅子塑像アリ

元禄六年國王尚貞命ジテ脩補ヲ加ヘシメシニ腹中一尚眞王之御宇、

正徳十六年辛巳、彫造之、而安置于祖廟云爾」ノ銘出デタリト曰フ、

照堂モト柿葺ナリシヲ承應元年瓦ニ改ム、佛殿ノ北ニ慎終堂アリ、

是レ先王回忌ニ當リ木主ヲ遷シテ祭祀ヲ脩スル處トス、今首里市役

所ノ地ハ其跡ナリ、壇上モト藥師、勢至、弥勒ノ三像ヲ安置ス、像

後破損シ元禄六年、住持除外福建ヨリ新像ヲ将来シテ是レニ代フ、

所掛ノ梵鐘凡テ三中二個ハ大明弘治八年乙卯ノ鋸ニ係リ一ハ康熙三

十四年乙亥ノ鋸造ニ成ル、□云康熙三十四年乙亥夏、住山蘭田、為使

僧、赴鹿□・・・載□船、遣山城、重鋸之也。三年而到来也。時當

丁丑之□・・・而掛着之。住僧蘭田為之銘。云々凡ソ本縣諸寺所掛

ノ洪鐘、凡テ大工藤原其□曰ヒ小工□・・・鐘銘ニ由リテ見レバ山

城辺ニテ大□□監督ノ□ニ□・・・沸殿ヨリ山門ニ至ル間、方池ヲ

迄□・・・愛スベシ、手法ハ天女橋、世持橋、□・・・ノ左ニ香積

厨アリ、厨内韋馱天□・・・像ヲ安ズ□・・・ニ移リシガ後破壞シ元禄

六年、際外和尚福建ヨリ新像ヲ□・・・荒神堂ハ尚眞王ノ創建三寶

大荒神ヲ祀ル、一山ノ鎮守タリ□・・・

住職ヲシテ一般ノ管理ヲナサシメ時々修繕ヲ行ヒ旧態□・・・

寺ハ県下第一ノ巨刹ニシテ善男善女ノ參詣者四時□・・・他府縣ヨ

リ來遊スルモノ必ズ足ラ茲ニ向ケザルモノナシ

七、首里市大中町尚侯爵家

圓覺寺山門外圓鑑池ノ中ニ在ル古雅優麗本縣ニ於テ稀ニ見ル堂祠タ

リ

堂モト經堂ニシテ尚德王三年我ガ寛正四年、王使ヲ朝鮮ニ遣シ、國

好ヲ修シ鸚鵡孔雀等ヲ贈ル、朝鮮世祖李祿亦方冊藏經一部ヲ以テ使

ジ堂宇ヲ修セシ、圓覺寺方丈内ノ辨財天像ヲ移シテ堂内ニ安置セシ

ム其後像又□・・・薩州ヨリ新像ヲ将来ス今祀ル所ノモノ是也

池中ニ建テ石橋ヲ架シ中ニ經卷ヲ藏ス、慶長十四年薩軍ノ為メニ堂

破ラレ、經散ゼシヲ以テ元和七年尚豊王、圓覺寺住持恩叔長老ニ命

者ニ託シ是レニ報ズ、文龜二年、尚眞池ヲ圓覺寺門前ニ堀リ、堂ヲ

リ

芥穏和尚ノ畫像ヲ掛け、像ハ尚眞王十九年我ガ貞亨□・・・住持石峰

和尚ノ題請ニ由ル、佛殿ノ西ニ大殿アリ龍淵殿ト名ヅク、尚圓王以

下歴代ノ神主ヲ祀ル殿ハ享保六年正月一日火ヲ失シテ炎上シ尚清王

神主、並尚豊、尚賢二王ノ絵像此ノ時焼失、佛殿照堂山門幸ニ免ル

ノ事ヲ得タリ、住持覺王罪ヲ以テ八重山島ニ流罪セラル、龍淵殿ノ

左ニ方丈アリ右ニ客室アリ方丈ノ壇上、虛空藏菩薩ノ木像ヲ安置ス、

明應三年東照堂ヲ建テ元龜二年西照堂ヲ建ツ、照堂内獅子塑像アリ

元禄六年國王尚貞命ジテ脩補ヲ加ヘシメシニ腹中一尚眞王之御宇、

正徳十六年辛巳、彫造之、而安置于祖廟云爾」ノ銘出デタリト曰フ、

照堂モト柿葺ナリシヲ承應元年瓦ニ改ム、佛殿ノ北ニ慎終堂アリ、

是レ先王回忌ニ當リ木主ヲ遷シテ祭祀ヲ脩スル處トス、今首里市役

所ノ地ハ其跡ナリ、壇上モト藥師、勢至、弥勒ノ三像ヲ安置ス、像

後破損シ元禄六年、住持除外福建ヨリ新像ヲ将来シテ是レニ代フ、

所掛ノ梵鐘凡テ三中二個ハ大明弘治八年乙卯ノ鋸ニ係リ一ハ康熙三

十四年乙亥ノ鋸造ニ成ル、□云康熙三十四年乙亥夏、住山蘭田、為使

僧、赴鹿□・・・載□船、遣山城、重鋸之也。三年而到来也。時當

丁丑之□・・・而掛着之。住僧蘭田為之銘。云々凡ソ本縣諸寺所掛

ノ洪鐘、凡テ大工藤原其□曰ヒ小工□・・・鐘銘ニ由リテ見レバ山

城辺ニテ大□□監督ノ□ニ□・・・沸殿ヨリ山門ニ至ル間、方池ヲ

迄□・・・愛スベシ、手法ハ天女橋、世持橋、□・・・ノ左ニ香積

厨アリ、厨内韋馱天□・・・像ヲ安ズ□・・・ニ移リシガ後破壞シ元禄

六年、際外和尚福建ヨリ新像ヲ□・・・荒神堂ハ尚眞王ノ創建三寶

大荒神ヲ祀ル、一山ノ鎮守タリ□・・・

住職ヲシテ一般ノ管理ヲナサシメ時々修繕ヲ行ヒ旧態□・・・

寺ハ県下第一ノ巨刹ニシテ善男善女ノ參詣者四時□・・・他府縣ヨ

リ來遊スルモノ必ズ足ラ茲ニ向ケザルモノナシ

八、首里市大中町尚侯爵家

圓覺寺山門外圓鑑池ノ中ニ在ル古雅優麗本縣ニ於テ稀ニ見ル堂祠タ

リ

堂モト經堂ニシテ尚德王三年我ガ寛正四年、王使ヲ朝鮮ニ遣シ、國

好ヲ修シ鸚鵡孔雀等ヲ贈ル、朝鮮世祖李祿亦方冊藏經一部ヲ以テ使

ジ堂宇ヲ修セシ、圓覺寺方丈内ノ辨財天像ヲ移シテ堂内ニ安置セシ

ム其後像又□・・・薩州ヨリ新像ヲ将来ス今祀ル所ノモノ是也

池中ニ建テ石橋ヲ架シ中ニ經卷ヲ藏ス、慶長十四年薩軍ノ為メニ堂

破ラレ、經散ゼシヲ以テ元和七年尚豊王、圓覺寺住持恩叔長老ニ命

者ニ託シ是レニ報ズ、文龜二年、尚眞池ヲ圓覺寺門前ニ堀リ、堂ヲ

リ

芥穏和尚ノ畫像ヲ掛け、像ハ尚眞王十九年我ガ貞亨□・・・住持石峰

和尚ノ題請ニ由ル、佛殿ノ西ニ大殿アリ龍淵殿ト名ヅク、尚圓王以

下歴代ノ神主ヲ祀ル殿ハ享保六年正月一日火ヲ失シテ炎上シ尚清王

神主、並尚豊、尚賢二王ノ絵像此ノ時焼失、佛殿照堂山門幸ニ免ル

ノ事ヲ得タリ、住持覺王罪ヲ以テ八重山島ニ流罪セラル、龍淵殿ノ

左ニ方丈アリ右ニ客室アリ方丈ノ壇上、虛空藏菩薩ノ木像ヲ安置ス、

明應三年東照堂ヲ建テ元龜二年西照堂ヲ建ツ、照堂内獅子塑像アリ

元禄六年國王尚貞命ジテ脩補ヲ加ヘシメシニ腹中一尚眞王之御宇、

正徳十六年辛巳、彫造之、而安置于祖廟云爾」ノ銘出デタリト曰フ、

照堂モト柿葺ナリシヲ承應元年瓦ニ改ム、佛殿ノ北ニ慎終堂アリ、

是レ先王回忌ニ當リ木主ヲ遷シテ祭祀ヲ脩スル處トス、今首里市役

所ノ地ハ其跡ナリ、壇上モト藥師、勢至、弥勒ノ三像ヲ安置ス、像

後破損シ元禄六年、住持除外福建ヨリ新像ヲ将来シテ是レニ代フ、

所掛ノ梵鐘凡テ三中二個ハ大明弘治八年乙卯ノ鋸ニ係リ一ハ康熙三

十四年乙亥ノ鋸造ニ成ル、□云康熙三十四年乙亥夏、住山蘭田、為使

僧、赴鹿□・・・載□船、遣山城、重鋸之也。三年而到来也。時當

丁丑之□・・・而掛着之。住僧蘭田為之銘。云々凡ソ本縣諸寺所掛

ノ洪鐘、凡テ大工藤原其□曰ヒ小工□・・・鐘銘ニ由リテ見レバ山

城辺ニテ大□□監督ノ□ニ□・・・沸殿ヨリ山門ニ至ル間、方池ヲ

迄□・・・愛スベシ、手法ハ天女橋、世持橋、□・・・ノ左ニ香積

厨アリ、厨内韋馱天□・・・像ヲ安ズ□・・・ニ移リシガ後破壞シ元禄

六年、際外和尚福建ヨリ新像ヲ□・・・荒神堂ハ尚眞王ノ創建三寶

大荒神ヲ祀ル、一山ノ鎮守タリ□・・・

住職ヲシテ一般ノ管理ヲナサシメ時々修繕ヲ行ヒ旧態□・・・

寺ハ県下第一ノ巨刹ニシテ善男善女ノ參詣者四時□・・・他府縣ヨ

リ來遊スルモノ必ズ足ラ茲ニ向ケザルモノナシ

九、首里市大中町尚侯爵家

圓覺寺山門外圓鑑池ノ中ニ在ル古雅優麗本縣ニ於テ稀ニ見ル堂祠タ

リ

堂モト經堂ニシテ尚德王三年我ガ寛正四年、王使ヲ朝鮮ニ遣シ、國

好ヲ修シ鸚鵡孔雀等ヲ贈ル、朝鮮世祖李祿亦方冊藏經一部ヲ以テ使

ジ堂宇ヲ修セシ、圓覺寺方丈内ノ辨財天像ヲ移シテ堂内ニ安置セシ

ム其後像又□・・・薩州ヨリ新像ヲ将来ス今祀ル所ノモノ是也

池中ニ建テ石橋ヲ架シ中ニ經卷ヲ藏ス、慶長十四年薩軍ノ為メニ堂

破ラレ、經散ゼシヲ以テ元和七年尚豊王、圓覺寺住持恩叔長老ニ命

者ニ託シ是レニ報ズ、文龜二年、尚眞池ヲ圓覺寺門前ニ堀リ、堂ヲ

リ

芥穏和尚ノ畫像ヲ掛け、像ハ尚眞王十九年我ガ貞亨□・・・住持石峰

和尚ノ題請ニ由ル、佛殿ノ西ニ大殿アリ龍淵殿ト名ヅク、尚圓王以

下歴代ノ神主ヲ祀ル殿ハ享保六年正月一日火ヲ失シテ炎上シ尚清王

神主、並尚豊、尚賢二王ノ絵像此ノ時焼失、佛殿照堂山門幸ニ免ル

ノ事ヲ得タリ、住持覺王罪ヲ以テ八重山島ニ流罪セラル、龍淵殿ノ

左ニ方丈アリ右ニ客室アリ方丈ノ壇上、虛空藏菩薩ノ木像ヲ安置ス、

明應三年東照堂ヲ建テ元龜二年西照堂ヲ建ツ、照堂内獅子塑像アリ

元禄六年國王尚貞命ジテ脩補ヲ加ヘシメシニ腹中一尚眞王之御宇、

正徳十四年己卯十一月二十八日

進ヲ講ズル計画ナシ

善男善女ノ參詣者四時常ニ絶ユルコトナシ

- 七、旧堂八十餘年前破壊シタリシヲ大正十年十一月十七日再建□□・
 八、旧記ヲ按ズルニ堂ハ慈眼院ト共ニ元和三年ノ創建ニシテ古来海外渡
 航者ノ崇信殊ニ厚シ夫ノ人口ニ膾炙セル「旅ノ出立、觀音堂千手觀
 音伏シ拝テ」云々ノ歌亦是也
- 九、慈眼院住職其ノ管理ニ任ジ相當ノ維持金ヲ計上シ保存ノ道ヲ講ジ居
 レリ
- 十、堂ハ縣下唯一ノ堂祠ニシテ且ツ景勝ノ地ニ在ルヲ以テ善男善女ノ參
 詣者並觀光客四時絶ユルコトナシ
- 一、龍潭^{リュウツク}
 池沼^{チボウ}
 二、首里市真和志町^{マハジマチ}
 三、首里市周囲一町余^{マツリマチヨリ}
- 四、五、六、七、八、九、十、
 龍潭^{リュウツク}
 池沼^{チボウ}
 首里市周囲一町余^{マツリマチヨリ}
- 瓢箪形ノ池ニシテ周囲ノ樹林ト相映シテ風光絶佳□・
 現今荒廢汚濁昔日ノ美觀ナシ
- 池ハ開鑿ノ年代傳ハラズ尚寧王十六年即チ我慶長九年^{マサニ}・
 餘年ヲ經テ尚寧王十年即チ我慶長九年^{マサニ}・
 文二見工、按フニ尚寧王代城内龍龜ノ水ヲ落シテ圓覺寺前ニ蓮池ヲ
 開鑿シタル事アレバ潭亦此時ニ出来シモノカ、假リニ慶長第一回ノ
 浚渫ヨリ延寶第二回ノ浚渫ニ至ル七十年餘年間ヲ以テ一期間トスレ
 バ尚眞王ヨリ第一回浚渫期ニ至ル迄約九十年ニシテ土沙沈殿ノ期間
 略相當ルヲ見ル
- 九、時々浚渫シ雜草ヲ除去シ保存ノ道ヲ講ジ居レリ
- 十、安國山下ニ在ル池沼ニシテ鮒鯉ノ類多ク棲ムヲ以テ魚小堀トモ称ス
 古ヘ重陽ノ節、爬龍舟ヲ浮ベテ冊封使ヲ饗スルヲ例トセリ
- 一、虎瀬丘^{トガゼ}
 二、虎瀬丘^{トガゼ}
 三、首里市赤平^{アカヒラ}
 四、地積一町三反九畝三十五歩
- 五、首里市^{マツリマチ}
 六、平坦連亘ノ松林屏風ヲ立テタルガ如シ
- 七、現今稍々荒廢シ樹林稀疎ナリ
- 八、修辞ニ石虎山又虎峯ト称ス、峯下モト石虎山□□院在リ□・
 九、時々巡視シテ濫伐ヲ防ギ下草ヲ刈リ保存ノ道ヲ講□・
 古來眺望ヲ以テ鳴り歌ノ名所タリ
- 五、首里市^{マツリマチ}
 六、首里市山川町^{マツリマチヤマカワマチ}
 七、首里市山川町^{マツリマチヤマカワマチ}
 八、首里市山川町^{マツリマチヤマカワマチ}
 九、首里市山川町^{マツリマチヤマカワマチ}
 十、首里市山川町^{マツリマチヤマカワマチ}
- 一、觀音堂^{クンウンドウ}
 二、觀音堂^{クンウンドウ}
 三、觀音堂^{クンウンドウ}
 四、觀音堂^{クンウンドウ}
 五、慈眼院^{シヅエンイエン}
 六、首里市百八十四坪堂ノ建築三十坪
- 七、首里市山川町^{マツリマチヤマカワマチ}
 八、首里市山川町^{マツリマチヤマカワマチ}
 九、首里市山川町^{マツリマチヤマカワマチ}
 十、首里市山川町^{マツリマチヤマカワマチ}
- 一、神社^{ジンジヤ}
 二、社^{ジヤ}
 三、社^{ジヤ}
 四、社^{ジヤ}
 五、社^{ジヤ}
 六、首里市字末吉^{マツリマチシテラキ}
 七、首里市^{マツリマチ}
 八、首里市^{マツリマチ}
 九、首里市^{マツリマチ}
 十、首里市^{マツリマチ}
- 一、萬歳嶺^{マツザイレン}
 二、萬歳嶺^{マツザイレン}
 三、萬歳嶺^{マツザイレン}
 四、萬歳嶺^{マツザイレン}
 五、萬歳嶺^{マツザイレン}
 六、萬歳嶺^{マツザイレン}
 七、萬歳嶺^{マツザイレン}
 八、萬歳嶺^{マツザイレン}
 九、萬歳嶺^{マツザイレン}
 十、萬歳嶺^{マツザイレン}
- 一、保安林^{ボウアンリン}
 二、虎瀬丘^{トガゼ}
 三、首里市赤平^{アカヒラ}
 四、地積三反七畝五十一歩
- 五、首里市^{マツリマチ}
 六、首里市^{マツリマチ}
 七、首里市^{マツリマチ}
 八、首里市^{マツリマチ}
 九、首里市^{マツリマチ}
 十、首里市^{マツリマチ}
- 一、社^{ジヤ}
 二、社^{ジヤ}
 三、社^{ジヤ}
 四、社^{ジヤ}
 五、社^{ジヤ}
 六、社^{ジヤ}
 七、社^{ジヤ}
 八、社^{ジヤ}
 九、社^{ジヤ}
 十、社^{ジヤ}
- 一、普通ノ神社風ニ造リタル古雅優麗ノ建物ニシテ社殿間数二アリ一ハ
 幅三間横二間アリ他ハ幅四間半横三間半アリ
 目下社殿荒廢腐敗朽亦昔日ノ美觀ナシ

八

按フ二正五九月國王巡遊ノ場所ニシテ此先例ハ尚賢ニ始マリシトゾ
舊記ニ云、順治元年甲申正月、尚賢王始幸於末吉社、識名社、次年
乙酉九月始幸於觀音堂、二十年辛酉正月二十日、尚貞王始幸於辨財
天堂以為告祈云爾、社ハ尚泰久代、天界寺鶴翁和尚ノ勸進ト云ウ能

十九、時々巡視ヲナシ修繕ヲ行ヒ保存ノ道ヲ講ジツツアリ
社ハ眺望開豁、南ハ首里城ニ對シ、西ハ遙ニ慶良間□
那覇港並那覇市街ヲ望シ雅人墨客ノ杖ヲ成□・・・

保安林 嶽辨嶽

首里市鳥堀町

首里市

目下荒

嶽頂一祠在リ、久高島ノ遙拝所トス、尚清王代□・・・修□・・・

鳳山川
目下荒廢セルモ他日植樹ヲナシ風致並水源滋養ノ増進□・・

日下荒廃セルモ他日植樹ヲナシ風致
高燥開豁、風光明媚ヲ以テ世ニ聞ユ

沖縄県立博物館紀要

第29号（2003年3月27日発行）

編集・発行 沖縄県立博物館

〒903-0823 那覇市首里大中町1-1

TEL(098)884-2243

FAX(098)886-4353

印 刷 株式会社 尚生堂

BULLETIN
OF THE
OKINAWA PREFECTURAL MUSEUM

NO.29 (2003)

FOLKLORE

- Folkways of Dwellings in Janagusuku, Ogimi Village, Okinawa ······ 1
Shigeo TOBARU

NATURAL HISTORY

- Cenozoic Fossils from Nago City, Okinawa Island, Japan ······ 11
Tsutomu MIYAGI

- Distribution and Present Status of Feral Common Peafowls *Pavo cristatus* in the Sakishima Islands, the Ryukyu Islands ······ 19
Satoshi TANAKA and Kenji TAKEHARA

- A Check-list of the Birds in the Daito Islands ······ 25
Satoru ANEZAKI, Kenji TAKEHARA, Shin MATSUI and Masaoki TAKAGI

HISTORY

- A Note on the Okinawa's Administrative Documents Regarding the Designation of Cultural Properties in Taisho Era ······ 55
Ken SONOHARA